サンタは子供に微笑まない

狩人二乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サンタは子供に微笑まない

【Ｎコード】
Ｎ７５２１Ｕ

【作者名】
狩人二乗

【あらすじ】
十年前、サンタの存在が全世界に広められた。そして、十年後。サンタ試験の幕が上がる。

十年前ｓｉｄｅ３（前書き）

第十八回電撃文庫一次選考落選作品です。非常に読みにくいとは思いますが、もしよかったら評価してください。お願いします。

十年前side3

「僕はね、僕が上手くいかない時、僕が悪いんじゃなくて世界が悪いと思うようにしているんだ」

その若い男は、その男の前に座る少年に向けて優しい微笑みを浮かべたまま呟いた。暗い暗い街の中。街灯が照らす交差点で、誰も何も通らないその場所で、双方共体操座りの状態で向き合う。「君はどう思う？」

「わかんない」誰かの家の塀である冷たいコンクリートに背を預けながら、少年は男に答える。「お兄さん、何なの。いきなり声かけてきて、いきなり変なこと言い始めてさ」

「アハハ。そうだね、そうだ、唐突過ぎた。……今更だけど言っておこう。僕は変質者じゃあない。よって、ボサボサ頭で薄着の君を誘拐しようだとかそういうことは考えていないから、そのつもりでね」

「そんなことといわれてもお兄さん、変なお兄さんじゃん」

「おうっ。君は意外とストレートに物事を表現するんだな」

「まあね」

少年は体操座りのまま得意げになる。「いや、褒めた訳ではないんだけど」と一応の注釈を男が加えると、「まあいいか、君は」と言って男は立ち上がる。「そろそろ時間だ。暇つぶしになったよ。ありがとう」

「……どういたしまして」

「御礼。いいね、ちゃんと御礼を言う子供。僕は好きだよ。君みたいな少年が」

さあ、野郎共。馬鹿げた理想の為に立ち上がる、気高くもなく高貴でもない野郎共。「あ、野郎じゃない人も居た、か」

言いながら、男は少年が向く先を見る。立ち上がった男は成人男性の平均身長を軽く越えており、全体的に細い印象を兼ね備えてい

た。
「いちいちしまらねえよなあ、あんたは」
すると、少年と男が向く先に、人影が現れた。二桁は越している数の、人影。屈強な者もいれば、女性特有のシルエットを映し出す者もいる。子供のような身長を持つ者もいれば、老人のように腰を曲げたままの者もいた。その中の一人である、屈強な体を持つ男の低い声が夜の交差点に響く。「ビシッと決めてくれよビシッと。これからが正念場だろうが」
「いやー、ごめんね皆。こんな調子じゃなきゃやっぱり僕は生きられないみたいだ」
「……ま、それをわかって俺達はあんたについて行くんだがな」
その子供はどうした、と聞かれた男は、暇つぶしに語り合おうかと思ってさ、と答えになっているかどうか微妙な返答をする。その返答に困惑した表情でため息をする屈強な男を見やった後、細い体格をしたその男はもう一度少年に顔を向ける。少年は「え、え、え」と明らかに混乱していた。今まで喋っていた温和そうなお兄さんが、なんだか怖い人達と怖いことをしようとしている。それだけわかれば、少年の恐怖を浮かび上がらせるのには充分過ぎる程だった。
「大丈夫、怖がる必要はないよ。僕らはこれから、粛清をするだけだから」膝を折り、男は笑顔のまま少年に向き合う。「粛清に次ぐ粛清だ。この汚れきった街と、汚れきったとこしえの現世を、粛清してやるんだ」
「粛清……？」
「そう、粛清。僕らは子供の頃から疑問に思ってた。何でこの街はこんな街なのか。僕らの未来の一部を勝手に決め、僕らの行動を勝手に制限する。この街の未来は夢を与える？　希望を与える？　馬鹿言ってんじゃない、ということはすなわち僕らはその夢やら希望やらの礎に過ぎないじゃないか」
そう一気にまくし立てた男に対し、「な、何言ってるのお兄さん」と少年は訪ねる。体を少しだけ震わせながら。しかし少年の顔は、

少しだけ、ほんの少しだけ好奇心を持ち合わせていた。
「……いけないいけない。そうか、君はまだ知らされてないのかな。じゃあ、これ以上言うのはやめようか」
でも、最後にこれだけいわせてもらおうかな。
男は再度立ち上がる。電灯によって微かに照らされる人影をバックにしながら、その人影の内の一人に「結局それ以上言うのかよあなたは」と指摘されながら、男は少年に言う。
「この街はそんじょそこらにある普通の街じゃあない。この街の全包囲が馬鹿デカイコンクリートで囲まれてるのがいい証拠だよ。そう、この街は他の街とは違う。他の街とは違う理由が、ある」
そして、男は。
少年がまだ知り得ない情報を、笑顔のまま語る。「何故ならこの街は、子供達の一日限定救世主――サンタを育成する、街だからさ」
「サンタ？」
少年はこの場の雰囲気に似つかわしくないその単語を聞いて、思わず首を傾げる。
サンタ？
サンタって、あの、クリスマスにプレゼントを運んでくれるサンタクロースのこと？
「うん。恐らく、今現在君が考えてるそのサンタであっていると思うよ。この街に住んではいない外の街の人達は、サンタの姿形どころか名称すらしらないだろうけど」言うと男は立ち上がり、少年に背を向けて複数の人影の元へと歩き出す。「じゃあ行こうか、皆。僕達の人生を粉々にしたこの街に復讐する為に」
「ま、待ってお兄さん！　サンタってどういう意味……この街がサンタを育てるって、どういう意味なの！」
本来ならば。
少年は、この場では恐怖を感じるべきだったのだろう。当然だ。夜中、いきなり訳のわからない大人に話しかけられたと思えば、復讐だなんだといい始め、他の同行が一同に会す。そんな場面を見て、

普通の少年は、普通の少年らしく恐怖を感じるべきだった。
しかし、その少年は。
満面の笑みを、浮かべていた。「本当なの？　この街がサンタの街で、その街に復讐しようとしてくれているの？　何にもプレゼントをくれない、貧乏だからこんな場所で寝るしかない僕を見捨てるサンタに、復讐してくれるの？」
「……へえ。君、思った以上に面白い出で立ちをしているね」
再び男は少年に近づく。少年は喜々とした表情をしながら、期待に満ちた視線を男に向ける。「そうだね。もし、もしだ。僕らの復讐が何十年も先にまた行われるようなことがあれば、君を仲間に加えてあげよう」
えー今回で終わらせるんじゃないの、という女性の声が夜の街に響く。「も、もしかしたらだよ」と男ははぐらかし、「だからね」と言って少年のかじかんだ手を握る。
「君はそれまで頑張って生きるんだ。そしてやがて真実を知ると思う。その時に憤りを感じたら、君は僕らの仲間だ」
だから。
それまで頑張って生きるんだ。「辛い時も、病める時も。何もかもがどうだっていいと思った時も。生きることだけ考えて、生きてくれ」
男の優しい声を聞くと少年は一度だけ頷いた。その顔には何やら決意のようなものが滲み出ており、少年はそして生き続けることを決意する。「うん。頑張る！」
「よし。その意気だ！」男は少年の手を握るのをやめ、声を張り上げた。「聞いたか野郎共！　こんな小さな子でもこんな凄いことを約束出来るんだ！　だったら僕らが復讐を完遂出来ないなんてことは……って、野郎じゃない人もいたっけ」
そのしまらない意気込みを聞いて、複数の人影を含め、少年も口元だけで笑った。なんだか朗らかな気分だった。今の今まで、荒んでいて糞ったれな世の中に絶望していたのに。この、何だか少しだ

け抜けている男が側に居ると、安心出来る。
こうして、男は複数の同志をつれて復讐へと駆り出した。
――この街はサンタを育成する街。サンタしか、居ない街。
他の街とは科学や何やらの技術が格段に違い、しかしそれでいてどの街とも交渉を行えない――他の街の誰も知らない何処かにある街。
サンタがまだ知られていない世界で。
男と同志達は、サンタの存在を世界にしらしめるべく立ち上がる。
こうして、世界にサンタクロースという存在が広まり――その日は『サンタ記念日』と称され、『クリスマス』と称され。
十年の月日が、経った。

そして現在　一

サンタクロースという単語を聞いただけでなんだかファンタジーな展開を期待する人もいるかもしれないが、実際はそんなことは全くない。

これは、サンタしかいない街で二十年以上過ごしてきた俺の持論。だって、考えてもみてくださいよ。

サンタがサンタとして活動するのは、クリスマスと称されている十月二十五日だけ。つまりはその日以外は街の外の人たちと同じ普通の生活をしている訳でありまして、故に、世間一般から大人認められてまだ間もない俺は、正式なサンタにすらなっていない俺は、漫画読んだり映画観たり惰眠をむさぼっていたり、そういう風にぐーたらぐーたらと毎日を過ごしているという次第なのであります、はい。一応街の外と比べたら文明レベルみたいなものは結構発達しているらしいけど、所詮は若返る薬とか瞬間移動とかそういう不可思議な存在が未だに開発出来ていない程度。

ああ。

この街は、外の街とはそんなに変わり映えしない。

それなのに、この街にはサンタが居るんだよなあ。

と、――そんなようなことを考えながら、目的地も何も定めずただぶらぶらとさまよい歩いていた男がいた。間違うことなく、俺だった。空は阿保みたいに快晴。太陽ももう少し仕事の効率落とそうぜ、とため息をつく。何だよ何だこの微妙な暑さは。年がら年中、秋か春かの温度を行ったり来たりしているこの街。そんな堕落精神溢れた気候の街に住む俺は、扱く当たり前に太陽光線を体にあてて汗を流す。

「こういうたまの日差しがあちーんだよ」

愚痴をたれたが、誰も返答してくれる様子がまるでない。当然といえば当然か。何しろここはもうすぐマンションが建つことが決ま

ったらしい空き地だ。黒い土の上に何の抵抗もないまま体操座りをしている俺の目の先には、犬を散歩させるおじさんかおばさんくらいしかいない。

別段何もすることもしようとしていることもないけれど、しかしこれでも今さっき大学の卒業式を終えたばかりの人間だ。故に今現在の心境は、だるい、の一言に尽きる。「いよっしゃあこれから飲みに行こうぜ！」「いやいやまだ昼間だから！」というような会話の応酬にまったく加わることもなくすごすごと立ち去った。だってだるいじゃないか。そんなのにわざわざ参加するなんてだるいじゃないか。その集まりに参加したとして、果たしてお笑い番組を見た時のように笑い転げることが出来るだろうか。答えは至って単純明らかに、そんな訳がねえ、というものになってしまうからため息が出る。

そう。そうなのだ。

俺は友達関係的なアレな心配は全くしたことないし、これからもする気はない。その証拠に、俺が卒業式の後にふらふらしている場面を見かけて、「ん。何してんの」と声をかけてきた奴もいた。しかも同性ではない、異性だ。「ここが重要だ！」と大声を張り上げる。

「クアー！」とカラスが叫んだ。何だ今の叫びはテメーカラスアアンやったろうかこん畜生ーと思ったのだけれど、何もしない。立ち上がろうとすらしない。卒業式の後のことを、太陽さんが輝く空を眺めながら、ため息をつきながら思いだそうとする。

「で、何やってんのあんた」

「うおあっ！」思い出そうとしたら、鼓膜が人間の女性の声によって振動する。空を見上げる視界の中にその声の主の顔が。「……何だ、ツチクラかよ。いきなり登場して驚かせんな」

「冷たい反応をするのね、あんたは」

言いながら、俺は「どっこらしょ」と立ち上がる。その様子を見ながら、「おっさんか」と彼女は呟く。やれやれだぜとでもいいたげな表情の彼女、ツチクラ。黒い髪は短く切り揃えられ、身長は女

性としてはまあまあ高い方。キリッとしたキツネみたいな目が俺を残念なものを見る目で見つめる。なんかＯＬみたいな格好してるなこいつと思ったら、ああそういえば卒業式の後だったんだという思考にたどり着く。うおっ。てことは俺も似たような格好をしていて、その格好のまま地べたに座っていたということかっ。何考えてんだ俺。

「……何なのよ。私の顔みた直後にポケーっとしちゃってさあ」ハァ、と大袈裟なため息をつく彼女。「何なの？　倦怠期？」

「誰と誰のだよ！」

「あれ、違ったか。じゃああれだ、ホルモンバランスが崩れたか何かだ」

「大学卒業式の後になんでそんな症状が発症するんだよ、俺に！」

「これも違う。うーむ」何の意味もなしに、というか今更ながらこの会話に一体全体どれ程の価値があるのか考えながら彼女の言葉を一応待つと、彼女は俺に人差し指を向けて言う。「じゃあ、あれよね。大学の卒業式の後でニヒル気取ってたらカラスに叫ばれたとかそんなところでしょ」

「三度目の正直にしてはピンポイント過ぎるだろその指摘は！」

俺の心からの叫びを聞いた彼女の反応は、「当たり前じゃない。だって私、ずっと見てたもん。アイタタタ」だった。

アイタタタ。まさに、アイタタタ。

――俺を含め、ツチクラもアイタタタだ。「何してんだツチクラさんよお。まがりなりにもお前、大学の卒業式の後のご身分だろうが。なのに何でこんな空き地でボーっと俺を眺めてるんですかね」

「別に」出来る限り欝陶しく言ったつもりの俺の皮肉はあっさりスルーされる。「ただ、あのままどこかに行くよりも、あんたと居る方がいいかなーなんて思ってね」

「……」

ここで俺は絶句した。うおおお、うおおおお。何だこの展開は。カラスを殴りかかる寸前までいっていた男に何故こんな言葉がこい

つから降り懸かる、と驚きながらツチクラの顔を見ていると、彼女の口の端がプルプルと震えていることに気付いた。というか、気付いちまった。
「……あの、何でこの会話の流れで口元が震えてるんでしょうか」
「いやあ。滑稽だなーって思って」
「想像以上に辛辣なコメントが俺を待っていた！」
「アハハッ」
　すると彼女は今日一番の笑顔を見せる。ヒデーなこれは。改めて思う、こいつの笑いのツボは極悪過ぎる。
大学の卒業式、生徒思いで有名な先生の別れの挨拶中に泣いていたところからも、こいつの感受性のおかしさはわかるんだ。
ツチクラは、「サナカちゃんも泣く時あるんだね」と同じく泣いていた彼女の女友達の一言に、「ヒグッ、だって、あの先生、四年間でハゲ具合が進行しちゃってるんだもん」といけしゃあしゃあと言ってのけたんだ。
それを聞いた彼女の女友達は、「確かにいいい！」とこちらも何やらおかしなテンションになりながら叫んでしまい、笑い転げた。別れの言葉の途中でハゲが進行してしまったらしい先生は叱る。彼女の女友達は恥ずかしさからしゅんとなって縮こまる。それをみて、彼女は笑った。彼女の女友達は、慣れた様子ながらもやっぱり軽く引いていた。
「みたいなことがあったなー。いやいや懐かしい。今となっちゃあいい思い出だ」
「いきなり何なのよ、あんた」やだやだこれが噂のヤバイ人って奴ねと言い、笑っていた表情を一変させて冷ややかな表情に戻る。「あ。それと、勘違いしないでよとかそんな下らないこと言わなくてもわかると思うけど、私はあんたと一緒に居たかったからここに来た訳じゃないわよ」
　利用しにきたのよ、あんたを。
　彼女は、人差し指を俺に向けながら淡々と語る。「明後日行われ

るサンタ試験の対策を練る為にね」
「……マジですか、土倉佐中さん」
彼女の言葉に半ば放心状態に陥ったまま呟いた俺の言葉を、「いきなりのフルネーム呼びはやめなさいな。鳥肌がたつから」とツチクラは一蹴する。「ごちゃごちゃ言ってないで。ほら、早くあんたの秘策を言いなさいよ」
「秘策なんてねーよ」
どうしよう。
ここで俺が、ツチクラに対して、サンタ試験って何のことだ――とぶっちゃけてしまったら、果たして果たしてどんな反応を示すのだろう。想像してみようかなあと考えてみたのだが、いやいやそんなことにポケーってした顔で時間を潰すのもこれまた難儀なこっちゃと考え直した俺は、何の気無しに「サンタ試験って何のことさね。ツチクラの妄想か何かかね」と若干ふざけながら言ってみた。瞬間、ひっぱたかれた。右の平手が、俺の左の頬に、パァンと。それはそれは迷いのない一撃だった。
「うおおお！　こんな綺麗に平手打ちされたのは初めてだ！　何だお前、何だお前！」
「うるさい、寝ぼけてんじゃないわよ。……その叫び様、まさか興奮してんの？」
「驚愕してるんだよ！」
「アハハッ」
「笑うなツチクラこらあ！」
左頬を掌でおさえながら見ると、彼女は物凄くうっとりとした表情だった。これはどちらに対してうっとりしているのだろう。その最終巻とやらの話でなのか、それとも俺を平手打ちしたからなのか。気になって聞いてみようとはしたものの、「あれ、あんたもしかして涙目になってんの？　ああ、ゴメンゴメン。アハハッ」と笑い出す彼女の姿を見て、俺はそれをやめた。何だか聞いたら負けな気がしてきたからだ。

ああ。
それにしても、サンタ試験か。確か、サンタになる為に全国民ならぬ全街民が受ける試験。本当にすっかり頭の中から忘れ去られていた。まあ、あれだ。別に俺はサンタになろうとも思ってないし、サンタが好きって訳でもない。だから忘れてもいいのだ。「そうだ、これでいいのだ」
――昔。そう、昔。かれこれ十年くらい前の夜。
あの時のことを思い出し、少しだけ感慨深くなる。サンタが心底嫌いだったあの時あの時間、俺はあの男に会ったのだ。――サンタという存在を、外の人間全員にばらしたあの男に。
「良かぁないわよ全然。ほら、とっとと秘策を言いなさいな」
「秘策も何も、そもそも俺はサンタが好きじゃねーんだって」投げやりになりながら、俺はツチクラに言う。「子供に夢与えるとか言っておきながら、ろくなプレゼントを与えやしねえ。……だから嫌なんだよ。サンタも、サンタになる為の試験とやらも、サンタになることを強制しやがるこの街自体も」
昔ほどじゃねーけどな。
ぽつりと小さく、ツチクラに聞こえるか聞こえないかいや大丈夫これは聞こえねーぜ的なギリギリの音量の呟きをして、俺は立ったままうなだれる。
「だからでしょうが。だから、私はあんたに協力を要請するんでしょうが」
すると、彼女は結構真剣な眼差しを俺に向ける。「この街に、サンタが嫌いだなんて言う人間、あんたしかいないんだもの」
「……いやいや、それ程でも」
「茶化すんじゃないの。言っとくけど、私は本気の本気でそう思ってるからね。あんたが実はとんでもない輩で、だからこそこの街で、そんな台詞を軽くはけるんだって」
「……」
無言になる俺。はっはっは。全くもって見当違いなことを言うツ

チクラを目の前にして、俺はぐうの音も出なかった。正直、普段からぐーたらぐーたら怠けているような発言を繰り返す俺に対し、ツチクラがここまで過剰な評価をくだしているとは思わなんだ。その後も、げんなりする俺に構わず、「サンタが嫌いな人なんてあんたしかこの街に居ない」だとか「だからこそ、何か、何かを隠しもってる筈なのよ」とツチクラはぶつぶつと言う。

うーむ。

サンタが嫌いな人間、か。

確かにそんな奴は、この街では俺しか居ないのかもしれない。何故ならサンタとは子供に夢を与える存在だ。十年前も、それ以上前の時もそうだった。街の中も外も関係なく、この街のサンタなる者達はプレゼントを子供に配る。年末の一週間くらい前になったら、何の脈絡もなく置かれているプレゼント。しかもそれが、子供の要望をしっかり答えている。こんなことがありながら、十年前まで、外の人達はサンタのサの字も知らなかった。

だからあの男は、革命を起こしたんだ。

見返りはいらない。そんなものは要求していない。ただ、サンタという存在を知って欲しい。その上で、サンタに感謝をして、プレゼントを受け取って欲しい。

そうしてあの男は革命を起こし、サンタは白髭のお祖父さんとして世界に知られた。あの男は捕まり、仲間達も捕まった。全員ではないが。

そして、今日。今日と書いて、コンニチ、だ。

俺はぼうっとしながら、「だいたいあんたはもう少ししゃきっとなさいよしゃきっと」ともはや完全に説教にかわったツチクラの言葉を聞いている。

「良い姑になれるかもな、ツチクラ」と俺は言う。

「良い駄目人間になれるわ、あんた」とツチクラは返した。「……もしかして、全く私の話しを聞いてなかった、なんてことは」

「あるんだよな、これが」

「あんたの頭はプリンよりやわらかい」
「どうなんだろうその発言は俺への暴言になっているのか判断が微妙だ」
「そうね。じゃあ名探偵を呼びましょう」
「唐突に何言い出しやがる！」
「じゃーん」しょぼい効果音を無表情のまま、直立不動のまま、何の抑揚もなくツチクラはこれみよがしに言う。「こんにちわおバカさん。私が名探偵です」
「……えええ」
突然の名探偵発言に、俺は、引くしかなかった。いや、でも、しょうがないんじゃないかなこれは。俺が堕落しきった輩だという前提を差し引いたとしても。だっていきなり目の前の無表情女が無表情のままこんな台詞はいたとしても、リアクションのしようがない。というか、あれだ、したくない。ああそうだ、俺はリアクションをしたくないんだ。ツッコミとかそれどころじゃあない。そこらへんのニュアンスの違いが大切なのかもしれない、と勝手に一人で納得をする。
「……ちょっと、リアルに引いてんじゃないわよ。ちゃんと指摘をしなさい。指摘と書いてツッコミと読みなさい」
そう言うツチクラは珍しく恥ずかしそうだった。とはいったものの無表情なのには変わりなく、まあ、つまりは俺の近くに来て俺を睨む視線を更に鋭くするという行動をしているだけなのだが。もうちょっと、こう、恥ずかしさで顔を赤らめるとかしてくれないのかこの女は。こんなもんクールとかそういうのを越してるって。「アンドロイドか、お前は」
「私ね、昨日、映画を観たの。自意識を持ったアンドロイドが人間に復讐しまくる映画」
「その映画のあらすじを何故今このタイミングで述べるんだ！」
「復讐してほしいのかなあ、なんて思ってね」
するとツチクラは俺の耳元に唇を持って行き、「で、して欲しい

の？」とやけに生々しいやらなまめかしいやらそんなような感じでささやく。ツチクラの息がダイレクトに俺の耳に。今までの会話の流れがなかったら物凄いささやきなんだろうなあと思いながら無言で佇んでいると、というよりもその間もツチクラは俺の耳元に口を近づけた状態でいたので傍から第三者が今の俺達二人を見たら、「あらまあいい感じの雰囲気ねえ」、と思うか、もしくは「今すぐその男の方は逃げるぜよ、女郎に狙われているぜよ！」と思うかのどちらかだ。「やべえどっちにしろ俺逃げるしかねえぞ！　おおおお、逃げよっか、逃げていいかなそうだな逃げよう！」

「うるさい！」

「えええええっ！」

腹に衝撃が走ったと思ったその時には。

もう既に意識が失いかけていた。結果、その場に倒れる俺。なす術もなく、視界が横に傾いてしまう。

この事実を知るのはサンタ試験が始まるこれより二日後のことであるとかなんとかかんとか――。

そういう感じの伏線を、今はただ思っておこう。

とりあえず、意識を失う。

そして現在　二

「おいおい何だお前私の声聞こえてんのかゴラァ！」

意識が回復した途端だった。

声が聞こえた。大きな女性の大きな声が。その声により、うつらうつらしていた自分の意識を強制的に起こさせられる。あー、今は一体全体どういう状況なのだろう。確かさっきまで龍馬さんすげくね？　みたいな思考回路の中にいた筈なのだが、しかし果たして今現在、俺は何処に居て誰が近くにいて、誰の話を聞いているのだろう。いや、それよりも、今まで俺は誰かの話を聞いていたのか。それすらもわからない。なんだこれ、どうなってんだ俺の頭。クルクルパーなんじゃねーのか。

いよいよ自分は痴呆症にかかってるんじゃないか的な疑問を頭の中で浮かばせながら、俺は必死の必死で周りの状況を掴もうとする。

――昼だ。

とりあえず、今は。空は快晴。目の前には誰だか知らない女性が。長い髪は茶色に染められ、キャップがついた赤色の帽子を被っている。何故だかわからないが濃い青色のジャージを着た女性で、これまた何故かはわからないが白色のメガホンを使って己の声量を拡大する準備を整え俺の目の前という位置関係で大声を出そうとしている。目の前。本当に目の前だ。俺が軽く右手をのばせば彼女の体に触れられる距離にその女性はいて、その女性はメガホンを女性自身の口の前に配置し――そう、つまりは俺の目と鼻に触れるか触れないかの距離にメガホンの音声拡大部分が、「メガホンの音声拡大部分が！」

「うっせー黙れこの野郎！」

大きな音がしたかと思うと、気付くと俺は「ヘァッ！」と独特な悲鳴を出して、地面に倒れこんでいた。地面は薄茶色の砂で出来ている。野外だな、そうかここは野外なんだと今更ながらに気付いた。

視界に映っていたメガホン女性の先には小学校の校長先生が朝礼とかでよく使いそうな白い台がある。その更に先には四階建くらいの大きさの校舎。小学校、か。どうやらここは小学校校舎の前で、俺はグラウンドに居るらしい。

地面に尻と両手をついてへたれこむと同時に、俺を見下ろす総勢三人の存在にも気付く。その三人は一様に残念なものを見るような目つきで俺を見ていた。

「お前、マジか」と呟く三人の内一人は言うまでもなくメガホン女性。メガホンをおろしつつ、余っている左手で額を押さえながら苦悶の表情でため息をついている。

「何やってんのあんた」と冷たく罵る俺の右に立っていたらしいツチクラっぽい女性、というか完全にツチクラである女性はこれまた無表情で首を左斜め下に向けていた。つまりは俺の方を向いていて、つまり俺はツチクラに見下ろされている。おおっふう、精神的にキツイものがあるぜツチクラの視線は。

そして、「君は正気かい」と男性にしては少し高い声が左斜めから聞こえてきた。体が細いなあメガネをかけているなあでも俺よりは小さいかなあとぼんやりそいつの顔を眺めていたら、「早く立ちなよ。教官の話を聞かなきゃ話が進まない」とぶつぶついいながら俺の左腕を勝手にとって倒れこんでいる俺を無理矢理立たせる。その際、「同感よカタギリ君」とボソッと言いツチクラが俺の右腕をとったことにより、そしてその二人の動作がほぼ同時だった為、すんなりと俺の体が浮かび上がらされ立たされる結末へと繋がった。

「……えっと」

無言で俺を睨む三人。

その三人が、俺の周りを囲んで立っている。実際にはツチクラとカタギリ君という男はメガホン女性の方を向いているので俺を睨んでいるのはメガホン女性だけなのだが、妙な威圧感が俺の心臓をぎゅうぎゅうとわしづかみにしていた。

「埋めるからね」

俺を見ずにツチクラが小さくつぶやく。「何を何処にですかツチクラさん！」と叫びたかったのだが、脳内では『もし、俺がここで「どういう状況なんですか、これ」と言ったらどうなるんだろう』という問題に対しての議論真っ最中だったので、多分ツチクラは先手をうったのだろう。恐る恐る右を向くと、ツチクラがこちらを向いていた。その無表情には、私は本気だから、というようなメッセージが込められているような気がした。悲鳴がもれそうになった。嗚咽を撒き散らしたい気分になった。それほどまでにツチクラの視線は冷たく俺に突き刺さったのだ。

けれどもそうはいったものの俺は今のこの状況を何も把握していないので、沈黙の状態に陥るしか術はない。何も言わないでいると、メガホン女性が、「お前は今、何を思っている。何を感じて、今を生きているんだ」と何やら学校の先生みたいなことを問いてきた。

「何を感じて、ですか」

「ああ」物凄い威力の視線を向けてくるメガホン女性が、俺に言う。

「今さっきまで私はお前を含めた受験者三人に注意事項を述べていた。だが、お前は寝ていた。信じられるか？　立ちながら、目上の人間でしかもこの先上司になるかもしれない人間の前で、お前は寝ていたんだ。これに対して、どう思う」

「えっと、受験者三人って誰と誰と誰のことですか？　というより、受験って、何、の……」

純粋に思い付いた俺の疑問を全て言い切ることは不可能だった。出来る訳無い、出来る訳ねーよそんなの。だって目の前の女性の剣幕が半端じゃないことになってる上に、「ハァ？」とか「馬鹿じゃないの」とか「何なんだ君は本当に」とか、三方向から沈んだ言葉が聞こえてくるんだから。

そして。

メガホン女性はメガホンをもう一度俺の目の前に配置させ。

逃げようとした俺を二人の男女ががっちりと両腕を掴んで逃げないようにすると、メガホン女性は叫んだ。「サンタになる為の試験

だろうが今までの時間いやその前の前のずっと前からお前は何をして何の為に存在してんだこのオタンコナス野郎！」
　それはそれは見事な合わせ技で、三人の俺に対する苛々はそれはそれは物凄いことだったんだろうなあということだけは何とか想像することが出来ました、はい。
「へァッ！　み、耳が、耳がキーンってする！」
「わかったか、それが私の心の痛みだお前からのな！　お前ら二人、そのままそいつを固定してろ！　もう一発かましてやるよぉ！」
「勘弁してくださいメガホン女性さん！」
「アァン？　メガホン女性ぃ？」
「すすすいません間違えました！」心の中で使っていた代名詞をそのまま使ってしまい、焦る俺。「とにかくわかっていただきたいんです、俺の頭はポンコツなんです！　だから何にも覚えてないんです何にも把握してないんです！　貴女が誰なのか、俺の体をガッチリしっかり固定しているこの二人が誰なのかさえも！」
「へぇ、そうなの。私のことも覚えてないの。……埋めようか」
「すんませんツチクラさん貴女のことは覚えています！」
　右腕を締め付ける力が徐々に強くなる。いくらツチクラといえども女性の力なんで痛くないかなと侮っていた俺は馬鹿だった。普通に痛いんだなあ、これが。イヤホン攻撃は俺のすぐ側にいた筈のツチクラもくらっている筈なのに、「アハハッ」と余裕の笑顔で俺の腕を依然痛み付ける。一方、左腕を締め付ける力は変わらない――っていうか弱まっているようだった。カタギリ君というこの男性はイヤホン攻撃をそのままもろにくらってしまい、ダメージを受けている。
はっはっはざまあみやがれこん畜生ー。
　そんなことを思ってニヤニヤとカタギリ君を見ていると、「何だそのにやけ顔は。君は僕を見るな。反吐が出る」と苦痛で顔を歪めながら俺に言ってきた。うおいおいおい何だこんにゃろうと文句を言ってやろうとしたら、「ほら、カタギリ君がそう言ってるでしょ。

わかったならあんたもにやけるのをやめなさいな」とツチクラが頭を平手で叩いてきた。和風な審判がいたら「良いお手前でした」と褒めていただろう。それ程までに綺麗にツチクラの平手は決まり、痛みはあまりなかったのだが精神的苦痛が物凄いことになってしまった俺は文句を言おうと涙目になりながらツチクラの方を向こうとした。

――向こうとしたら。

その途中でメガホン女性が「私の話を聞け、それ以外は何もするな！」とまたメガホンを使って拡大された叫びを発してきた。

「へァッ！」とまた俺は悲鳴をあげる。「ちょ、それ使うのやめてください！　カタギリ君にもツチクラにも被害広がりますよ、それ！」

「うっせえ！　黙って聞いてろ！」

「わかりました、わかりましたからお願いしますメガホンは使わないでくださいメガホンは！」

頭がぐわんぐわん揺れるのを自覚しながら誠心誠意込めて俺がそう言うと、「わかったならいい。許してやる」とメガホン女性は渋々納得してくれた。傍らで「……き、君にカタギリ君と呼ばれる筋合いは、ない」とメガネを整えながら呻く男がいたり、「私、こんなの全然平気なんだけど。あれえ。あんた駄目なんだあ。そっかそっかあ」と何故だか微妙な大きさの胸を誇らしげにはる女がいたりするけれど、無視をして俺はメガホン女性の言葉を聞こうとする。何がなんでも、何がなんでもだ。これ以上あのメガホンを使わせる訳にはいかない。そうしないと俺の耳が大変なことになること山の如しだ。この表現の意味は後で自分で調べるとしよう。その行為に意味はないということが明らかなのは周知の事実だけれど。

俺はそうしてメガホン女性並びにツチクラ並びにカタギリ君に頭を下げ、そう、リアルで土下座というものを実行し、この場をおさめようとする。メガホン女性はこの勇敢なる男の行動に対して「そこまで謝られると逆に引くわー……」とドン引きし、カタギリ君は

「そこまでしなくてもよかったんじゃないかい」と少しだけ同情してくれ、残り一人の女性は「お似合いよ、お似合い」と嘲笑していた。

メガホン女性は「ゴホン。あー、あー、メガホンテストメガホンテスト」とメガホンを介しながら小声で喋り、メガホンの調子を確認する。もうしなくていいんじゃねーかそんなことはというような感じの表情をしていたら、「うっせえぞそこぉ！　お前の為にもっかい喋ってやんだから黙って頷くことだけしてろや！」と何も言っていないのに指摘され、再び俺はこう叫んだ。「へァッ！　何も言ってませんよ俺、何も言ってませんよ俺！」

「じゃあ今から再度、この馬鹿の為だけにサンタになる為の試験についての説明をする！」

俺の為だけに話をすると言いながら俺の発言を完全に無視するメガホン女性はメガホンを使って叫ぶ。「つまり、さっきまでしていた話をもう一度することになる！　土倉佐中受験生と片桐真哉受験生！　帰りたかったら帰っていいぞ、時間の無駄だからな！」

「じゃあ、僕は先に退散させてもらいます」

メガホン女性の提案に、即座に答えたのはカタギリ君――本名片桐真哉だった。「時間の無駄ほど僕の嫌いなものはありません。一秒でも多く、この試験にかける時間を増やしたいですし」

当たり前といえば当たり前なのだが俺に対しては無茶苦茶失礼な態度をとっていたカタギリ君はメガホン女性に対して敬語を使い、帰る意向を話して歩いてこの場を立ち去った。真剣な表情で両手をズボンのポケットに突っ込みながら歩く後ろ姿はなかなか様になっていた、とかなんとか本人に直接言ったら怪訝な顔をされそうなことを思いながら、俺はその後ろ姿を見送った。勿論立ったままだ。土下座したまま見送るなんてことはしねーし、出来ねえ。人体の限界とはまさにこのことだと俺は考える。

「……ん。土倉佐中受験生は帰らないのか」メガホン女性はカタギリ君とは違って一歩も動こうとしないツチクラに向かって言う。メ

ガホンは使わない。何故だ。使う時と使わない時の場面の違いがわからない。
「はい。帰らないでおこうと思います」
「そうかそうか。まあそれならそれでいい。この馬鹿よりは」
「全くもって同感です。こんな馬鹿は放置でもいいくらいです」
「その通りだな」
クスクスと笑い、よくわからないが意気投合する二人。傍から見れば女性二人が笑い合うというほほえましい場面なんだろうが、話題の肴が俺への罵倒ということを判断材料に加えると一気に冷める。俺だけが。何なんだ、何なんだこの仕打ちは。確かに試験の内容を聞かずに寝ていた俺が悪いんだけども、ここまで酷い扱いを受けることもないんじゃなかろうか。そうだ裁判だ、裁判をしよう！　裁判官を呼んでくれ！　勝つ自信はあるぞ！
目をギラギラと輝かせて、そう思っていたら。
真面目な表情のメガホン女性が、静かにメガホンを自身の口の前に配置させた――！
「じゃあ今から説明するぞ聞くこと以外に何かしたり考えていたら二秒で戦闘不能にする自信が私にはある！」
「メガホンはやめてくださいわかりました裁判官なんて呼びません！」

そして現在　三

「サンタとはすなわちサンタクロースの略称なのは言うまでもねえ！　かれこれ何千年も何万年も前から、先人のサンタ達は街の外の世界の良い行いをしていた子供達にプレゼントを配っていた！　理由はないらしい！　ただ、先人が配っていたから、プレゼントを配る！　言わば伝統だ！　理由もなくプレゼントを配るなんてことに違和感を覚える奴らは山ほどいたが、少なくともその行為を止めようって奴ぁ、誰一人いなかった！

なんやかんやで、私達は子供が喜ぶ姿を見るのが楽しみになっていたからだ！

かくいう私も昔はサンタとしてプレゼントを配っていた！　そして今もそれは変わらない！　この街に居る限り、サンタとしてプレゼントを配るのは当たり前だからだ！

だが、サンタになる為には、サンタなりにそれなりの条件が要る！　だから私みたいな教官がいる訳だし、言わずもがなサンタとしてプレゼントを配れない街の住民もいる！

なら、その住民はサンタではないのかと聞かれたとしたら、その答えは否だ！　何故ならクリスマスの日、プレゼントを配らないサンタは街に残り、プレゼントを配るサンタをバックアップするからだ！　体温調節、プレゼントの管理・……プレゼントを配る以外にやらなきゃいけないことは山ほどある！　いわば裏方だ！　しかし意味のある、重要な裏方だ！　そこを肝に銘じて、今から私の話を聞け！

――これより、プレゼントを配るサンタになる為の第一試験の説明をする！」

メガホンを使いながら一気にそこまで話すと、メガホン女性は大きく息を吸った。その間にも俺の鼓膜のビリビリとした感覚は治まる兆しを見せない。なのに、この待遇に文句を言おうとすると、「

黙って聞いてろ！」というメガホン女性からの一言。拷問だろこれは。カタギリ君め、俺が起きるまでの間は耳栓をしていたに違いねえ。畜生っ。なのに何で右横で佇むツチクラは無表情のまま俺を眺めてニヤニヤしているんだよ。おいおいよもや涙目になりながら必死で耳を両手で閉じる俺が目当てでこの場に残ったんじゃなかろうな、と考察し、すぐにその考えを振り払った。そんな恐ろしいことを考えながらツチクラが俺の横に居る、なんてことは、まるでない。そう、思いたい。

俺が涙目になっている姿を一瞥し、何故なのかわからないが一度頷くと、メガホン女性がもう一度話し出す。「十年前にサンタの正体が白髭の老人っつー『根も葉も無い』噂が広がってしまったせいで、そしてその噂が事実だと認識されてしまったせいで、私達の行動は制限されることになった！　何故なら、もし、もしだ！　もしも子供達に姿を見られてしまった時に、白髭の老人以外の姿だったら通報されるからだ！」

「強盗だと思われてるじゃないですかサンタが！」

「黙って聞いてろうあっ！」

「へァッ！」

「よし、わかったならそれでいい！」メガホンを使いながら極限まで大声を出しているとその使用者の頭はおかしくなるんだなあとぼんやり思いながら、依然涙目の状態で静かにしていることを再度決意する。「つまり！　サンタは白髭の老人でなければならない！　しかし！　全世界に向けて子供達が寝ているであろう深夜の時間帯だけでプレゼントを配る為には、この街に現存する白髭の老人だけでは全く足りねえ！　そんなもんは考えなくても即効で気付く、わかる、理解出来るの三段思考展開だっ！

そこで、第一の試験はこれだ！

『白髭の老人に変身する技術を試験官に披露せよ！』

期限は一週間！　出来なきゃサンタにはなれねえ！　この程度できないのなら、子供達にプレゼントを配る資格はないと思え！」

「……は？」
メガホン女性は自分の使命を充分果たしたと言わんばかりに晴れ晴れとした表情をしていたが、それを見る俺は思考が追いつかなかった。ツチクラはそんな俺の様子を見ながら、何も言わない。さっきまでの状態にいるならば、余裕で罵倒してきそうな筈なのに。
メガホン女性の話を再度頭の中で繰り返しながら、もう一度、俺は疑問の意を唱える呟きをすることにした。
「はぁ？」
なんだって？
今、この人はなんて叫んだんだ？
白髭の老人に変身する技術を試験官に披露しろ？
――扮装とか変装とかそういう意味合いじゃなく。
変身しろ、だと？
「どうやらお前でもわかったみたいだな、春賀彼方受験生。一応は受験の資格があると認めてやる」どうやら俺は知らず知らずの内に暗い表情をしていたらしい。全くもって、そう、全くもってサンタって奴には興味がわかないが、何故だかこの試験の概要を聞いた時、俺の心に暗雲が立ち込めた。
何故かはわからない。
だが、これだけは言える。「要は、一介の人間な俺に、別人になってみろってことなんですか？」
メガホン女性は、俺の問いかけを聞くと、満足気に頷いた。
「秘策、教えなさいよ」とツチクラはメガホン女性の方を向きながら俺の横で囁く。その横顔は彼女には珍しく、本気で悩んでいる様子だった。
サンタになる為の第一試験――白髭の老人に変身する技術を試験官に披露せよ。
「無理だろ」と俺は呟く。
「無理じゃねえ、やるんだ」とメガホン女性は微笑を浮かべながら言う。「出来ないと諦めたら、そこで試合終了だ。お前らは、サン

タになれねえ」

そして現在　四

変身とは、自分の体を変形させろということに他ならない。人間の骨格とか構造とやらを完全に無視したその変身という行為は、つまり、人間には出来ないといっても過言じゃあないだろう。というか、出来ない。

元々変身という単語自体は人間の為に作られた訳ではないことはまことに当然の如く周知の事実。はああ、駄目だ。出来ない。出来る訳ねえ。一介の人間に出来る訳がねえんだよ、変身なんてものは。狸とか狐とか天狗とかそこら辺の動物達なら出来ないこともないんだろうけど、人間には出来ない。ましてやこの俺だ。通常業務である人間生活の方もキッチリキッカリこなせていないにも関わらず、都合良く変身が出来るなんて展開、お天道様が許さないんだよなあこれが。

「サンタになるならまずはサンタに変身してみろ、か」

どうなんだろう。

果たして、この試験とやらにどんな意味があるんだろう。ああ、別にあれだよ、サンタになるならないとかいうことには興味ないよ。サラサラないよ、サラサラ。砂丘の砂が風で静かに揺れ動かされる時の擬音を使う程、俺は、サンタなんかには興味はないんですよ。頼みますよそこら辺。理解承諾了解の旨、宜しくお伝えしておいてくだせえ。

「……」

無言の状態で、とぼとぼと一人歩きながらサンタになる為の試験について考える俺。新美教官から試験の内容を聞いた時は昼だったのに、今現在は午後十時ジャスト。頭上には満天の夜空が広がっている。「うむ。満天の夜空は満点だ」と頭の中で思ったことをそのままつぶやいたら、物凄くつまらないことに気付き直ぐさまなかったことにした。もう駄目だ。やるせねえ。ちなみに新美教官というの

は先刻のメガホン女性のことであり、またまたちなみに言うと先刻までいた小学校は廃校だった。新美教官いわく、「だからメガホンで叫べたんだよ。こんな休日の昼間から小学校の前でサンタになる為の試験の説明なんかしてたら、子供泣き出すっての」なんだとか。まあでもメガホンで拡大されていた音は人間の意識を混濁させることが出来るほどのものだったので、廃校云々関係なく校舎の外の外まで届いていたと思う。現に、俺とツチクラに説明した後、「新美教官声デカイですよモロバレですよ！　貴女正気ですか！」とか叫びながらなんだか偉そうな中年男性が新美教官に走り寄ってきていたし。そしてちょっとうろたえながら「す、すいませんでした」と謝るメガホン女性もとい新美教官。

うわははははどうだメガホン使いまくるからこうなるんだ。

と、言ったコンマ一秒後に新美教官の右拳が俺を攻撃したのは、回想したくない。トラウマもんだからね、あれはね。新美教官の上司っぽい人なんて俺が殴られたことにすら気付いてなかったからね。その時隣に居たツチクラなんかは、「大丈夫？頭」とだけ呟いてその場を去ろうとしていたしね。それは殴られた俺を労ってくれているのか、はたまた痴呆症にかかっているかもしれない俺の頭の構造に対して非難しているのかどちらなんだろう――と思っていたら、ツチクラの背中は既に校門の外に在り、「おーいツチクラー。秘策ってのはいいんかーい」と遠くに話しかけても何も言い返してくれなかった。これが巷で噂の放置プレイとかいうやつかいやいや放置ってなんだよプレイってなんだよ表現がやらしいよ。「いやーん、なんか官能っぽい」

「……流石にその呟きは引くわ」

「うえおうあ！」満天の夜空の下、俺が歩く右横にある電柱の側に女性が居た。何をか言わんや、ツチクラだった。「おいツチクラ！お前、何で俺が恥ずかしい言動している時に限って登場するんだよ！」

「私はそういう役回りなのよ。あんたが恥部をさらしている時限定

で、私はあんたの前に現れる。わーいわーい」
「嫌がらせもそこまでいくともはや超能力の類だろうが！」
「馬鹿いってんじゃないわよ、こんなの超能力じゃないわ。全国の超能力さん達に贖罪しなさい」
「一人も居ないかもしれない超能力さん達に向けて単なる謝罪の上を行く謝り方をしなきゃいけないんですかツチクラさん！」
「さん、じゃない。様」
「……ツチクラよう」
「ごめんその返しわかりにくい上にキツイ」
「率直な感想ってここまで人を傷付けられるのか！」
「ほら、もう一回言ってみなさい。せーの」
「ツチクラよう」
「その残念なのを言えって催促する訳ないじゃないの私が」
「残念なのっていう表現で俺の恥部をまとめるのはやめろ！」
あまりの精神的ショックにツチクラが謝罪をしたというその信じられない展開を軽く流してしまう俺だったが、ツチクラが、閉じたツチクラの唇に右手の人差し指を当てているのには気付いた。「何やってんだ、ツチクラ」
「うるさいのよ。今何時だと思ってんの。叫ばないで静かに指摘しなさいな」
どうやらうるせえから静かにしろやコラァと言いたいらしい。
「今更じゃね？」
「今更も殊更もないわ。お願い、静かにして。あんたと二人で居る所なんか誰かに見られたら、私、明日から外歩けないじゃない」
「激写されたモデル気取りかお前は！」
「モデル？　ああ、違う違うそういう意味じゃなくてね。ただ単にそういう噂たてられるのが嫌いってなだけよ」
あんただから嫌とかそういう訳じゃないからね、とツチクラはぼそぼそ呟く。そうか、ツチクラも意外とそんなことを気にする所があったのか。誰に何を言われようとそんなの関係なく我が道を進む

女、みたいな感じだと思っていたのだけれど、どうやらどうやらそういう訳でもないらしい。
「へえ。お前もそういうところあるんだな」
「……何よその言い草。警察呼ぶわよ」
「ちょっと感想言っただけでその仕打ちかよ！」
「ちょ、本当にうるさいから黙りなさい。さもないと警察呼ぶわよ」
「対処方法が一辺倒！」
「ああもううるさいわかった警察呼ぶ！　警察の人ー！　誰かこっち来てー！」
「呼び方が原始的過ぎる！　てか俺が言えた義理じゃねえけどお前もうるさいって！」前世はネアンデルタール人なんじゃねえのかこの女と思いながら焦る俺。「わかった、よくわかったから静かにするから！　だから二度と警察を呼ぼうとすんなよ！」
「何言ってんのよこの嘘つき！　まだうるさいじゃないのよあんた！」
「いや、だから、これから静かにする予定なんだって！」
「警察の人ー！　漫画における未成年の性描写制限規約に異論を唱えたがってる人がここに居まーす！」
「テメっ……わかったよ、トーン落とせばいいんだろ。ほら、落としたぞ」
「はあ？　何言ってんのか聞こえないわよ！　もっと大きな声で喋りなさい！」
「おいおいどうしろってんだ俺に！」
結局、夜中に俺とツチクラはわーわーぎゃーぎゃーと騒ぎ立てた。途中でツチクラが「大体あんたは私の話を全然聞かないじゃないのよ！　なのにこういう時に限って文句を言うんだもんねあんたは！」と話を切り返した時からツチクラが一方的に俺へと愚痴を叫ぶ展開となり、当然の如く何も言い返せない俺は縮こまってしまい、「はい。すいません、はい……」と相槌を打つしかなくなった。結構大きなボリュームでツチクラは叫んでいるんだけども、そういえば警

察の人はリアルに何をしているんだろう。今は三月で、街の大人全員が協力して働くクリスマスにはまだ遠い筈なのに。
いやあ、初めて夜のクリスマスを見た時は圧巻だったなあ。見知った大人も見知らぬ大人も、皆が皆協力してトナカイがひくソリに乗って飛んでいったあの光景。ソリには大量の白い袋が置いてあって、そしてそれらは全て、クリスマスの何ヶ月も前から街の大人全員が協力して準備したものだと思うと、感慨深いものがあった。サンタなんかはどうでもいいけれど、あの一丸となって一つの目的に動く大人たちの姿は、物凄く感動したなあ。サンタは嫌いだけど、うん。
「なあ、ツチクラ」
「あんたはいつもいつもそうなのよ！　私があんたに漫画貸そうとしたら「あ、すまん。その作品、俺の中では終わったことになってるから」とか言ってさあ！　あんた自身が既に終わってんのによくもそんなこと言えるわね！」
「あれえ？　お前、何に対して怒ってんだあ？」
「間延びした口調で問いかけないで！　あー腹が立つ腹が立つ腹が立つ！」
とにかく、わかったわね！
最終的にツチクラ自身も何に対して怒っているのかわからなくなったんだろう。一体全体俺に何をわかれというのか。静かにしろってことなのか、いつも俺がのほほんと日々を過ごしていることをわかれということなのか、サンタになる為の試験の秘策を教えろということなのか、まだ連載中のあの漫画をもう一度読めということなのか。正直、あの漫画嫌いなんだよなあ。絵柄も微妙だし毎話毎話テキトーだし。なんであの作品が打ち切られないんだろうか。「やっぱ、あれだな。あの漫画が打ち切られない世の中は間違ってるよな」
「はあ？」俺が思考していたら、いつの間にかツチクラの怒りもおさまっていた。ハアハア言いながら荒い息を整えようとしているが、まあ、ツチクラにとってこの程度どうってことなんだろう。何故な

ら俺に投げかけた二文字の相槌をうつツチクラの顔が元通りのアンドロイドになっていたから。少し赤い頬はご愛嬌ってところか。「何の話してんの、あんた」
「あの漫画だよ。ほら、ツチクラがかしてくれ漫画」
「ああ。あの微妙な漫画ね」
「ん？　お前が貸してくれたのに何で当の本人が批判してんだ？
……まあいいか。こんな話どうでもいいんだよ、ツチクラさんよう」
「またあんたその残念な呼び方使っちゃって。自虐ってそんなに楽しい？」
「そういうんじゃねえよ今のは！　てか話しの腰折るんじゃねえよ、黙って俺の話し聞いてくれ！」
「嫌よ！　絶対に嫌！」
「ここで完全なる拒絶反応が出るのは何でなんだ！」
「そんな……無理、無理よう……私があんたの話しを黙って聞くなんて……。お願い、許して……許してくだ、さい……」
「そこまで弱気になるまで嫌なのかよ俺の話し聞くの！」
「そりゃそうでしょうが。どうせ、あれでしょ？　「お前、今日どんなパンツはいてんの」とか聞くんでしょ？　……この変態！　痴漢！」
「どこをどう繋げたらそういう人物像になるんだ俺が！」
「謝って！」
「それこそ何でだよ！」
「謝って！　謝りなさい！」いつの間にか大きな声を出している俺とツチクラだったので、いつの間にかギャラリーが周りに出来ていた。言い換えれば野次馬という奴だ。夜中の街路地に、十人くらいの老若男女が俺とツチクラを指差してひそひそと何かを喋っている。
「近頃の男は酷いわねえ」「あの女の人可哀相ー」「両手で顔隠してよくわからないけど泣いてるんじゃない？」「じゃあ泣かせているのはあの男の方かね」「アヒャヒャ！　切り刻みてえ！」「ドロドロしてるわねえ。あんなサンタは嫌ねえ」「ほんとほんと。あ

んなサンタになったらダメよ、ゆうくん」「ねえお母さん、サンタになるってどういうこと？」「あ、違うのよゆうくんそういうことじゃなくてね」

「謝りなさいよ、あんた！」

「……」何故かはわからないが、ヤバイくらいに発狂してる人と、サンタ的な事情に関してピンチになってる親子が居たような気はしたが、とにもかくにも依然としてツチクラは叫んでおり、そして周りのひそひそ話は続いている。

この場をおさめるにはどうしたらいいのか。

ツチクラの怒りを静め、下がりに下がった俺の評価を少しだけでも上げるにはどうすればいいのか。損得論とかそんなのは無視して、とにかく、この場を苦労せずに静めるにはどうすればいいのか。

ため息を一つつき。

膝を両方と両手の掌をひんやりとする地面につけ。

額を地面につけて、「すまん！」と一言叫んだ。

「……え？」と、観客ならびにツチクラから戸惑いの声が漏れる。

今日だけで二度目となる謝罪方法。

土下座とやらを、俺はしたのだ。

「え、な、あんた何してんのよ！　ほら、頭上げて！　そこまでしてもらわなくてもいいわよ！」

そもそもそういう場面でもないでしょう！　私が、一方的に騒ぎ立てただけじゃない！　「ああ、もう……悪ふざけが過ぎました！　はいはい悪ふざけしすぎましたよ！　ほら、早く顔上げ、て……」

何だかわからないが最後の方で声がしぼんでいくツチクラ。ツチクラに催促されて顔をあげると、そこには顔を少しだけ赤くして俯くツチクラの姿があった。察するに、周りからの目線が恥ずかしくてしょうがないんだろう。やがて「よかったよかった」「仲直りした仲直りした」と言いながらギャラリーが去って行き、電灯が足元を照らす街路地には俺とツチクラだけが残される。

立ち上がり、沈黙の状態で歩き始める俺とツチクラ。

「……わざとでしょ、あんた」
沈黙を最初にぶち破ったのはツチクラの方だった。「何がだ？」
「惚けんじゃないわよ。あんなにいっぱい人が居る中土下座なんかして。私に恥をかかせる為に、わざわざ土下座なんかしたんでしょ」
「……そう感じたんだったら」ツチクラの顔は俯いていて、俺にはツチクラの本心が全く読めない。だから、俺は、言葉を繋げるしかなかった。「ツチクラがそう感じたんだったら、俺が悪かった。どうやってあの場をおさめればいいかわからなかった。スマン」
「……あー！　あああああ、もう！」
そして、叫ぶツチクラは。
思いっきり俺の方を振り返り、大股で一気に俺の方へと近寄ったかと思うと、大きな声で「謝んないで！」と言い放った。「そんなに簡単に謝んないでよ……って違う！　そういうことが言いたいんじゃなくて……あああ、もう！　わた、私が謝れなくなるじゃないの！」
言いながらツチクラは先刻俺が謝った時のような体勢に入ろうとした。つまりは土下座という奴である。土下座。ツチクラが、土下座。「うおおお、やめろって！　そこまでしてもらわなくてもいいって！」
「うるさい！　このままじゃ私の気が済まないのよ！」
「いや、いいって充分だって！　ツチクラの気持ちは充分伝わったから！」
「はあ？　そんなのどうだっていいわ！」
「えええ！　ダメだこいつキャパシティー越えて言動が破綻してやがる！」
再び俺とツチクラはぎゃーぎゃーわーわーわめき立て、二人同時にピタリととまり、二人同時に「「学習しよう、お互いに！」」と叫んでいた。もう一度、学習しろよ、と心中で自分自身に唱える。謝るとか謝らない以前に、俺達二人は夜中に騒ぎ過ぎだ、こりゃ。
静かな雰囲気の中、反省した俺とツチクラは静かに歩く。

「ちなみにさあ、ツチクラ」
「何よ」
「お前、何でこんな夜中に一人で居たんだ？」
「決まってるでしょ。あんたから秘策を聞き出す為よ」
「それにしたって新美教官の話聞いた後に時間あったろうに」
「……昼間、私なりに調べたの。どうすればいいのか。でも、何も見つからなかった。だから、行く宛てはあんたのところしかなかったの」
「秘策なんて無えって言ってるのによお」
「何よ、もう。じゃあ秘策がないあんたは、サンタの姿に変身しろっていう試験をクリア出来るの」
「……わっかんねえ」心に思うありのままをそのまま口に出す。「サンタなんかになる気はねえし、試験に落ちたって、この街に居る限りは強制的にサンタにさせられる。サンタを補佐するサンタってのも聞こえはわりぃが、結局はサンタだ」
「そうね」
「でも、さ」
——何故だか俺は、十年前を思い返していた。サンタが嫌いで、サンタを恨んでいた時に目の前に現れたあの男。あの後巻き起こった、一連の騒動。
あの時は、サンタを恨んでいた。今は、あの時ほどではないけれど、嫌いなのにはかわりない。
けれども、俺は見てしまった。大人になったら知らされるこの街の真実。クリスマスの日、街の大人が一丸となってプレゼントを配ろうとしていたあの光景を。「無償で子供にプレゼントを配る、クリスマス。街の皆がさ、馬鹿騒ぎして挑むあのお祭りにさ、参加したくねえってのは、嘘になるわな」
「……そうなの」
「ん？」
「あんたには、この街を出ようって気はさらさら無いのね」

そう言うと、ツチクラは踵を返して去って行った。「おい、それってどういう意味だよ！」という俺の制止を無視し、走る。その後をついて俺も走り、全力で走ったのだが――その、あれだ、間に合わなかった。

「はあ、はあ、あいつ、本当に細身の女なのかよ」荒ぐ息を押さえつつ、誰かの家の白いコンクリート出来た外壁に背中を預け、その場に立ち止まる俺。

――あんなことを言った、ツチクラの真意はわからない。

だけども、ツチクラは必死になってサンタになる為の試験を通過しようとしている。

秘策があるんでしょうとかなんだといって、俺に詰め寄るくらいに――。

「ツチクラ自身が嫌いな漫画を俺にかす理由、聞けなかったな……」

どうせあいつのことだろうから、単なる嫌がらせ以上の意味はないんだろうけど。

まあ、何にしろ。「負けらんねえよなあ、俺も」

とりあえず、明日になったら漫画喫茶に行って漫画を読むことにしよう。いや、現実逃避とかではなく、イメージトレーニングってやつだよ。変身してるっぽい漫画はいくらでもあるだろうから、読み漁ってイメージを固めておこうっていう魂胆の上で、だ。

そんでもって、俺のあんぽんな頭を限界の限界まで駆使して、なんとか、サンタになる為の試験とやらを通過してやろうじゃねーか。変身しろという訳がわからない試験を突破する為の秘策みたいなものを、何とかして用意する。そんくらいしか、絶賛傷心中のツチクラにしてやれることは何もねえから。

そう、しようとした。

「アヒャヒャ、切り刻みてえ！」

――気付くと。

目の前には、先程ギャラリーの一部と化していた男が存在していた。薄汚れた服を着て、右手にはナイフが一本。メガネをかけていて、その奥に見える両目はまるで酒に酔っているかのようによどんでいる。その男が、暗い顔でぶつぶつと独り言を言っている様を、目のあたりにした。

正直に言いたい。

うわあヤベエよこいつ、と。

「アヒャヒャ、切り刻みてえよなあ、なあ？　なあ！　アヒャヒャアヒャアヒャ！　あああああ、僕はさあ、サンタになるんだあ、サンタにさあ！　でもようでもよう、変身しろっていう試験でよう、んなもん出来っこないじゃねーかよう……あのメガホン教官……切り刻みてえなあ……」

「……」

「あー、ゴホン。と、言ったら君はどうする？」

思わず唖然となり、若干、というか完全に引きに引きまくっていた俺の無言の雰囲気に気がついたんだろう。目の前でラリっていた男は、直ぐさま冷静沈着な振る舞いを取り戻そうとする。今更も殊更もありまくりだとは思うんだけども、「冗談が過ぎたか……。違うんだ、落ち着いて僕の話しを聞いてくれ。ほら、あれだよ。試験に挑む優等生がよくやるストレス発散って奴なんだ」と言い訳をしながら、先程までのラリった言動とは一変、あらまあ俺が見知ったその男性は、今日の朝方会った時のようなキリッとしたたたずまいになっていた。あらあらまあまあ。

「カタギリ君じゃねえでございますか。何やってんだい」と俺は頬を引きつりながら聞き、対してカタギリ君は、「変身しろという試験の対策に行き詰まった。この際だ、僕にも秘策とやらを教えてくれ」としれっと返した。

そして現在　五

「どうだ、春賀彼方。そっちには何かあったか」
「いや、見た所何もねえ。そっちの棚はどうだ、カタギリ君」
「今僕と君がいるこの場所が図書館なのにも関わらず裸でいちゃついている男女がいた」
「どこのケータイ小説だよその展開！」
二日目。新見教官からサンタになる為の試験――白髪の老人に変身しろという旨を伝えられた時から数えて、二日目の日。そんな日に、なんとなんと、大学生時代、俺が通っていた大学にて天才と評されていた片桐真哉通称カタギリ君が俺に助けを求めてきたのだ。というかそういやあれって昨日の夜のことだったっけか。それとも今日のことだったっけか。いやはや、やっぱり一日経つと記憶ってやつはスッポリと抜けちまうもんだなあ。
そう。
だから俺は昨日、何も見ていない。何も見ていないんだそうに違いない。例えカタギリ君が狂った演技とやらをしていたとしても、例えカタギリ君が俺にリアルにナイフを向けてきたとしても、それは俺の幻に過ぎないのであーる。
秘策を教えろとカタギリ君は言ってきた。白髪の老人に変身する術を教えろ、とカタギリ君は昨日の夜に言ってきたのだ。よくわからなかった俺は全く躊躇わずに「カタギリ君じゃねえですか何やってんだい」的なことを聞いた記憶がある。おおい今思えば何という言葉使いをしてるんだ俺は。大学卒が古風な言葉使いってあんた。
「……おおうカタギリ殿、貴殿は何をしとるんでい！」
「ん？　さっき見つけた裸の男女を写メで撮って脅迫している所だが、何かあったか？」
「まさに外道！」
このように。そう、このように。

誰が何の為に流した噂なのかはわからないが、カタギリ君という輩は天才という奴ではなく、基本外道な野郎であった。そしてそしてその外道が極まりに極まってしまった場合、昨晩のような悲劇に陥ってしまうのがカタギリ君という人間みたいなんです、ええ。

昨日、カタギリ君は俺の問い掛けに対して始めはしどろもどろに答えていたのだけれども、時間が経つにつれてめんどくさくなったんだろう。うんざりした顔で「わかったよ君の質問に答えればいいんだろう答えれば」とだけカタギリ君は呟くと、何の反省も見当たらないくらい真剣な顔で「秘策とやらを持ち合わせている君を脅迫しようとした。脅迫するには狂人を使うのが一番だ。でも、僕にはその為の資金がない。そこでどうするか。考えに考えた末に僕が出した結論は、僕自身が狂人になればいいというものだった」と長々とした台詞を一切合切噛むことなくスラスラと述べ切った。それはまさしく立て板に水の如し。俺は唖然としましたよその時。だって考えても見てくださいよ、目の前でいけしゃあしゃあと俺を脅迫する気だったって発言する人間がいるんだもんさ。キッツイキッツイ。当然その後俺が警察を呼ぼうとし、ケータイを耳に付けたその時その瞬間、黒の折りたたみ式携帯電話と俺の右手の真ん中にナイフが存在していたし。「うおわあ！　何してんのカタギリ君正気ですか！」と至極当然な驚愕反応をしてみせたのだけど、それに対するカタギリ君の言葉はこんな風なものだった。

「そっくりそのまま返してやる。警察？　馬鹿言ってんじゃない、そんなの僕が指をくわえながら黙って見ているとでも思ったのか？」

ほら、早く離したまえよ。僕を警察に届けようっていうその意思を。

心底思った。こいつはやべえぜ、と。今というか昨日の夜起こったありのままを話すとすると、――天才だと噂されていた片桐真哉という人間は、自分の考えを一秒の躊躇いもなく行動に移すことが出来るヤバイ奴だったのだ。うおおい俺の知り合いはこんなんばっかなのかよ。性格最悪なツチクラに、メガホンの新美教官、笑い上

戸なツチクラの友人に、犯罪者予備軍というか完全に犯罪者なカタギリ君。それと、十年前に会ったあの男。
ああ。
そういえば、十年前に再開を約束した――変身が得意なあの大人な女性は、俺の知り合いの中で一番まともな人なんだな。
改めて思う。早く会いたいなあ、あの人に。そうすれば白髪の老人に変身する技術なんて簡単に手に入る筈で、そうすれば危険人物まっしぐらのカタギリ君と一緒に図書館で資料探索なんかする必要もないというのに、何故こんな事態に。本来だったら俺は、漫喫に入り浸って漫画を大量に読もうと切磋琢磨してるはずなんだぞ。それが、なんで、カタギリ君と。
「なあ、カタギリ君」
午前十二時。図書館に入れるようになった午前十時から二時間が経ち、めぼしい資料が全く見つからないストレスどころか十二時というこのちょうどいい時間帯独特の空腹さえ襲いかかってくるこんな状況の中、俺はカタギリ君にいましがた頭に浮かんだ疑問をそのままぶつける。「昨日俺はカタギリ君に脅迫されたんだよな。で、なんでその流れで俺とカタギリ君は図書館で仲良さげに資料探索なんかしてるんだ？」
「……ちょっと待ってくれ。今三十万だ。これを三倍にはしたいから、それまで待っててくれ」
「脅迫継続中！　やめろってカタギリ君それだと合計九十万請求することになっちまうよ！」
「ちなみにここでいう九十万というのは金の話しだ。大体、小さな車が一台くらい買える値段か。単位は気にするな。それを気にしたら負けだぞ」
「何の話をしてるんだよカタギリ君！　でもありがとう不思議と感謝したい気分に！」
恐らくカタギリ君が今話したのは俺達の運命を左右するとても重要な物事なのだろう。だってさ、カタギリ君がお金の単位の話をし

た時、心の底から安堵した俺がいたからね。円じゃないんですお金の単位は。はいそこ、指摘と書いてツッコミの準備はしないように。
「……っていやいやちげーよ！」
そうだそうだ違う違うそうじゃないだろうここでカタギリ君に感謝するのはおかしいだろう自分。落ち着け俺、カタギリ君は現時点において敵なのだ。こんな十八禁展開を無表情で実行に移す登場人物は危険すぎる。そうだ、早くカタギリ君の行動を止めなくては。いざ行かん、敵はカタギリ君にあり。
「待て待て待てカタギリ君！　そんなてんやわんやな状況の写真を使って脅迫なんて、駄目に決まって、る、ぞ……」
俺が勢いをつけて図書館の内部を走り、本棚という本棚を横目にしながらカタギリ君がいるであろう場所に出陣すると。
そこには、「図書館では静かにしたまえよ」というヤンキー座りで写メを撮るカタギリ君と、「ニャー」と鳴くであろう動物が二匹、図書館の床に寝転がっていた。
いわずもがな、二匹の猫だった。
「おい、カタギリ君」
「なんだ」
「カタギリ君って、猫の雄雌の区別つくのか」
「何を言う。見れば一瞬で見分けがつくだろう」
「……」もしかしたら俺はとんでもない間違いをおかしていたのではないだろうか。というかそうだ、カタギリ君が間違ってるんじゃねえ。間違っていたのは俺だったんだ、俺の思想だったんだ。こんなに可愛い猫二匹の前で、そんな、恋空展開とかありえねえだろ。しかも恋空のあのシーンは学校の図書館での話だったし。もう何関連付けちゃってるんだよ、俺はさ。うああ、恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしいったらありゃしねえ。
そう、だな。
そうすると、多分、九十万っていうのも何か違う話なんだ。全くもう。誰だよ、カタギリ君がくんずほぐれつしていた男女を脅迫し

てるなんて言った奴。そんな急展開、あり得ねえよ。「じゃあさ、猫好きのカタギリ君。九十万ってのはあれだろ？　実はその携帯で動画を録っていて、その動画の閲覧回数が三十万っていうのを三倍にしたかったとかそういう意味なんだろ」
「は？　いやいやそれこそ何を言う春賀彼方」そういうと、カタギリ君は物凄く暗い顔でほがらかな雰囲気を醸し出す猫をにらみ始めた。「僕はこの猫をネットオークションに出品しようとしていたところだ。とりあえず専門家に聞いたところ、二匹で三十万は確実らしい。これを三倍にする為にもっといい写真を撮らなくてはならないなと思ってね」
「えええええ！　なんだよ全然猫好きでもなんでもねえじゃんカタギリ君何やっちゃってんの、ねえ！」
「……ああ、確かに資料探索を中断しているのは悪かった」
「そこじゃない！　そこもほんの少しはあるけどそこじゃあない！」
「そうだな、猫なんて要らないよな。……殺るか」
「もう嫌だよ怖ぇよこの人誰か助けてください！」
図書館の端で救援要請を叫んだ俺は、叫びながら一気に猫二匹を抱え込んだ。もふもふした毛が何とも心地いいんだけれども、俺の腕の中の猫二匹は「フシャー」と嫌そうな鳴き声をあげていた。そんな露骨に嫌がらなくてもいいじゃねえかよと心の中で嘆きながら、一気にその二匹を持ち上げて、立つ。本棚と本棚の間の奥で、更に図書館全体における一番端の部分――しかもここが司書さん以外誰もいないであろう二階の歴史資料コーナーという位置であるのが本当に助かった。そして俺は、「ニャー」「ギニャー」と呻く猫二匹を急いで本棚と本棚の間に存在した窓をあけて放ることに挑戦し、なんとか達成することに成功。いやあ危ない危ない。あと一歩遅かったらカタギリ君が猫に危害を加えていただろう。
何故なら。
カタギリ君の右手には、昨晩見たナイフがおさまっていたのだか

ら。

それを見たからこそ俺は猫を急いで外に放ったのであり、それを見たからこそ俺は、こうやってカタギリ君の視線を一心不乱に見つめている。

そして。

そのナイフの刃の先端が――俺の腹部目掛けて襲い掛かってきた。尚も無表情なカタギリ君。それに呼応するかのように冷たいナイフの先端。音はなかった。カタギリ君の躊躇も恐らくなかったんだろう。それ程までに迷いのない突きで、カタギリ君は俺に危害を加えようとしたのだ。

「なななななな！」と言いながら、そうして。

ナイフの先端を向けてくるカタギリ君の右腕を両手で掴むことによって、俺はなんとかカタギリ君の攻撃を抑えることに成功する。

「何してんだよ、カタギリ君！」

「チッ。止められた、か」カタギリ君はそう言うと俺の方に向ける力を弱め、俺の両手を振りほどいた。ナイフの先端を黒いゴム状のカバーで覆い隠し、ポケットに入れるとカタギリ君は言う。「いや、猫を助けようとしていたくせに二階の窓から投げ捨てたのが気にくわなかった。気付けば僕の手はナイフを掴んでいた。すまない」

「すまないで済む問題じゃねーだろ……」

目の前で無表情のまま佇むカタギリ君。その感じは猫云々の絡みの前から全く変わっていない。マジかよ、こいつ。下手すりゃ死んでたぞ俺。

それなのに。

平然と、危害を加えようとした相手の前に居続ける、カタギリ君。

気付くと俺は冷や汗をかいていた。額に、背中に、脇に。そりゃそうだよ。命狙われたんだもんな、今さっき。まあ、俺にしちゃあよく止めたよあの攻撃。

それはともかくとして。

予想以上にカタギリ君がヤバイ奴だとわかった俺は素直にカタギリ君に対してドン引きしていたのだが、一応「猫は大丈夫だって。ここ二階だけど、すぐ下に一階からのびてる屋根みたいなの見えたからそこで着地してる筈だ」と注釈を加えてやった。猫二匹をオークションに売り飛ばそうとしたカタギリ君には興味のないことかもしれないが、ここで俺が猫を二階から真っ逆様に放り投げて殺してしまった罪なんかに問われたくないから、とりあえずの注釈だ。それでなくても猫の死体っていうのはトラウマものなんだ。車にひかれた猫なんかヤベエぞ。あの飛び出した目玉を小学生の時見て以来、俺は絶対に車で猫をひかないと誓ったものだ。あっはっは笑えねえ。

と、その時。

俺は、信じ難いものを見た。

カタギリ君が。俺の話を聞いたカタギリ君が。「そうか。ならよかった」といいながらうっすら微笑んだのだ。

「……」何やかんやで、結局無言になる俺。何なんだろう。何なんだろう、この、カタギリ君という奴は。一体全体どういう思考回路をしているんだろうか。猫好きなのか。いや、でもさっきまでオークションで売り払うとか言ってたからなあ。じゃあ逆に犬好きか。いやいやなんでだよ全く関係なくなっちゃってんじゃん。ああ、駄目だ駄目だ。俺の頭は絶賛混乱中崩壊寸前まっしぐら。脳裏には「頑張るぜよ！」という大河ドラマ版坂本さんが。

「すまないな」カタギリ君もそんな俺の心中を悟ったのだろう。そうしてゆっくりと言葉を紡ぎ始めるカタギリ君。「昔からこうなんだ。何も考えずに、気付いたら自分の思ったことを即座に行動してしまう。天才とか言われていたが、そうじゃない。勉強しようと思ったら、いつの間にか一日経っていたことがある」

ただ、そういうことなんだ。何も特別なことなんてない。天才なんかじゃ、ない。「だから、僕の近くには誰も居なかった。だから僕は、天才なんて呼ばれて嘲笑をあびていたんだ」

――そう言われて思い出した。

昨晩、俺は、カタギリ君に誘われたんだ。秘策がないのなら一緒に明日資料探索に行かないかと誘われたんだ。カタギリ君に。カタギリ君から。伏し目がちになりながら、それでも何とか懸命に言葉を絞りだそうとしていたカタギリ君の顔は、とても悲しそうでとても苦しそうで。さっきの猫の話じゃないけれど、カタギリ君の記憶の中のトラウマって奴が、躊躇うことができないカタギリ君の言動を制限していたんだろうな、と俺は勝手に思ってしまう。そう思っていたら、そう思いながらカタギリ君の顔を見ていたら、自然と俺は「なあ、カタギリ君」と本日何回目かになる呼びかけを発していた。伏し目がちになりながら、「なんだ」と呟くカタギリ君。

「気にしねーよ」気付いたら自然と口が動いていた。何にも考えずに出る、何の根拠も背景もないかもしれない台詞が。「気にしねーよ、こんなの」

「は？」

「だから、気にしねーって」そう言う俺の言葉を聞きながら、カタギリ君は心底信じられないというような顔をしていた。はっはっは。いいねえいいねえカタギリ君。その顔だよこん畜生。ツチクラと並んで同じように俺のことを馬鹿にしやがって。

新見教官から説明を受けていた時のこと、俺は忘れちゃいねえんだぞこの野郎。

ツチクラと新見教官が俺を馬鹿にしていた時、カタギリ君だけが俺を支持してくれたこと、忘れちゃいねえんだ。「気にすんな……とまでは言えねーが、少なくとも俺は、カタギリ君を天才とかそんな風に呼ぶ気はねえから。そのつもりで」

手当たり次第探しても埒があかねえからさ、司書さんに聞きに行かねえか？

そう言って俺はその場を去ろうとした。目指すは司書さんがいるであろう二階の受け付け。というかここまで騒ぎ声が響いていてよく気付かないもんだなこの図書館の司書さん。おっとりした性格なのだろうか。いいなあ、おっとりした性格の司書さん。メガネとか

かけてくれていたら尚良し。言うまでもないだろうけど、おっとりしたおっさん司書さんはお引取願いたい。いやこれ本当に。
「君は」俺が脳内で下らないことを考えていると、すると後方から声をかけてくる人物がいた。男性にしては少し高めの声が、その人物から発せられる。「僕を、避けないでくれるのか。君をナイフで刺すかもしれない僕を、避けないでくれるのか」
その質問に対して少し考え、「まあ、さ」と少し躊躇いながら俺は答える。「昔、色々あってさ。たいていのことには慣れてるんだよ、俺」
十年前。あの男による革命が起こった。その場に居合わせた俺はあの男の行動をほとんど見ていて、そして同じくあの場に居合わせた女性と、いつか必ず再会しようという約束をした。
――そして、十一年前。
サンタの存在が街の外に知らされる一年前。あの時、俺は。あの事件のおかげで、あの事件のせいで、ある程度の衝撃展開には対処出来るようになったんだ。十一年前の事件より衝撃を受ける展開なんて、こうやってサンタ試験を受けるようになった年齢になっても想像できないくらいだから。
カタギリ君は依然黙ったままだった。まるで何かを吟味するように俺という存在を推し量っているのかもしれない。いいぜいいぜ。存分に迷え、この野郎。その時間が俺の時間だ。サッカー漫画のカッコイイ監督みたく、したり顔でカッコよく待ち構えてやるよ。
やがて、カタギリ君は、大股で歩いて俺の右横という位置で立ち止まった。「危害を加えないよう、努力しよう」という無茶苦茶上から目線な台詞をはきながら。
「危害を加えないってさあ」その台詞に対して、思いついた通りの言葉をはこうとする俺。「ただ単純に、カタギリ君がナイフを持ち歩かなきゃいいんじゃねえの」
「なっ！　……そうか、そうかそうだったな。すまない。盲点だった」

「いやいやこれ盲点とかそういうレベルじゃねえぞ！」
「じゃあなんだ。盲班とかか」
「え、盲班って何」
「……やっぱり君は阿呆だろう」
「何だと！　カタギリ君にだけは言われたくねえぞその言葉は！」
「な、どういう意味だいそれは」
「そのまんまの意味だ、こん畜生！」
俺とカタギリ君はそうやって話をしながら罵倒をしながら受け付けまで歩く。距離はそんなにない。本棚は壁と垂直の向きで隣接していたので、二階の中央スペースには木製の一人用机と椅子とがばらばらに置かれているだけだったので、その間をぬいながら歩いた。
受け付けの向こうにはガラス貼りの部屋があった。本という本が何十冊も積まれている様子が見える、部屋が。ここの中に司書さんがいるのだろうか。俺による大声にも全く反応しない司書さんが。
「すいませーん、聞きたいことがあるんですけどー！」と俺は司書さんに聞こえるように出来る限り大きな声で叫んだ。その際、隣にいるカタギリ君が「流石にうるさすぎないか」と呟いていたが、まあ、やむを得ないってことで一つ宜しくお願いします。そんな細かいところまで一々気にしてたら埒があかないからな。しょうがないしょうがない。
「はいはーい。ちょっとだけ待っててくださいねー」
そして声が聞こえてきた。おっとりして間延びしている、間違いなく女性であろう声。それでもってゆったりとした口調、ほんわかとした雰囲気。おお。まさか俺の予想が当たる日が来るとは。ポンコツ脳も伊達じゃねえってことかねこれは。いいねいいね。調子いいよ俺。この調子でツチクラを傘下におさめてやる。ほら、想像してみろよ。あのツチクラが泣きながら「馬鹿！　どんだけ私のこと待たせんのよ！」って叫ぶ、そんな姿を。あああ、うん。駄目だ、無理っぽい。
ツチクラを号泣させる作戦決行には失敗したものの、でもまあ司

書さん想像作戦には成功したのは間違いない。ようやったようやったよと何ヶ月かぶりに自分で自分の頭を褒めていると、司書さんはいつのまにやら部屋の扉を開けて受け付けに来ていた。部屋の扉は真ん前にあった為、自然の摂理に従って「はいはい。何のご用件でしょうか？」と言う司書さんの前面が見える位置になる。
「ああ」と司書さんの顔を見てカタギリ君が呟いた。
「あれれ？」と俺達二人の顔を見てて司書さんが呟いた。
「ん？　二人共、知り合い？」と俺は司書さんの視線に気付かないまま二人に聞いた。
「……え？　もしかしてハルカ君、私のこと覚えてない？」
司書さんの質問で沈黙状態に陥る俺。あれ、司書さんに知り合いに居たっけか。うわあ、全然思い出せない。誰だっけこの小柄な人。記憶を洗いざらい探るんだ。司書さんが知りあいなんて展開そうそうないんだぞ、自分。
ああ、うん。
駄目だ。全然思い出せない。
やっぱりポンコツ脳はポンコツ脳ってことか。俺の俺による俺への高評価を一分と経たないうちに覆してしまう男、それが、悲しいことに私でございます。「すいません本当にすいません。失礼を承知で聞か」
「どうせ私のことわかんないんでしょー、ハルカ君」
「……すんません」
「はぁー」
長いため息をつきながらやれやれという仕種を大袈裟にする司書さん。それでもほんわかした空気を持ち合わせるこの司書さんは何者なんだろうと思っていたら、その答えはすぐにわかることとなった。「こりゃあ、サナカちゃんも苦労するよねえ」という一言によって。
「……あ」
長いとも短いともいえない考察期間の末。そして司書さんの超絶

ヒントによって、俺は司書さんの名前を思い出すことにようやく成功した。「友永さんだ、友永さんだろ！」
「大正解！　……ていうか一昨日会ったよね、私達。なのに忘れるとかそんなの……駄目でしょそれ！」
アハハハハハハ！　面白いねそれ、面白いよ！
ついに全力で笑い始めてしまった彼女はそれから一分間くらいずっと笑い続けていた。大きな声をあげて、外聞を全く気にしないまま、感情の爆発を大っぴらに表現する。笑いながら、笑って涙を流しながら、笑い上戸の彼女は笑っていた。あれ、なんか表現が重複してないか的なことは気にしない気にしない。
卒業式の時、ツチクラと一緒にいた元女子大生。
友永由里さんが、そこには居た。

そして現在　六

「で。忘れんぼうなハルカ君と、その傍らのシンヤ君は何をしにきたのかな」
小柄な体格。垂れ目の笑顔が何とも言えない雰囲気を作りだし、本来は長いであろう黒髪をポニーテールに一つに纏める彼女、友永さん。
俺の登場シーンの残念さを理由にひとしきり笑い終わると、友永さんは少し涙で潤んでいる目を擦りながら俺とカタギリ君にこう尋ねてきた。ああ、そうか。今更に今更なのだがカタギリ君の本名は片桐真哉であり、つまりは名前を『君』付けして呼ぶとシンヤ君となるわけだ。あれ。でもそうなると俺だけ苗字で呼んで、カタギリ君には名前で呼んでるってことになるぞ。この微妙な差別は、はてさて何を意味しているのか。ただ単純に俺が嫌いなのか、それともカタギリ君の方が俺よりも親密度が高いだけなのか。後者なら精神的ダメージは少なくて済むけれども、前者はやめてほしいなあなんて思ったり。というか友永さんが俺の名前呼んだだけでなんでこんなに考えているんだろうね。それすらもわかんないっていうかそれがわからないからどうしようもねえ。
「……ねえシンヤ君、なんでハルカ君は固まっちゃってるんだろ」
「思うに、あれじゃないか？　君の呼び方の差異に気付いて悲しくなっているんだろう。つくづく小さい奴だなこの男は」
「え？　呼び方って……あ、ち、違うのよシンヤ君！　別にシンヤ君のことを名前で呼びたかったから無意識に名前で呼んじゃっとかそういうんじゃないから！　というかハルカ君の名前なんて知らないから、私！　差別起きて当然！　必然なの、これは！」
何だか俺が呆然としている間に信じられない事実やら信じたくない事実やらが露見したような気がする。いやいやそれよりも何故だか何もしていない筈の俺がボコボコに言われているような。そこま

で嫌われるようなことしたっけなあ友永さんに。あ、違うか。何もしていないから印象がまるで残っていないのか。だから俺に対する口調はテキトーで、天才と一応は称されていたカタギリ君に対してはこうやって顔を真っ赤にしながら応対するという訳なんですね。ええわかりますよ、これが仕方ないってことなのは。アハハハハ、笑いたいのに笑えないや涙が出てくるなあ。

しかもそんな顔真っ赤状態のテンパり友永さんの目の前にいるカタギリ君も満更ではないらしい。「……わかっているよ、言われなくても」と言いながら軽く頬を赤く染めて顔を背けていた。

思わず「何歳だよあんたら初々しい中学生か！」と叫びそうになったのだけれども、そしてその衝動を抑えられそうだったのだけれども無理だったので、結果として俺はその衝動の塊を二人に対してぶつけていた。だっておかしいじゃないか。笑い上戸な彼女はいい。何も悪くないし何も悪い点はない。でも、カタギリ君は。カタギリ君は今さっきまでナイフで俺に脅迫していたんだぞ。それなのに、なんなんだ、この展開は。訳わかんねえ。

「ちゅ、中学生って何よ！」至極当然、俺の叫びに対して反論をしようとする友永さん。「その言い草酷くない？　なんでそんな……ああ、そっかー！　まさかまさかだけど私が君の名前知らなかったことに対して拗ねてんのー？　あーあ陰湿ー。確かに私も悪いけどその鬱憤晴らす為にシンヤ君まで巻き込むの止めてもらえるかな迷惑なんだよホントに！」

「……」予想以上にドギツイ悪口の連打が俺目掛けて襲いかかってきた。うっわ、本当に涙出てくるかもしんねえや俺。あれだよ、ツチクラの悪口がまだまだマシなことがよくわかるな、これと比べるとさ。

「アハハハハ」

対して。

黒く黒く笑いながら息を吸い、第二波を繰り出そうとする友永さんの悪口は、こう、単なる悪口のレベルを超越して何かの呪文にな

っていると思います、はい。「大体さ、いきなり叫んでなんなのハルカ君さ。ここ図書館なんだけどわからない？　ああ、そっか。わからないんだだって数日前に会った私の顔を全く思い出せないような残念な記憶保持能力の持ち主なんだもんねそれなのに私に盾突くとかアハハハハ、あー、何言っちゃってんの？　謝ろっか謝れば許してあげるよそうそう謝ってみようか謝って！」

「すんませんでした友永さん！」何の抵抗もなかった。彼女に対して謝るのに何の屈辱も生まれなかった。ただただ俺は、謝っていたのだ。ヤベーよコエーよ友永さんマジヤベーよ超ヤバすぎる略してチョヤバすぎだよこれ。「そうですよねカタギリ君と親密になりたかっただけですもんね友永さん！　本当に、本当にすいませんっしたあ！」

「え、ちょ、な！　違うってハルカ君そんなこ」

「真っ赤ですもんねそういいながら本当にスマンです友永さん！」

「何気に謝る気ないよねハルカ君！　というか寧ろ私を陥れようとしてないかなハルカ君！」

「いやいやそんなことはないっすよ片桐由里さん！」

「うわ、それ結婚しちゃって……あああ、アウトぉ！　アウトでダウトで終了のお知らせだよハルカ君！」俺の、謝りながら奇襲戦法にどうやら降参したらしい。うわははは、どうだ友永さんコラァ！

陰湿とかいいやがって！　全く否定できないけどとりあえず傷付いたんだよ俺もさあ！　「……って何よその誇らしげな顔！　キー！　ムカつくムカつくムカつく！」

「え、今の鳴き声なんですか？　おいおい猿が図書館に居やがりますよ友永さんこれ！」

「はあああ、はあああ！　誰が猿だ、誰が！　この……いい加減に黙ってよハルカ君！　……アハハハハ、そういえば今思い出したわ流石私！　そうだったね春賀彼方って言うんだよね君の本名！

何よ遥か彼方って！　本人に反比例してかっこよすぎでしょこの本名ー！」

「片桐由里さんにそんなこと言われたくないですけど」
「だからそれ結婚しちゃってるでしょうが！　ふざけないでよハルカカナタこらあ！」
「……そうだよな。君と僕が結婚なんてふざけてるよな。すまない」
悪口の言い合いもヒートアップしてきたところで満を持して登場したのはまさかのカタギリ君だった。「え？」と流石の友永さんも動きをピタリと止め、「ち、違うのシンヤ君！」と言い訳に走る。というか今までなんで黙っていたんだろうカタギリ君は。もしかしてもしかしなくてもまさか今さっきまでずっと顔赤くして顔背けていたとかそんな展開はないよな、カタギリ君。もしそんな理由で今まで会話に参加しなかったのなら告発するぞ、俺は。「何を？」って聞かれたら迷わず俺は「わかんないけどとりあえず何かしらを！」と答えるつもりでいる。なんというぐらぐらな準備完了宣言。我ながら涙が出るぜ畜生。
そう思っている間にもカタギリ君と友永さんの夫婦漫才的な会話は続いていた。まず友永さんが「違うのシンヤ君！　そういう意味じゃなくてね」と取り繕うことから始め、対して沈んだ顔のカタギリ君が「いや、いい」と若干寂しそうな感じで呟く。その後は「違うの、シンヤ君！」「いや、いい」という会話の応酬の繰り返しだった。そうして見事に取り残される俺という男。試しに「片桐由里さーん」と呟いてみたら、満面の笑顔の筈なのに何故かそれを見ると恐怖感が全身を支配するという驚天動地な友永さんの笑みを見てしまい、完全に不動の状態になった。すげえや。怖すぎるったらありゃしねえ。ツチクラの比じゃねえぞこんなの。あらあらいつの間にやら額に冷や汗がビッショリと。普段怒らない人が怒ると怖いってのはまさにこのことなんだろうと俺は考える。
最終的に、カタギリ君と友永さんの一方通行な論争は「はあ、はあ。いいかなシンヤ君。違うから。ふざけてるとかそういうんじゃないから」という友永さんの威圧をもった言葉でカタギリ君が押さえ込まれるという形で終わりを告げた。カタギリ君を押さえ込むと

か。改めてすげえな、友永さん。
「えー、ゴホン。とにかくここは図書館です。今更だけど静かにしよっか」
友永さんが自分を棚にあげながら俺達に注意を促す。何を今更という感じで俺は立ったままの状態で黙って聞いていると、友永さんが「特にそこにいる風のハルカ君。君に言ってんだからね。静かにしてよ」と唐突に俺に対してだけ特別扱い的な忠告をしてきた。
「何で再度俺だけに？」
「決まってるじゃんそんなの。君が一番うるさいんだよ、本当に。黙ってくれるかな？　というか息しないでくれるかなアハハハハ」
「息しなくなったら死んじゃうんだよ人間ってさ。猿だからそれすらわからないかー友永さんはアハハハハ」
「……アハハハハ」
「……アハハハハ」
「アーハハハハ！」
「アハハハハー！」
「冷静に怖いんだが二人共」カタギリ君のツッコミという大変希少価値のあるものを身に感じつつ、俺は尚も友永さんを睨み続ける。まさかこんなに欝陶しい人だったとはなあ。
そんな、友永さんは。
カタギリ君のツッコミを受けて酷く衝撃を受けたようだった。「怖いって何その評価！」とギャーギャー喚き立ててカタギリ君に講義している。ただし口だけだ。拳で軽く小突こうとしたらしいが、何だか恥ずかしくなって途中でやめた描写をドンピシャで見てしまった。もう俺は眩しい笑顔を放つ昔の幻想には捕われてなどいない。そう、昔なら何だか得した気分になったかもしれないが、今は違う。寧ろ吐き気がするような感覚に襲われる。うわあ見たくないもん見ちまったよみたいな。それに対しての拒絶反応みたいな。
「その吐きそうな顔やめてくれるかな、ハルカ君。ムカつく」
「じゃあ見なきゃいいんじゃないですかね」

「ああそうしよっか。君の顔なんてわざわざ見たくないし。ていうか逆に見ちゃったらお金請求したいくらいだよ」
「そっくりそのまま返してやるよ友永さん」
「ムカつく！　ハルカ君ってムカつく！」
「そっくりそのまま返してやるぜよ！」
「じゃあそれをそのままそっくり返してあげるよ！」
「だったら俺はそれを二倍にして返す！」
「じゃあ私万倍ー！」
「兆倍になりました兆倍返しきましたー！」
「無限大数倍だもんね私は！」
「なあ君達」流石のバイオレンスカタギリ君も俺と友永さんの会話に呆れたんだろう。顔を掌でおさえながらため息をひとつつき、続ける。「そろそろ本題に戻ろう。特に春賀彼方。君と僕には試験が待っているだろう？」
「あ、ああ。そういやそうだった」
　つい夢中になって友永さんを罵倒し過ぎた。俺とカタギリ君の目的とやらをすっかり忘れるくらいに。ええと、何だったっけか。
……あれ？
本気の本気で、思いだせねえ、俺が居る。
「あー、カタギリ君。俺達って何しに図書館に来たんだっけ」
「……そこからか春賀彼方。まあいい。もういい。君の頭については何も言わないでおこう」
　やれやれとでもいいたげな様子でカタギリ君はそうして俺に、サンタになる為の試験と、摩訶不思議な試験内容について説明してくれた。それを聞いた俺と友永さんが「何その試験！」「出来ねーだろそんなの訳わかんねーよふざけんなあのメガホン！」と不満をあらわにする。カタギリ君はというと俺を信じられないようなものを見る目つきで「友永由里がその反応をするのはわかるが、君がそれをしたらもう僕にはどうしようもない」とため息をついていた。つまりは呆れていたのだろう。気のせいかもしれないが、俺っていつ

も色んな人という人に呆れられているような。いやいや待ってくれ、俺の周りには変人かはたまたヤバイ人しか居ないんだ。なのに、そんな、呆れられるなんて――。

まさか、俺が一番、ヤバイ奴なのか。「そんなバカな！　ウソだろ、そんなバカな！」

「キャアアアア！　シンヤ君シンヤ君、このヤバイ奴がいきなり叫び始めたよこのヤバイ奴が！」

「確かに。ただ痛いだけというのがまた涙を誘う」

「そんな反応は酷くないか二人共！」

やっぱりどうやら俺はヤバイ奴らしい。ここにきて衝撃の事実とやらが発覚してしまった。はっはっは、何でだろー何でだろー。俺はただただ真面目に生きているだけの成人だというのに。「……もういいや。とりあえずさ、そろそろ本題に戻ろうぜ、カタギリ君」

俺がそう切り出すと、カタギリ君は憤慨だと言わんばかりに「言われなくてもわかっている」と一言呟いた後、友永さんに話を聞こうとした。いわずもがな変身の技術に関する話である。変心じゃねーぞ。それはついさっきの俺と現在の俺の友永さんへの心情変化のことを言う言葉だ。あああ、数分前は友永さんを良い人だと思っていたのに、今では最上級に嫌いな人カテゴリーに入っている。一番嫌いな人と一位を争うくらいだ。

え、一番嫌いな人は誰かって？

そんなのは言うまでも考えるまでもねえ。

俺の一番嫌いな人は、相も変わらずサンタなのでございます。

異論は認めない。というかあれか、異論する人が居ないか。よっしゃ、俺はこのまま突き進む。サンタが嫌いなままサンタになってやるぜ。「なるしかないぜよ、サンタクロースに！」

「はいはいわかったわかった恥ずかしいから叫ぶのはやめようねっと」

いつの間にか移動していたらしい友永さんが、よっこらしょ、とは言わずにドデカイ段ボール箱を受け付けに置いた。何だこりゃと思

いカタギリ君と中を覗いてみると、そこには大量の本が。「『変身』、『サンタ』、『サンタの歴史』、『サンタになる為の試験』。勝手にキーワードは作らせてもらったけど、まあ古い本だとこんなところかな」

「な……」俺はそれを聞いて素直に驚愕した。ちょっと待て、俺がサンタクロースを目指す前に調べていたとしても全然時間がなかった筈だぞ。「と、友永さん。これ、まさかあの短時間で、その上一人で調べた？」

「当たり前でしょうがハールカ君ー。おっとりな雰囲気を醸し出す敏腕司書を嘗めちゃいけないよ」

「いや、それにしても……」

これは凄い、と続けるのもおこがましいくらい凄かった。実際に手に取ってみると確かにキーワードに準じて選び取られているのがよくわかる。『我々はサンタクロース』、『犬でも出来る変身』、『歴史とは考古学。そして、サンタ』、『喋るトナカイ』などなど。なかなかにツッコミどころ満載なラインナップに見えるが、しかしその中身はちゃんとした内容だった。あのバイオレンスカタギリ君でさえ、「こ、これは凄い！特にこの『ミニスカサンタ御奉仕キャンペーン』という本が凄いぞ！」と叫んでいる。中に書かれている内容が凄過ぎて自分が何を口走っているかわからないくらい凄いのだ。

実際の内容を紐解いてみよう。

まずは、この『犬でも出来る変身』という本。これだけ新品同然なのが興味をそそった。それだけのことで手にとったのだけれども、書かれている内容がこれまた凄い。犬の生体系から始まり、次に変身出来る犬が大昔に居たことを提示。その遺伝子が色々な場所色々な生命に行き渡り、ついには人間にまでたどり着いたんだとか。そして、今現在本当に変身出来る人が居る、という話が書いてある。プライバシーの観念から名前は書かれていないが、俺はその人が誰なのか予測がついたから何も言わなかった。

そうか。
やっぱり、あの人は存在するのか。
そりゃそうだ。あの人が実在しないというのなら、十年前の騒動さえ嘘になってしまう。そりゃあんまりだろうな、あの男も。「いやあ、凄いなこの本。肝心の変身の方法が書かれてないのが残念だけど」
「流石の私も図書館に無い本までは捜せないからねー」
「いやいや、誰も友永さんが悪いなんて言ってねえよ。寧ろスゲーって友永さん。見直したよ」
「何様？　やっぱりさ、うん、ハルカ君何様なの？」
「少なくとも友永さんよりは上なのは間違いない」
「うん、何様？　何様なのかなハルカ君！　そもそもハルカ君なんかが図書館を悪く言うこと自体間違ってるんだよ！」
「え？」また俺は驚いた。『我々はサンタクロース』という本を開いたまま、友永さんに言う。「図書館？　図書館の話になんの？」
「当たり前でしょ！　私をけなすのはいいよ！　全然いい！　ハルカ君がそういう性癖なら存分に欲求解消に私を使えばいいじゃない！」
「待ってその台詞だともっと、なんかこう、官能っぽく聞こえ」
「私はいいよ！　でも、図書館だけは駄目！」
完全に俺の言葉を無視し、完全に俺を論破しようと身構える友永さん。何でだ。何でここまで言われなきゃいけないんだ。たかが図書館で、何で友永さんは泣き始めているんだ。「……って、あれ！　友永さん泣き始めてる！」
「図書館ってね、凄いんだよ！　色んな人が書いた本が置いてあってそれを無料で貸し借り出来るの！　ヒグッ、本だけじゃないの！　漫画だって借りれるんだから！　謝ってよ、謝ってよハルカ君！」
「……」
また謝罪展開になってしまったと思ったのは俺だけじゃないと思う。どうやら友永さんは本気の本気で泣いてしまっているらしい。

カタギリ君に助けを呼ぼうとしたら、『ミニスカサンタ御奉仕キャンペーン』を読みながら「……サンタになる為の試験は四月からしか開始されない、だと？　満二十二歳になったらサンタの正体を知ることができ、同時にサンタになる為の試験を受ける資格が得られる――これはわかる。だがおかしいぞ。だったら大学での評価がトップスリーだった僕達が何故、受けなくてもいいサンタ試験を受けているんだ？」とぶつぶつ真面目に生真面目に思考にふけっていた。成る程、これが天才と呼ばれる所以か。どうやら俺のこの懇願の視線も、友永さんの泣き声も全く聞こえていないらしい。スゲエなカタギリ君。街中で超絶美人なアイドルとかに出会っても全く動じないんだろうなあ。

まあ、こう考えている間にも友永さんは泣き続けている訳でありまして。

対する俺はというと、顔を真っ赤にしながら俺に土下座をしようとしていたツチクラの顔が脳裏に浮かんでいた。やはり直ぐさま土下座は駄目だよな。何と言うか、男らしくない。今更か。今更過ぎてもうどうでもよくなっている気もしなくはないが、とりあえずは放置でいいだろう。

「すまん、友永さん」と、俺は頭を下げて謝罪する。

「私じゃない、図書館に謝って！」と友永さん。

「すまん、図書館」と、再び頭を下げて謝罪する。

「……グスッ。謝罪の気持ちがあればよしとしま、せん！」と友永さん。「土下座でしょ！　ここは土下座しかないでしょうがハルカ君！」

「うおい嘘だろ！　ツチクラでさえ土下座を強制するどころかたしなめてくれたぞ！」

「他所は他所、家は家！」

「その常套句を使うタイミングでここまで酷いのは初めて聞いた！」

「一番酷いのはハルカ君なんだからそんなこという権利も自由もないんだよ！」

そしてまた俺と友永さんは互いに罵倒し始めた。結局のところ、俺と彼女の会話手段はこれしかないのかもしれない。本当は心の底から感謝したいのだけど、それを言うタイミングさえ見失ってしまうのが難点だなあ。

という風に、考えていたら。

「おい、ちょっと待ってくれ！　この本に書かれていることは確かなのか、友永由里！」

いつの間にか読む本を代えていたカタギリ君が。

突如、叫んだ。

それを聞き、慌てて友永さんと俺は「何が何が」といいながらカタギリ君に近づく。カタギリ君は真剣な表情でその本を眺めていて、友永さんもその本を一目見ると「……ああ、それかあ」と苦々しい表情を浮かべる。なんだなんだなんなんだと思いながら俺がその本のタイトルを読むと、俺も「ああ。はいはい」と苦笑いするしかなかった。

改めて思おう。友永さんの司書レベルは半端じゃない。

その本のタイトルは、『十年前』。

それに書かれていたのは――十年前のあの事件。

あの男が起こした、サンタの存在を全世界に知れ渡らせた事件のことだった――。

十年前side2

十年前。

私はあの時、あの男の仲間だった。読者の皆様がご存知の通り、男の名前は甲斐谷京極といった。十年前――当時絶対に広めてはならないとされていたサンタクロースの正体を、この街以外の全ての街に知らしめる罪を侵した男。それが、甲斐谷京極という人間である。

そして。

私は、その男を捕まえた人間だ。

当時、私の年齢は十四だった。まだ年端もいかない若い頃。至極当然なのだが、私は別段何をしようともしていなかった。所謂反抗期の延長線上にある無気力という奴である。私は何もしようともしていなかったし、事実何もしなかった。

ただ一つ。

現在から約十一年前――私の父親が起こした事件の余波をなくそうとすること以外は。そうなのだ。私は確かに甲斐谷京極を捕まえた。だがそれは一つの目的の為に狙って起こした行動であり、本来褒められるべき所業ではないことをここに記しておこう。しかし私には、犯罪者を捕まえたという実績が必要だった。犯罪者を捕まえ、十四歳にして私が既にその存在を知っていた――子供たちの一日限定救世主、サンタクロースにいち早くなる目的を果たす為に。

そのついでに、私は、私の父親が起こしたあの事件によって降り懸かる多大な迷惑を退けたかったのである。

私の父親の名前は、これも読者の皆様がご存知だとは思うが――山口大津という。約十一年前。子供もおり、世間一般では夫婦と見なされている成人男性と成人女性十組の何の罪もない人たちを植物状態にする事件を起こした犯罪者。それが山口大津という人間であり、山口大津の娘が私なのだ。

おっと、ここは十年前に関することを記述する項だった。山口大津が起こした行動と、それに伴って私の身に降り懸かった困難については後に記述するとしよう。

閑話休題。十年前の話である。

私はその時、甲斐谷京極の仲間であった。目的は記述するまでもなく、甲斐谷京極を捕まえ、そしてその一派を捕まえることである。理由はわからないが、甲斐谷京極はサンタクロースの在り方に違和感を覚える者の他に、十一年前に我が父山口大津が起こした事件の関係者を集めていた。その関係者とはすなわち、山口大津による被害者と山口大津の家系の人間である。なので私も選ばれた。本来ならば私はその一派のメンバーに選ばれる筈のない人間であったのだが、その理由に準する一つの事実が私にはあったのだが、甲斐谷京極は結果として私を見つけ、仲間に引き入れた。

――「君は山口大津の娘なんだろう？　僕は彼のおかげでこの粛清に踏み切ることが出来たんだ。だから僕は、僕の自己満足の為だけに君を誘おうと思う。どうだい。サンタの存在を、全世界に広めたくはないかい」

甲斐谷京極が私を誘った時に言った言葉を私は忘れることはないだろう。一見するとあの男はただのひょろ長い成人男性だったが、何故か、彼にはついていこうという思いが浮かんだ。カリスマ性というものが甲斐谷京極にはあったのかもしれない。まあ、今となってはどうでもいいことだ。牢屋にぶち込まれ、この街において最大の極刑である無期懲役の罰を与えられている人間の話を記述しても仕方がない。

私はそうして甲斐谷京極の仲間となった。甲斐谷京極の持つカリスマ性には幾度となく振り回されそうになりはしたが、何とか自分の目的を果たそうという意志を保てたことを私は誇りに思いたい。

そうしなければ、今頃、サンタクロースという存在は――白髭の老人だけではなく、成人になった男女ならば誰でもなることが出来る存在なのだという『事実』が全世界に広まっていたかもしれない

からだ。
私が称賛され、十五歳にしてサンタクロースになることが出来た最大の理由がそこにはある。もし私があの日、あの男の行動を止めていなければ、全世界にサンタクロースの真実が全て伝わり、サンタクロースという存在が神格化されていなかったのかもしれないからだ。
サンタクロースとは子供にプレゼントを配る存在である。その為にサンタクロースは勝手に家の中に侵入し、勝手に子供たちへのプレゼントを置いていく。たったこれだけの行為。しかしこれは立派な不法侵入であり、サンタクロースという救世主でなければ許されない行為なのだ。
サンタクロースがサンタクロースであるが故に、私たちサンタクロースは子供たちにプレゼントを配ることが出来る。そして、そのサンタクロースとは白髪の老人だけに限られる。もしこれが成人した男女なら誰でもよくなってしまうのならば、『サンタ記念日』と称され『クリスマス』と称された日に――不法侵入者が相次ぐことになるだろう。
私は。
そうならない未来をつくりだすことに成功した。
それが評価され、私はなんとか成人になる前にサンタクロースとなることができ、同時に我が父山口大津の存在を払拭することが出来たのだ。
では、何故、私は甲斐谷京極を捕まえることに成功し、サンタクロースが白髪の老人であるという根も葉も無い噂を広めることに成功したのか。この事実を説明する為には、私はある人物の存在を隠すことが出来ない。けれどもそのある人物は自分の存在が世間に露見されるのをよしとしなかった。
なので、この記載に限って。
私はその人物のことを、『匿名希望』と称することにする。予め記述しておくが、私は匿名希望のことを聞かれても一切合切答える

つもりはない。今現在読者の皆様が読んでいるであろう本の出版社にも同じ対応をとったので、電話で問い合わせても出版社の関係者たちは誰一人として匿名希望についての質問に答えられないことを了承してもらいたい。私は匿名希望に迷惑をかける気はないのだ。

さて、ようやくといったところだが、私が甲斐谷京極を捕らえた経緯についてこれから記述しようと思う。この記載はノンフィクションであり、一般の人物団体と関係している。

――十年前の夜。

甲斐谷京極は、とあるアパートの屋上に集められた私を含めた一派のメンバーに対して、こんなことを命令していた。

「いいかい。今から君たちにはバラバラにわかれてもらおうと思う。今から僕がある裏技を使ってこのアパートの下に君たちの人数分のトナカイを集合させるから、それに乗ってこの街から外に出てほしい」

この街のトナカイ飛ぶことが出来るという事実を私が知ったのはこの時この瞬間であった。赤色のソリは単なる荷物置き場だという事実もこの時知った。甲斐谷京極は大人子供関係なく、一派のメンバー全員を同等に扱っていたのだ。そんな姿に好感など全く覚えなかった、と表現すると、嘘になる。

「おい。ある方法ってのは何だ」すると、一派のメンバーの中でも屈強な男が甲斐谷京極に質問をした。「この街のトナカイはガキにばれないよう地下に収納されている筈だろ。それをどうやって一カ所に集めるんだ」

対して甲斐谷京極は「うーん」と答えた。「ごめんね。この方法はあんまり知られたくないんだ。だからどんな方法なのかは言えない。ごめん」

「俺たちでも、か」

「君たちでも、だね」

「……そうか」屈強な男は残念そうに甲斐谷京極の言葉を聞いていたが、やがて諦めたようにため息を一つつき、こう言った。「あん

たの言うその方法とやらで、トナカイを集めることは間違いなく出来るのか？」
「うん。それは保証する」
「よし、わかった。仕方ない。俺たちはそういうあんたについていくんだ。口答えは出来ないし、しない。おい皆。いいか、それでも」
屈強な男がそう言うと、私以外のほとんどの人間が彼に同意する言動をした。その時、私以外に彼の意見に同意するそぶりを見せなかったのは、かの匿名希望だけであった。
一派のほとんどが一致団結したのを皮切りに、私を含めた一派のメンバーは甲斐谷京極の「トナカイに乗ってこの街を出たら、空中で一時待機していてくれ。すぐに僕も追い付く。それじゃあ、野郎じゃない人もいるけど野郎供！　粛清を始めるとしようか！」という掛け声を後ろに行動を開始した。流石に私もこの時ばかりは一派のメンバーと同じ行動をした。すなわち、「オー！」といいながら右拳を高らかに掲げ、アパートの階段を降りるという行動である。
アパートの外に出ると、そこには本当にトナカイの軍隊があった。一派のメンバーは戸惑いを隠しつつ、一斉にトナカイの背に乗り、空中へと浮遊する。辺りには一派のメンバー以外誰もいなかった。私たちだけしかいない時間帯――その絶妙な時間帯を、甲斐谷京極は狙ったのだった。
空を見上げたら、続々とトナカイが街の外へ向かう様子を見ることが出来た。彼ら彼女らは街の外へと出て、甲斐谷京極を待つ予定でいた。
その時、私は。
甲斐谷京極の行方を目で追おうとしていた。
私は最初からこの街を出る気などなかった。そんなつもりは毛頭なかったのだ。私の目的は甲斐谷京極という犯罪者を捕まえること。その為に、トナカイに上手く乗れない子供を演じた。途中まで屈強な男が私を見ていたのだが、「先、行ってるぞ」と私に一声かけ、トナカイに乗って飛び立っていった。

私はそして、トナカイという強力な味方を手に入れたのだ。今と違い、当時のトナカイは特定のサンタクロースだけでなく、誰にでも扱えるよう育てられていた。その理由を、当時はあんな事件を起こそうとする者など現れないと思われていたからだと私は考えるのだが、恐らく間違っていなかったと思う。

私はその時、決意を固めていた。甲斐谷京極を捕まえるのだと。

浮遊するトナカイの背に乗り。

――甲斐谷京極に誘われる前からずっと右手に持ち続けているメガホンを用いて、何も知らない街の人達に甲斐谷京極の存在とその思惑を伝え、犯罪行為を未然に防ごうと考えていた。

だから私は乗りかかっていたトナカイからおり、もう一度トナカイを見てからパートナーを選ぼうとした。甲斐谷京極という得体の知れない男を捕まえる為だ。だから私は、一切の油断をすることが出来なかった。

この時、私は気付いた。

確か、甲斐谷京極は人数分のトナカイを集めたと言っていた。甲斐谷京極のトナカイは恐らく今頃アパートの屋上に居るのだろう。そして何らかの準備をしているに違いない。だからこそあの男はいまだにアパートから出ていないのだ。――私の考えは間違っていなかった。何も、間違ってなどいなかった。

ならば。

何故、トナカイが私の分の一頭以外に一頭存在したのだろう。

「ねえ。もしかして貴女、あの男を止めようとしてる？」

そう思った時。二頭の内の一頭がいきなり喋りだした。トナカイは喋れない。なのに、そのトナカイは喋ったのだ。私の方を向いて、しっかりと人間の言葉を用いて。「私、実はあの男に「皆が飛び立ったのを確認したら、トナカイに『変身』してアパートの屋上まで来てくれ」って言われたのよ。貴女のこと、あの男に報告しない方

がいい？」
　これが私と変身が出来るという存在とのファーストコンタクトであり、私が甲斐谷京極を完全に捕まえることが出来た理由。
　匿名希望。
　甲斐谷京極という男に従っている存在。
　その時、私はあまりの衝撃に口を開くことが出来なかった。トナカイの口から響くその声は紛れもなく先刻屈強な男の言葉に同意を示さなかった人物と同じ声だったからだ。
「……貴女のこと、とりあえず報告しないでおくわ」
　私が無言でいると匿名希望はこう言い、ふわりと浮かぼうとした。『変身』という摩訶不思議な行為はどうやらその変身した生物の特性までも完璧に真似出来るらしく、トナカイに変身した匿名希望は浮遊しようとしていた。
　私はその時、ぐしゃぐしゃになった頭を最大限に動かしていた。どうやらこのトナカイに変身した匿名希望は甲斐谷京極に一番近い存在らしい。
　そうならば、匿名希望に上手く協力してもらうことができれば、甲斐谷京極を十四歳の私の手で本当の意味で捕まえられるのではないだろうか――。
　その考えが浮かんだ瞬間、私は匿名希望に話しかけていた。その時匿名希望の両手両足は完全に地面から離れており、あと数秒もすればあの男の元にたどり着いていたといっても過言ではない時だった。
　私は匿名希望に対し、何故あなたは甲斐谷京極の手助けをするんですか、と尋ねた。
　匿名希望はそれを聞くと浮遊していた体を止め、地面へと着地すると、匿名希望は言う。「私ね、どうでもいいのよ。何が起きてもどうでもいいの。十一年前、私の希望は費えたの。だから、いいの。サンタがどうとか甲斐谷京極がどうとかそんなのはどうでもいい。私は、こんな私に対して何かをする為の指針を与えてくれればいい

のよ」
その指針がどこに向かっていても私には全く関係がないから。
と、匿名希望は、続けた。私は身が引き裂かれるような思いだった。そういうトナカイの目はとても悲しげで、その目をさせたのが私の父親なのだから。
私は泣いて謝罪をした。土下座までした。私は山口大津の娘で、貴女の両親を手にかけた男の娘なんですと。そうしても意味のないことだとはわかっていた。わかっていたのだが、言わざるを得なかった。言わないでいられなかったのだ。
匿名希望は私の謝罪を黙って聞いていた。その間三十秒にも満たない。
「じゃあ、どうして」私の謝罪を聞くと匿名希望は直ぐさまこう尋ねた。「どうして貴女は、甲斐谷京極を捕まえようとしているの？」
その問い掛けに、初め、私は素直に答えようとはしていなかった。何故なら匿名希望は甲斐谷京極に　一番近い存在であり、もしかしたら私の反乱を甲斐谷京極に伝えるかもしれない存在だったからだ。
――だが。

私の父親の不名誉によって私自身の評価が下がるのが嫌なんです。父親は事件を起こす寸前に色々と小細工をしてくれましたが、それでもやはり、たまに私の家系を知る人に会うことがあいます。たまにです。ですが、たまに、私は罵倒されます。狂った親が育てた娘だ、と。それが嫌で嫌で、だから私はそんな不名誉を一切合切払拭出来るような名誉を、手に入れたいんです。

私はそのすぐ後に、答えていた。私が甲斐谷京極を捕らえようとする理由を。甲斐谷京極を捕らえ、その功績を基軸にサンタクロースになってやろうという私の目的の根本を。私は涙を流し続けていた。恥ずかしいことに、私は私が言った台詞によって、泣いていたのだった。

匿名希望は私の台詞を黙って聞いていた。やがて少しだけ経つと、「うん、わかった」と大きく頷き、こう言った。「私は貴女に従うよ。私に出来ることがあったら何でも言って」

おじいさんかおばあさんに変身して、私の為に用意されたトナカイに乗ってこの街の外に出てください。一派のメンバーを上手く出し抜いて、一派のメンバーよりも先に街の外の人たちに空飛ぶトナカイとそれに乗るサンタクロースという存在を広めてください。、街の外の人たちのイメージは払拭されず、サンタクロースは老人にしかなれないという根も葉も無い事実が広まる筈ですから。

私は匿名希望にそう伝え、私はアパートの階段を思い切り駆け上がり、悠然と立つ甲斐谷京極を捕まえた。そのかなり後でね。事態の急転を知った一派のメンバーが一斉に姿を街の外へ広めようとしたらしいが、時は既に遅し。街の外では「サンタクロースは白髪のサンタクロース」という噂が広まっており、そしてそれは一般常識となった。

これが十年前に起きた事件と事件解決の一部始終である。私は功績が認められ、いくつかの試験を乗り越えてサンタクロースになった。

匿名希望とは関係が続いていない。匿名希望には匿名希望の目的が出来たらしいのだ。何やら誰かとの再開を約束したんだとか。

――匿名希望に私の作戦を伝え、その後私がアパートの階段を駆け上がった。

この二つの行動の間には空白があった。私は匿名希望に何らかの方法で意識を落とされ、目覚めた時には十五分が経っていた。

その空白の十五分間に何があったのか。

私は未だに知ることが出来ない。

そして現在　七

「嘘っぱちだろ、この本」

十年前というタイトルの本。初版が今年の一月だったが故のタイトルだとは思うのだけれども、もう少しなんとかならなかったのかなこれというタイトルの本。友永さんが集めてきてくれた本の中でただこれ一冊のみが新しく、それでいて作者が『あの男を捕まえた人間』だというこの本。

何も知らない人達がこれを読んだら素直に信じてしまう人も出てきてしまうかもしれねえけど、これは流石に有り得ねえよと断言してやりたかった。確かに。そう、確かに。大体の部分は合っているんだ。あの男の仲間達がアパートの屋上で会合みたいなものをしたのも事実だし、あの男がそういう作戦の上でサンタクロースの存在を全世界に広めようとし、だが結局白髭の老人のみがサンタクロースなのだという噂が広まってしまったというのも合っている。

大体合っている。

けれどもやはり、俺は断固として言ってやりたかった。この本に書いてあることは嘘っぱちだ、と。

何故なら。

――俺が登場していないから。

俺は見ていた。あの男のすることなすことの一部始終を。あの男の後ろについていって、最終的にあの男の目論みが失敗する瞬間も全てみた。全て。全て、だ。だからこそ俺は言える。比較的残念な頭のせいで時折記憶が曖昧にはなるが、あれ程まで衝撃的だった出来事を忘れられるなんてそんなことは、それこそ有り得ねえ。

断言出来る。

十年前――この本の作者はあの場にはいたのだが、実際に全ては見ていないのだと。

「おい、春賀彼方」俺が久しぶりにシリアスモードに入っていると、

俺の右横でいまだに『十年前』という本を握ったままのカタギリ君が俺に尋ねてきた。「それは一体どういうことなんだ。まさか君は、十年前のあの夜に――甲斐谷さんを見たとでもいうのか？」

カタギリ君がやけに真剣な赴きで聞いてきて、その上更にあの友永さんまでもがじっと俺の顔を眺めて俺の言葉を待つなんてことをしてくれたもんだから答えるのを臆してしまったが、別段隠すべきことでもないだろうし、あの過言を隠す為に嘘を言う必要性なんかねえだろと思い、「おう。あるぜ」と軽い口調で応答した。

その瞬間。

俺は、激しく後悔した。

「嘘、でしょ」

スタートを切ったのは友永さんだった。カタギリ君と友永さんの両方共鳩が豆鉄砲喰らったみたいな顔を一瞬だけしたのだが、本を持ってない分だけ友永さんの方が早く動けたんだろうと俺は推測する。まあ要するに、友永さんは「嘘でしょ嘘でしょ嘘でしょ嘘でしょ！」と叫びながら俺の首を絞め始めたのである。「そんな筈ないじゃん！　だってあの男だよ！　サンタクロースの存在を結果的には広めることに成功したあの男を、ハルカ君なんかが見たっていうの！……アハハハハ。ねえ、そんなに軽々しく嘘ついて楽しい？　流石に私も勘忍袋の緒が切れたっていうかあ」

「グェエ……と、友永さん、死ぬ、俺死んじゃう」

「嘘ついてすいませんでした今すぐ土下座したいです！　ってサナカちゃんの目の前で言ってくれたら両手を話してあげるよ！」

「それ達成する為、に、は……まずツチクラをこの場に呼ぶ手間と時間が必要ですよね……」

「そうだね！　その間に嘘つきは死んじゃうんだあ。悲しいねアハハハハ！」

「そこで何故に笑い上戸スキル発動なんだ……」

笑いながら俺の首を締め上げてくる友永さんに恐怖感を覚えたので、というよりも最早友永さんが人間でないように思えてきてしまった

ので、俺は「一生のお願いだ助けてくれええ」と『十年前』を段ボール箱の中に丁寧にしまっているカタギリ君の方を見ながら助けを求めた。
徐々に薄れていく意識の中。
俺が見たカタギリ君の右手には、何だか妙に光りを反射する凶器が収まっていた。言うまでもなく描写するまでもなく、恐らくほぼ大多数の方々のご想像通り、ナイフだった。先刻の、俺を切ろうとしたナイフ。しかも今の俺には現在進行形で「謝ろっか謝らなきゃダメだよこれは謝るしかないよね謝って！」と叫びながら友永さんの両手の力の圧力が首にかかっている。
「今さっき、一生のお願いだとかなんとか言っていたな、春賀彼方。じゃあ僕も一生のお願いとやらを今ここで使わせてもらおう。一生のお願いだ。平然とカッコつけの為だけに嘘を言うこの男にナイフを突き立てようとする僕を、止めてくれ」
「少なくともそれは俺じゃあ無理だ！」
反射で叫んでみたのだがどうやらどうやらカタギリ君の方の勘忍袋の緒も限界ギリギリらしく、うっすらと見えるカタギリ君の右手にはしっかりとナイフが握られており、更にその当の本人であるカタギリ君の顔が物凄く無表情だったのだ。無表情でナイフを人に向けるとか。無理だろそれ。
まあ、さ。
笑いながら人の首を両手で締め上げるのも無理なことにはかわりねえんだけども。
「さー、ハルカ君」
「処刑の時間が始まるやもしれない」
「今すぐ謝れば」
「謝って先刻の発言をなかったことにすれば」
「ハルカ君のこと、許してあげるよ」
「だが、春賀彼方が嘘だったことを認めなかった場合」
「その時はー」

「その時には、君は既に」
「「アハハハハ」」
「怖えよこの人達助けてくださいすいませんでした！」まさかの奇跡過ぎるコラボレーションをかましやがった二人に称賛と危険人物通告を送り付けてやりたい気分を一心に抑えながら俺は言う。「嘘です！　ええ、嘘ですよ！　嘘だけど！　はいこれで満足か二人共ぉ！」
半ばやけになりながら、ていうか本気の本気で意識が消えかかっていたので叫ぶしかなかったっていうのが本音だったのだが、とにかく俺は嘘をついていないのに嘘をつきましたと言って嘘をついた。対して友永さんは「最初からそういえばいいんだよ。まあ私も本気じゃなかったから安心してね。本気だったらハルカ君なんて叫べもしなかったし……ろくな死に方出来なかったよ」とゾッとするほど沈んだ声で俺にそう言って俺の首から両手を離し、かたやカタギリ君は「チッ。また切れなかった、か」と言いながら再びナイフの先端をカバーで覆っていた。もう怖えよこの二人。何が怖いって、笑いながらの凶行と無表情の凶行を同時に見なきゃいけないってのが怖い。
というかさ。
何だか、二人共さ。
――オーバーリアクション、過ぎやしねえか？
「なあ、二人共」ゲホッゲホッと中途半端に止まっていた息をなんとか整えつつ、若干気になったことをカタギリ君と友永さんに尋ねようとする俺。「何もそこまで俺の言うことを否定しようとしなくてもいいだろ。それも二人同時って。……まさか二人共、逆にあの男に会ったことがあるとか？」
俺的には軽いジョークのつもりだった。俺のこの発言を聞いて友永さんは「何言っちゃってんのハールカ君―。そこまでの妄想をする為にはどんな人生送らなきゃいけないんだろうねアハハハハ」という風に返してくるんじゃないのかとか思っていたし、カタギリ君

は「いや、流石にそれはない。何しろあの男はサンタの根本を崩した世紀の大犯罪者だからな。それは、ない」と冷静に返してくれるもんだと思っていた。
だが。
二人共が二人共、さっと青ざめてしまい、下を向き始めた。まるで俺の質問に対する答えをどうしようか迷っているみたいなそんな様子だと見ただけではとれてしまう、カタギリ君と友永さん。
「あー、え？　二人共、図星？」
「そ、そそそそんな訳ないじゃんハルカ君有り得ないって有り得ないって」
「そうだぞ何を言ってるんだ春賀彼方そんな過去は嘘であってだな有り得ないんだよそうだ有り得ない」
「……」
ええっと、これは結局どういうことなんだろう。カタギリ君と友永さんの両者は俺と同じようにあの男を見たことがあるととってもいいんだろうか。
十年前に俺と同じようにあの男を見た人間。
それすなわち、俺と同じように十年前のあの夜あの時間――サンタクロースの存在が白髭の老人だという噂が広まったあの光景を、見ていたってことか？
「嘘だろ。……え、なあ。カタギリ君か友永さんのどっちでもいいから答えて欲しいんだけど」
本に書いてあった変身出来る女性について心あたりはねえか？
そう聞こうとした。そう聞こうとしただけなのに、カタギリ君は「悪い、友永由里。この本、明日まで貸してくれ」と突然言い放つと『十年前』だけを持ち出し、図書館における貸し借りのルールを全く準さずにすたこらさっさと去って行った。マジかよカタギリ君。そこまで俺の質問に答えるのが嫌なのかい。
そしてカタギリ君に取り残された形となる友永さんは、「あ、シンヤ君待って私を置いてかないで」と消えそうな声でつぶやくと、

「……えー」と俺を見ながら落胆するそぶりを隠すことなく思い切り俺に見せつけてくる。「最終的に残ったの、私とハルカ君の二人だけ？　えー。司書の仕事やる気なくすっていうかー」
「そのぶりっ子口調恐ろしく似合ってないからやめたほうがいいと思うぜ」
「こういう感じの口調聞いたすぐ後に人をぶりっ子だって断定するのやめてくれないかなあ」
「ま、それはそれとしてさ、友永さん」
「無視かい私の呟き！　もう、何なのさカナタ君！」
「ちょっと気になったんだけど、下の階の人達って何で俺と友永さんを注意しに来ねーんだ？　防音設備か何かあんのか、もしかして」
「……そういやそうだね」そう言うと、俺が尋ねた事象に対してなのかは知らないが、何はともあれ友永さんは再度輝かしいくらいの満面の笑みを浮かべ始めた。「よかったー。どうやら上手く成功したみたいだね、これ」
「成功？　なんだよ友永さん、防音機能をどっかにつけたのか？」
「アハハハハ。違うよ全然。もうっ、ハルカ君はせっかちだなー」
「……キモチワルイ」
「っ！　誰が何様でそんなこと言える立場なのよ……なんてことは言わないよ、今の私は！　いやー本当に成功してよかったなあ。偉い。私、偉い。エヘヘヘヘ」
「キショクワルイ」
「誰が気色悪いだ、誰が！　折角の喜びが半減しちゃうからやめてよハルカ君！」
「いやいや、だってさ」頬を引き攣らせながら、俺は友永さんに向けて言う。「いきなりそんなおっとりアピールされても、とっくの昔に手遅れ感がさ」
「だぁれがその時期を決めるのよ！　私は今も昔も敏腕おっとり司書だから！　そこらへん勘違いしないでよハルカ君クラァ！」
「今も昔も？　おいおいここにいる人大学卒業前から司書の仕事や

ってたらしいですよこれ！」
「何にも、知らない、くせに、ふざけるのも大概にしてよね！」友永さんはキレながら、まあつまりはいつもの友永さんみたいに戻りながら叫ぶ。「ずっと前から私は図書館でボランティアみたいなことしてたの！　ボランティアから転じての司書さん、それが私なのよ！」
「……はいはいわかったわかった」
「あああ！　私の話に興味なくなったねカナタ君間違いなく！」
ようやく冷静になった、というか強制的にそうしてしまおうとする俺、プラス友永さん。とりあえず冷静になったであろう俺が左手首に巻いてある腕時計を見て時間を確認してみると、時刻は午後二時を軽く越えていた。思わず「げええ」と唸ってしまった俺を許してほしい。だからさ、友永さんさ、唸った俺に対してわざわざ「うるさいよ。ここは図書館だから」とか言わなくてもいいじゃないか。悲しくなるぞ流石の俺でも。
だから俺は反論を試みて、友永さんもそれに反論する。
その後も、ギャーギャーワーワーと俺と友永さんの罵倒の言いあいは続いた。
「もううるさいなあハルカ君は本当に！　お腹空いたでしょ早く行ってきてよ！」「俺基本的に一日二食で足りるんで大丈夫なんだなこれが！」「うっわウッザ！」「そういう友永さんは昼ご飯食べなくていいのかよウッザ！」「食べたいよ私昼ご飯！　でも私他にやることあるから食べれないの！」「他にやることってなんだよ！」「まずこのサンタと変身に関する資料片付けなくちゃいけないんですけど！」「ああそれはやめてくれまだ読むから！　というか、あれだ、あの『十年前』っていう本ってカタギリ君に盗まれたままだけどいいんかい！」「ああ大丈夫あれだけは私の本だから！　あれだけ新品なのにはそういう理由があったんだよ！」「なんであの本を忍び込ませたんだよ友永さん！」「えー何のことわっかんなーい」「やっぱり友永さんさ、あの男に会ったことあるんだろ」「アハハ

ハハ面白いこと言うねえハルカ君はー」「なあ、どこからどこまでが本当で、どこからどこまでが嘘なんだ？」「えー？　私わかんなーい。何のこと？　ハルカ君さ、結局何が言いたいの？」

「そもそもさ、初めからこの図書館はおかしいと思ってたんだ」

俺は出来る限り真剣な表情と言葉で、依然笑い続ける友永さんに喋る。「何で猫が図書館の二階に居るんだよ。何で俺の大きな指摘の声聞いて二階に居た司書の友永さんは何の反応も示さないんだよ。――何で一階の人は、俺と友永さんの叫び声に対して何も言ってこねえんだよ」

「……」

「友永さんさあ」無言のまま、友永さんは俺を見る。その様子を、俺は見る。「『十年前』をわざわざ段ボールの中に入れたことが特にそうだ。……俺の思い過ごしだったらいいんだが、もしかして、何か企んでたりしねえか」

「……さあ、どうでしょー」

そう言うと、友永さんは。

見る者全てを魅力的だと思わせられるんじゃないかというくらい蠱惑的な表情を浮かべ。

受け付けの下の方から一冊の本を両手で取り出し、段ボール箱の本の塊の上に置いた。全体的に茶色で、分厚い。見るからにボロボロで、臭いをかいだら年代ものの香りがしそうなそんな本。

その本のタイトルは――『ある一つの街の技術』というものだった。「今ね。この本読んでるの、私」

「……おう」友永さんのしんみりとした口調に違和感を覚えつつも、俺は相槌をうつ。

「この本に書かれてる内容、面白いの。昔々にこの街から掛け離れた街があったらしいんだ。その街ではロボットと人間が共存してて、三人兄弟の王の家系の人達が街を治めてたみたいなんだよ。ロボッ

トと共存するくらいだから技術面にも優れてたみたいでね、大半は私でも造れなさそうなんだけど、二つだけならなんとか造れそうなのがあるみたいなんだね、これがさー」

と。

一気に喋り、一呼吸おく友永さん。俺が「その二つってのはどんなんなんだ」と聞く前に、友永さんはその『二つ』の概要を語る。

「一つは、『ドアーズスルードア』っていう……まあ、ようは防犯の為のドアを造り出す装置のことかな。専用の小さいチップを最初からあったドアに組み込んで使うの。そして、その組み込まれたドアは――予め登録しておいた人の承認がなきゃあけられないようになるんだよ」

「……」

「もう一つはね、これまた凄いんだよ」嬉々とした様子なのに、静かな雰囲気を醸し出す友永さん。そんな友永さんが、普通に怖かった。ほんの少しだけ、怖い、と思ってしまう俺がいた。「『瞬間移動装置』」

「瞬間、移動？」

「そうなの。私、瞬間移動が出来るかもしれないの。この街でも科学的に不可能ってされてる瞬間移動。それが出来るかもしれないんだよ。……でもまだ調整が必要かなー。外にいた猫ちゃん二匹を二階の司書室の中にしたつもりだったんだけど、位置間違えちゃってたみたいだしね」

うんっ。

やっぱり私、図書館が大好き。「『ある一つの街の技術』っていう本、ずっと捜してたの。禁書に指定されて絶版になってた本。それがまさか、図書館の棚の裏にあるなんて」

アハハハハ、アハハハハ。

彼女は高らかに笑い始めた。俺はそんな彼女を見ながら彼女の言っていた内容を頭の中で復習してみるが、何を言っているのか理解できなかった。何を造っているのかということではなく、何のため

にそんなものを造る必要があるのか。それに対する答えが、全く思い浮かばなかった。
「あーあ。また黙っちゃったね、ハルカ君」彼女はそう言うと、突如「そうだ！　ハルカ君で実験してみよう！」と叫び、受け付けの下の方から何やらおかしなものを取り出した。
手の平に収まるか収まらないかの大きさ。全体が白く、直方体。中央部分に円形の浮き上がった部分が見える。見た分には、堅い、という印象を受けるそれ。
まさか――。
いや、そんな馬鹿なことはねえだろ。そうだ、俺の勘が当たった試しなんてほとんどねえんだ。
だから、これが友永さんの言っていた瞬間移動装置って奴な訳が――。
「流石のハルカ君も予測出来ちゃったかな？」笑って、彼女は俺に一つの事実を告げる。「悪い予感は大体当たるもんなんだよ。残念、ハルカ君。これは皆が羨む対象であるべきもの、瞬間移動装置でーす」
カチッ、という音が聞こえた。
友永さんの親指がスイッチらしき部分を押すことによって、聞こえた。「じゃあね、ハルカ君」
友永さんの告白を聞いて直ぐさま俺もその瞬間移動装置とやらを奪おうとしたが、間に合わなかった。「うおおおお！」
瞬間移動された時に、おかしな感覚はなかった。
――気付いた時には、空中に居た。
今さっきまで二足歩行だったのにも関わらず突然足場がなくなることによって沸き上がる恐怖。重力によって強制的に落下する自分の体。背中を下にして、落ちる。その一連の重大要項への対処方法が何も思い浮かばない。「あああああ！」と。風を感じる。強制的に発生する、下からの豪風が俺の体全体を持ち上げようとするが、落下は止まらない。晴れた空が見えた。その間、俺がまだ落下して

いる途中なのだと頭の隅で考えている間、空を見ていた。何も変わらない。
俺が地面に落ちて、死ぬかもしれないという事実は、何も、変わらない。

「おいおい何勝手に落ちてんだよそこのバカ野郎が！」

そう、思っていた。
その人の声が聞こえるまでは。
その声の主はトナカイに乗っていた。空中を浮遊することが出来るというトナカイに。そのトナカイに乗っている人物の声が、これでもかというくらいに拡大されて俺の鼓膜を響かせる。
――新美教官。
メガホンを片手に持つ女性。見た感じ若そうなのに、教官として俺達三人を教える立場にいた女性。
メガホン。そうだ、メガホンだ。それが全てを繋ぐかもしれないと表現しても過言ではないかもしれない。
『十年前』という本を、書いたのかもしれない女性。十一年前に起きた事件の犯人の娘かもしれなくて、更には、十年前――あの場にいたかもしれない女性。
「よっと」と新美教官は俺をお姫様抱っこの要領で俺の落下を止め、「グヘッ」と俺はその衝撃から思い切りのけ反った。

そして現在　八

気付くと目の前が真っ白に染まっていた。
何がなんだかわからずに途方に暮れる俺だったが、とりあえずまずは現状確認をしようではないかみたいなテンションで渋々周りの確認をしようとする。
ではでは、改めて。
周りは真っ白に染まっていた。ただし、俺の視界の中央に映る三人だけを除いて。肝心の俺はというと気をつけの状態で直立不動しており、ただじっと、その三人を眺めている。その三人の姿を確認してしまった瞬間、即座に俺は悟った。
ああ。
そうか、これは俺の夢って奴の中なんだな、と。
恐らくはお姫様抱っこの要領で俺の落下を新美教官に止めてもらった時に寝てしまったんだろう。そう考えると俺は、内心でまたかと呟く。本当にいい加減にして欲しいな、この俺の体質とやらは。そのせいで俺は今現在横になって無防備で寝てしまっているに違いないだろうし。というかあれか、もしかしたらもしかしなくても新美教官の腕の中で寝てるかもしれねえのか。ううむ。良いことの様な悪いことの様な。
とにもかくにもどうせ起き上がった時に新美教官からのメガホンが炸裂することは目に見えているので、仕方ねえから少しでも寝ている時間を延ばす為に夢とやらに興じてみようではないかと変わり身をしてみる俺。
「カナタには！　カナタには手を出さないで！」
そうこう考えている内に夢の内容展開は始まっていた。三人の中の一人であり、寝間着の上に白色のエプロンを着た女性――俺の母さんらしい人が叫んでいる。誰に向かって叫んでるのさ的な疑問がもしこの場であがったとしたら迷わず瞬時に答えてあげましょう。

「キャハハハ！」三人の内の一人であり、黒いストレートパーマを思いきり振り回しながら右手に持つ工事なんかで使いそうなハンマーを三人の内の二人に向ける男――皆さんご存知山口大津という輩であります、はい。「あああ、大丈夫大丈夫、大丈夫だから！　俺様はさあ、あんたら二人だけを叩きに来ただけだから！　叩いて叩いて叩いて叩いて、あんたら二人が永遠に生き続ければそれでいいだけだから！」

「な、何だそれ！　ふざけるのも大概にしろよ！」既にハンマーで一度叩かれたであろう頭を右の手の平で押さえながら尻餅をつきながら、必死に叫ぶ男の人。俺の父親らしいんだ、この人がさ。「何が目的でこんなことを！　ふざけるのが目的なら帰ってくれ！」

「あああん、ああん？　ふざけるのが目的って何イっちゃってんのあんたはさ。俺様の目的はすなわち人間の永久保存でありそして最上の贅沢の状態なんだよねーでも流石に俺様一人だけだったら寂しいからさ、幸せで幸せな二十人くらいなら道連れしていいかなあなんて、さあ！」

さあ！　さあ！　さあ！

行こうぜ至上に！　イこうぜ至上に！

でもその前に！　聞かせてあげよう俺様の想像する最高の贅沢を！　「俺様はさ、植物状態ってやつが、人間の到達すべき地点だと思うんだよねキャハハハ！」

「……何言ってんのよあんた」

あのバイオレンスカタギリ君なんか月とすっぽんレベルに陥る程の狂いっぷりを見せつける山口大津に対して、俺の母親が俺の父親の背中を支えながら冷静に反論する。山口大津を見る母親の目は冷酷と表現してもいいくらい鋭く冷たくなっていて、俺は夢の中でこの目を見る度に母親という存在に逆らってはいけねえんだよとそこら辺を歩く誰かに向けて唐突に忠告したくなる。「植物状態が贅沢？　ふざけんじゃないわよ。あんなもん残した人を悲しませるだけの病状じゃない。考えてみなさいよ、あんたも。身内の誰かがいつ

起きるかどうかわからない状態になって、それをずっと看病する生活。『いつか起きるかもしれない』みたいな小さな希望にすがってさ、そんなの周りから見たらキツ」

長々と続きそうだった俺の母親の言葉はそこで止まり。

気を失って、白い床に横になって倒れてしまう。そんな状態になってしまった母親に、「大丈夫か！　大丈夫か、おい！」と呼び続ける俺の父親。

――その光景を見下ろしながら、「説教、要らない」と冷たく言い放つ山口大津。山口大津の右手には、俺程度の動態視力では見えないくらい早い速度で俺の母親の頭を縦に打ち抜いたハンマーが収まっていた。「何様？　ねえ何様？　キャハハハ。あー、わらえねえや。俺様に説教とか何様？　キャハハハ、何様？」

そう言いながらゆっくりとハンマーを振りかぶり。

依然として俺の母親を呼び続ける俺の父親に、「何様？」と尋ねながらハンマーを横に一閃する。そうして、そして。俺の母親と父親は動かなくなり、横に倒れてしまった。

ここからは駄目だ。

ここから先は、いくら十一年経ったからといっても頭の苦痛なしに見れるような代物じゃあねえ。でも俺は見るしかなかった。何故ならその光景は俺の精神的苦痛であるトラウマという奴が見せている光景であり、俺は、十一年前に隣の部屋の布団の中で震えながら見ていたこの光景を見ないということを、選択しないなんて選択は許されない。

「駄目駄目。あんたらが植物状態になるにはさ、まだまだまだまだ叩かれ叩かれ叩かれ叩かれないと駄目駄目なんだよキャハハハ！」

だから俺は唸りながら見た。山口大津が「キャハハハ！」と笑いながら、何回も交互にハンマーを俺の両親に振り下ろす光景を。人体の至る部分に鈍器が振り下ろされる。鈍器が俺の頭の中を震わす音が、響く。響く。響く。空虚の空間を震わしながら。俺はそれを見ながら泣いて、悲しんで。でも、それでも恐怖のせいで動くこと

が出来なかった。
「さあああ、次の道連れ候補の家へゴー！　そうだ、京都へ行かずに植物状態になろう！　オレサマさまはサンタさーん、でも少し変えればサタンさーんたキャハハハ！」
山口大津は俺なんかに目もくれずに家から出ていった。それを見計らって「ママ。パパ」と呟きながら登場する子供の頃の俺。横たわって、意識を失っていて、呼びかけてもゆすっても何の反応も示さない
ドクン、と。
何かが揺れ動く音がした。
そして芽生える感情。この溢れ出る激動を、自分でなんとか制御する為に生み出した感情。「ママとパパはぼくを置いていくの？　嫌だよそんなの。ぼくは嫌だよ。……嫌だから！　嫌だから！　お願いだよ返事してよ！」
もし返事をしなかったら「返事をせずにずっとこのままだったら、ぼくは、ママとパパを嫌いになるから！」――。

「そんな選択をした自分も嫌なんだ……だから俺は自分が嫌いで母さんも父さんも嫌いで、でも、俺は本当は、本当は母さんと父さんのことが……っ！」
「おう、やっと起きやがったか。おはよう」
「……おはようございます」そう答えると、俺は俺を包むかけ布団を押しのけながら体を起き上がらせる。
どうやらどうやらここはアパート二階の俺の部屋の寝室らしく、俺がいるベッドの横にあぐらをかきながらメガホンをティッシュで掃除していたらしい新美教官ウィズ帽子はつまり、どういう訳だか理解不能だけども俺の家の中にいるということになる。おいおい。てことは俺と新美教官しかこの部屋には居ねえってことか。なんだ

それ。どんな展開の末にこうなったんだよ。「えーと、なんで新美教官が俺の家に？」
「ああん？　何だお前、そんなことよりも何よりもまず私への御礼から会話を始めるんじゃねえのか」
「御礼？　……何に対してですか？」
「ふざけんなこの奇想天外野郎がっ！」キレるとなったらすかさずメガホンを口の前に持っていって叫びだす習慣があるっぽい新美教官。言うまでもなく俺は「へァッ！」と何の工夫もなしにお約束の悲鳴を叫び、涙目になりながらシャキンと意識を覚醒させられた。
「まず、よくは知らねーが何の装備もなしにスカイダイビングしてたお前を私が華麗にキャッチしたことに対して！　次に、その後即座に寝始めたお前をこの部屋まで連れて来て寝させてやったことに対して！　最後に、一日の内三回くらいお前を看病に来たことに対してだ！」
「耳に響くどころか多分アパート全体に響くと思うんでとりあえずメガホンを置いてください話と指摘はそこからにしましょう！」
「なんだ、そうすりゃ春賀彼方受験生は私に御礼を言うのかあっ！」
「そりゃそうなると思いますよへァッ！」
「よぉうしわかった置いてやるよ！」
　意外と簡単にメガホンを置いてくれた新美教官。なんだこの人、そこまでメガホンに執着心がある訳でもねえのか。それか、頼まれたから仕方なく置いたのかのどちらかか。まあどっちにしたって結局メガホンを置いてくれたんだから俺には関係ねえな、うん。そうやって合理的に且つとんとん話を進めようとする男、それが俺という存在であります。「……ありがとうございます、新美教官」
「その御礼は何に対してだ」
「メガホンを置いてくれたことに対してですね」
「そうか。じゃあ足りねえな、もう一回叫ばせて貰おうかあ！」
「あああとあれです、あれ！」目の前の眼光から逃れる為に思わず取り繕おうとする。「新美教官が俺を助けてくれたことに対して

と、俺をこの部屋まで運んでくれ……」
そこまで勢いで言ったところで自分の発言内容に不可思議な点を見つけてしまった。
いくら頭がパーな俺でも、鍵の開け閉めくらいはキッチリやってる筈だぞ。「新美教官。あの、どうやって鍵がかかってた俺の部屋に入れたんですか」
「ん？　そんなもん言わなくてもわかるだろ。先が尖った針金で十秒くらいドアノブいじりゃあ開くだろうが」
「犯罪者ここに極まり！　ちょ、ピッキングで新美教官は俺の家に侵入したんですか！」
「何だよその言い分はよ。まるで私が悪いことしたみたいに」
「間違いなく圧倒的に悪いことしたんですよ新美教官は！」
「へえ。お前、何気に度胸あんのな」俺が心から湧き出る勢いに任せて文句を言い切ると、新美教官はニタリと召喚されたばかりの悪魔みたいに笑う。そして手に取る、メガホン。「わかってるか？　私がここで「キャー助けて襲われるー」みたいな叫び声あげたら、お前は一瞬で犯罪者の仲間入りなんだぞ？」
「……」
脅迫がやけに生々しくてリアクションに困った。ああっと、まあ確かにこの場この時間帯で叫ばれたらお隣りさんなんかに聞こえて俺の信用はがた落ちになるかもしれねえ。あれ？　というか今は何日の何時で、そして俺はどれくらい寝ていたんだ？　尚もニヤニヤしている新美教官の顔を見ながら、俺は徐々に重要な出来事の数々を思い返す。
ツチクラの意味深な言動。
カタギリ君がもしかしたら十年前にあの場所に居たのかもしれないということ。
友永さんの思惑。
そして、「……忘却の彼方に放っててすっかりさっぱり完全に忘れてたぜよ！　うおいサンタ試験！　うおおいサンタになる為の試

験、え、今何日！　何時なんだ！　ふおああヤベエ！」
「ヤベエのはお前だっつーの一回落ち着けやあっ！」
「へァッ！」
　極度の混乱により沸騰しかかっていた俺の脳の働きを新美教官のメガホン攻撃が沈めてくれる。いやいや、沈めてくれるのはいいんだ。そこには感謝したい。本当に。本当と書いてマジと読む俺の心境。でもそのせいで俺の鼓膜とかお隣りさんとの関係とか色々と崩れそうになるのだけは止めてほしいなあなんて思ったり。
「すいません、新美教官」ようやく俺は冷静になり、新美教官に一応の謝罪をする。「あの、それでですね。差し出がましいとは思うんですけど、今が何時で、サンタ試験は残り何日か教えてくれませんか？」
「その前に言うことがあるだろ」
「え、何かありましたっけ？　ピッキングのやり方教えてくださいとか？」
「お前の頭をピッキングしてやろうかああんっ！」俺の冗談を聞くと、新美教官は今度はメガホンを使わずに怒鳴るだけという手段で俺に対してキレる。眼光の鋭さが今までで一番凄まじいように感じるのは俺だけなんだろか。どうやら新美教官、本気の本気で怒っているご様子。「三つ目！　三つ目だ！　それに対して御礼言ったら私は何でもお前の質問に答えてやる！」
「え！　じゃあラーメンを夜食に食べると無茶苦茶美味な理由とかも教えてくれるんですか！」
「真っ先に聞きてえのがそれかよお前！　人生もっと充実させろこの野郎！」
「そこまで言わなくったっていいじゃないですか！」
「ああ、もういい！」はいはいわかりましたよ答えりゃいいんだろ答えりゃみたいなことをいいたげなそぶりをした後、新美教官は立ち上がって俺の顔に新美教官の顔を近づける。近い。新美教官の顔が近えよ。「いいから早く御礼を言え。いくらお前でもほんの数分

前に私が言ったことだ。覚えてんだろしらばっくれてんじゃねえぞおいおいおい」
「……ええっとですね」
何故ここまで新美教官は俺からの礼なんかにこだわるんだろうか、という疑問はさておき。
やっぱりここでもお約束。「先に言っておきます。すいません、新美教官。覚えてな」
「頭ピーマンで耳がちくわな奴って本当に居るんだなここによう！」
新美教官の顔が俺のすぐ目の前にある為、大きな声も新美教官の口から吐き出される液体も全て俺の顔面が受け止める形になる。しかしながら俺は本当の本当に覚えてないんですね、これがね。「チッ、んだよ。私のかいがいしい努力は水の泡かよ」と新美教官が悲しい表情で俺から離れるのを見て少しいたたまれなくなり、「すいません、覚えてないです」ともう一度俺が言うと、「うっせえ！」という新美教官からの返事が。「もうお前黙れ。普段は物静かで温厚な少女の私も流石に勘忍袋の緒が切れた」
「あれ、一個も当て嵌まってないような」
「うっせえっつってんだろ！　黙って私の話聞いてないと次はメガホン使うぞ、メガホン！」
それから正座だ、正座しやがれこのクルクルパーマン！　と新美教官が続けたので、文句を言う暇も気力もないまま無言で床に正座する俺。つまりは新美教官が俺を見下ろす感じに。その新美教官の手にはやはりメガホンが。あれ、ここって俺の家だよな。「何で家の所有者である俺がこんな体勢に……」
「ああん！　なんか言ったか！」
「いえいえ何も言ってないですだからメガホンを口の前に持っていくのはやめてください！」
「よし。わかったならそれでいい」たまりにたまっていたストレスを少しは掃き出せたのだろう。先刻よりもほんの少しだけ表情が明るくなった新美教官が俺を見下ろしながら言う。「じゃあ今から試

験の教官として言わなきゃいけないことと、個人的にお前に対して言いたいことを言わせてもらう」
「そ、それってもしかして愛の告」
「ちなみに春賀彼方受験生が無断でくだらないことを喋った場合、殺す」
「リスクが高すぎてすかさずゲームオーバーになっちまう俺！」
「ああ、喋っちゃったー。さーてとっ、どうしてやろっかなー」
「心なしかこれまで聞いた中で一番新美教官の口調が明るい気がするのは何でなんですか！」
窮地に追い詰められた俺が幾度になる土下座を決行しようとしたが、ツチクラの台詞を思い出した。じゃあ次に普通の謝罪をしようとしたら、友永さんの台詞を思い出す俺。ヤバイぞこれ。土下座も普通の謝罪も出来ねえ。八方塞がりじゃねえかこの状況。どうしろってんだ。
俺がそうやってまあまあ真剣に悩んでいると、新美教官が俺の頭を右手でポンポンと叩き、「反省してくれりゃそれでいいんだ」と柔らかく言ってくる。その目は慈愛に満ち溢れており、何だか逆におぞましいと感じてしまう俺は間違っているのだろうか、いやない。
「だらっしゃー反語系バンザイ！」
「リアル半殺しを二回繰り返すとどうなると思う」
「リアルに死んじゃいますね俺が！　すんません先に進みましょう先に！」
冷や汗が額を伝い死を覚悟した俺が話を促すと、「ったく、少しだけ見直してやったのによう。次はないと思えよ」とだけ言い捨て、新美教官の本題に入る。ようやく。ようやく、だ。何だかここまでくるのに物凄く時間がかかったような気がする、いやそんな気はしない。そう思うことにしようかみたいな。
「えー。まず、教官としてお前に言わなきゃならないことを言わせてもらおう」そう言いながらどっこいしょと床に座る新美教官、再びあぐらをかく状態に。動きだけ見たら完全におっさんなのだが俺

は絶体にそれを言わねえと心の中で誓う。「どうだ、春賀彼方受験生。サンタになる為の試験は突破出来そうか」
「……出来る訳ないでしょう、あんなの」
言われて思い出すサンタ試験の内容。白髭の老人に変身しろというサンタ試験の内容。「変身なんて普通の人間には出来ませんよ。どうしろってんですか」
「まあそう愚痴を言いたくなるのはわかる」
言いながら陽気に笑いだす新美教官。「変身なんて芸当が出来る奴ぁ、お前が知ってる中では一人くらいしか居ないもんな」
「な……っ！」
――今になって思い出した。
てか何で俺はこんな重要なことを忘れてたんだよ。あそこまで衝撃的な史実を忘れるとか、とうとうここまで来たか俺の頭は。
目の前に座る女性、新美教官。
彼女は――『十年前』という本を書いたかもしれない人物で、イコール、十年前にあの場に居たかもしれない人物なのに。
「……新美教官。新美教官って、何者なんですか」
「んん？　何者って聞かれて堂々と答えられるくらいの大層な称号は持ってねえよ。史上最年少でサンタになって、昔、私の父親が起こした事件の償いに奮起するしがない女だ」
そう言うと、豪快に新美教官は笑ってみせる。新美教官はわかっているんだろうか、知ってるんだろうか。俺が、新美教官の父親――山口大津によって両親を病院送りにされた被害者の一人であるってことを。「……って、あれ？　新美教官と新美教官の父親の名字が違うのは何でなんですか？」
「ああ、そりゃ簡単だ。あの野郎はあの事件を起こす前に私の母さんと離婚したんだよ。そんでもって私の名字は母方のもんだ。母さんは「あんたと私に出来る限り迷惑かけないように私と離婚したんだよ、あの人は」とか言ってやがったが、どうなんだが」
一気にここまで言うと、「ん？」と一瞬言葉に詰まり、新美教官

は恐る恐る俺に聞く。「お前、私が山口大津の娘だって知ってたっけか」

「……」

さあここでどう答えるのが得策なんだろうかと悩み始める俺だったのだが、悩んだらとりあえず何も考えないでゲロっちまおうというのが俺の隠れたポリシーってやつなのかもしれない。最終的に俺は少しの躊躇いの後、「『十年前』って本。読ませてもらいました」と新美教官の目を見て素直に答えていた。

対して。

新美教官は「ああ。あー」とだけ唸り、「そうか、あれを読んだか。今年の一月に三十部くらいしか売れなくてすぐに絶版になったやつなんだが……」と言う。顔に手を置き、何だか恥ずかしそうだった。やっぱり自分で書いた文章を読まれるのって恥ずかしいことなんだろうか。というか、あれか。「三十部くらいしか売れなかったから読まれるのが恥ずかしいんですね」

「ううう。否定は出来ねえ」意外と何の反論もなしに俺の言葉を受け止める新美教官。「まあ内容が内容だったからな。あんな本を普通の書店で置いたら即刻子供にばれるし、かといって街の外で売る訳にはいかなかったからやむなくネットでこっそり販売したんだが……。よく見つけたな、あの本。希少価値があるぞ、正直」

「あ、いやいや俺が買った訳じゃないんです。友永さんっていう同年代の人が持ってたのを読ませてもらっただけで」

「友永……？　ああ、友永由里か。あいつは持っててもおかしくねえな」

「はい？」

新美教官の言い方に違和感を覚えつつも、「いかんいかんまた話が逸れてる。間髪入れずに言わなきゃいけないことと言いたいことを一気に言わせて貰うぞ」と新美教官が身構えたので、流されやすいタイプの俺は「あ、はい。お願いします」と言うしかなかった。何で新美教官が友永さんのことを知っているんだろうか。まあ、い

いかどうでも。
「まず、教官としてお前に言わせてもらうこと。――『トナカイはおおっぴらに飼われている。基本的に小屋の中に居る』。理解したか？　じゃあ次、私が個人的にお前に言いたいこと」
「ちょ、ちょっと待って下さい。何の話ですか、それ」
突然告げられて頭がついていかねえ。えっと、何だっけ？　トナカイがおおっぴらに飼われていて、小屋にいる？　当たり前、だろ。トナカイ小屋ってことだよな、この家から歩いて二十分くらいの場所にある。
そんなの。
この街に住んでりゃ誰だって知ってる一般常識に過ぎねえじゃねえか。
なのに何故、新美教官はそれを改めて言ってきたんだろうか。教官として言わなきゃならねえこと？　注意事項ってことか。もしくは、試験のヒントってことなのか。あああ、わかんねえ。
「すまねえな。反論も質問も受け付けねえつもりだ、私は。とりあえず言っちまうから後は自分で考えろ。んじゃ、次」そう言うと、俺の困惑などお構いなしに、これまた一方的に新美教官は続ける。
「『友永由里と片桐真哉が昨日の昼、接触』。『片桐真哉と土倉佐中が昨日の夜、接触』。『友永由里と私が、昨日の深夜、接触』。そんでもって、『お前のアパートは屋上まで昇れる』ってことだ」
「……は、はあ？」
何のストップもかからずにこんなにも膨大な情報量を手放しで渡されたのは久しぶりのことだったんで、俺はしきりに戸惑いまくった。その様を見ながら「まあゆっくり考えろ。お前がしっかり理解出来たら、もう一つだけお前に言わせてもらうからそのつもりでな」と平気で言い放つ新美教官。鬼かこの人。これ以上俺を苦しめて何を楽しむってんだよ。
畜生。
とにかく俺には、新美教官の言ったことの内容を理解するしか俺

の周りで起こっている色々な不具合を解消する方法の道標はたてられないみたいだ。何もいわないで、何をいうでもなく、考えさせてもらおう。

まず、友永さんとカタギリ君が昨日の昼に接触したことについて。……と、考えようとし始めたところ、即座にこれは考えなくていい内容だということに気付く。律儀と思われるカタギリ君のことだ。大方のところ、『十年前』を友永さんに返しに行ったんだろう。「……というかですね、新美教官。一気に言われてスルーしちまいましたが、何で新美教官がこんなこと知ってるんですか」

「ストーキングしたんだよ」

ピッキングにストーキングってどんな犯罪者だよ、と深く突っ込むことをやめた俺の選択は間違っていなかったと思いたい。

次に、カタギリ君とツチクラが昨日の夜に接触したってことか。ううむ。こればっかりは何とも想像しがたい。まさかあの二人が逢い引きの為だけに会うとは思えねえし。いや、もしかしたらそういうことなのか？　いやいや、そんな訳ねえ。はっはっは。あー、考えるのをやめようアッハッハ。

というか、あれ？

昨日って、いつだ？　「……新美教官。俺って何日くらい寝てましたか」

「おお。ようやくそこに突っ込んでくれたか……てか遅すぎるだろお前……大丈夫かホント……。あー、お前がスカイダイビングしたのが一昨日の昼だ。で、今はそれから二日くらい経った昼だな」

つまり、今は、サンタになる為の試験四日目ってことになるのか。うわあ。何にもしてねえぞ俺。明日くらいに漫喫行って忍者漫画全巻読むしかねえのかもしれねえなあ。

まあ、何はともあれ。

新美教官は二日間俺を看病してくれたってことになるな、多分。

「ありがとうございました、新美教官。俺なんかを看病してくれて」

「お、おお！　おおお！」俺が感謝の言葉を伝えると、明らかに朗

らかな感じになる新美教官。「は、はは、何てこたあねーよ看病くらい！　ははは、どういたしましてどういたしまして！」
ハッハッハ、何だよお前ちゃんと御礼言えるじゃねーか！
そう言いながら新美教官は俺の右横に近寄ってきて背中をバンバンと何回も叩き、また立ち上がって本の位置に座り直した。そこまで嬉しいのか、御礼を言われると。メガホン女性が代名詞だと思われた新美教官も案外良い人なのかもしれないとかなんとか上から目線になって思ってみる。
ああ、そうこうしている内にまた話が逸れた。戻そう戻そう元の話に。
――友永さんと新美教官が接触したということについて。
これぱっかりは張本人が目の前に居るから聞いた方が早いだろうということで、「新美教官は友永さんとどういう関係なんですか」と聞くと、「ちょっとした宿敵って奴だったよ、昨日まではな」という答えが返ってきた。
ナンダソリャ。ナンノコッチャ。
やばいぞこれは。
結局のところ、新美教官が提示してくれた内容についてわかったことがほんの少ししかねえ。
特に、これだ。このことをわざわざ俺に言う必要性が感じられない。「俺のアパートは屋上まで昇れるってことを何で言ったんですか、新美教官。いつの話しですか、これ」
「ん。ハハハッ、あーそうかいそうかいしらばっくれちゃうんだな、お前」
そう言って、今までの笑顔が一変。
真剣な表情の新美教官が、俺に言う。「『十年前』を読んだならわかってんだろ？　私は知ってるんだよ。お前が十一年前の事件の被害者の家族で、十年前――それがキッカケで甲斐谷京極に目をつけられたってことをな」
背筋が凍った。有無を言わさず、俺の言動が縛られる。新美教官

の全身から発せられる、無言のプレッシャーによって。
俺は何も言えなかった。新美教官が「私の父親が起こした十一年前のあれはすまねえな。まあ、今更謝られたってしょうがねえよな。とりあえずそれはおいおい話し合うとして――十年前のことについて、だ」と俺に対して柔らかく言ってきても、俺は、何も言い返すことが出来なかった。
だから。
新美教官が「じゃあな。試験、頑張れよ」と言って俺の部屋を発つ前に告げたことに対して、何も考えることが出来なかった。
「春賀彼方受験生。明日の昼、もし時間があるなら刑務所に行ってくれねえか。甲斐谷京極がお前に対して話しがあるらしいんだ」

そして現在　九

結論から語るとしよう。

新美教官に提案された甲斐谷京極との面談なのだが、俺はというと、サンタ試験五日目にあたるその昼――漫画喫茶略して漫喫に居た。平たく表現するとすると、俺はその日、甲斐谷京極に会いには行かなかったということになる。

昔だったら行ってたのかもしれない。それこそ十年前だとかそういう時期に同じ話を持ち掛けられていたとしたら、俺は何の迷いも無く甲斐谷京極に会いに行っていたに違いない。そりゃそうだ。何故なら俺は甲斐谷京極のおかげであの女の人と約束を誓うことが出来たのだから。

要は、情報収集の為に俺は甲斐谷京極と話をしたかった。甲斐谷京極に憧れたとか甲斐谷京極自身と話しをしたかったっていう気持ちはない訳じゃあなかったが、それでもやはり、あの女の人の情報が少しだけでも手に入るかもしれなくてもやはり、サンタ試験の内の貴重な時間を潰してまで会いに行こうとまでは思わない。どうせ甲斐谷京極はあの女の人の居場所なんて知る由もねえんだろうし。推測で、予測だけど。

なので、サンタ試験五日目。

俺は、自分が思い付く限りの手段を用いて変身の技術について調べていた。丸一日。丸一日、だ。朝から漫喫に入り浸り、いつの間にか時刻は午後二時。ああこりゃいけねえ甲斐谷京極との面談とかなんとかあったような気がしたけどまあいいかどうでもと考えた俺は、漫喫から飛び出して図書館へと向かった。友永さんとしっちゃかめっちゃかあったせいで読み切ることが出来なかった変身に関する本当を読みに行こうという算段の元、俺は図書館へと向かったのである訳なんですよ、はい。

でも、残念ながら図書館は開いていなかった。

図書館の周りには青い制服を着た警察の人が陣取っていて、中に入ろうにも入れねえことになっていたからだ。その時俺は誰に向かってでもなく「は？」って呟いた記憶がある。まさか図書館が警察官さん方の手によって包囲されているとは思わなんだ。

一体全体何があったんだろうと自然の流れで疑問を浮かべた俺は、少し迷った後、図書館を囲む警察官の一人に話しかけ、何があって図書館を包囲しているんですか的な旨を聞いた。その警察官はモデルみたいな女性で、目つきがキリッとしていて足がスラッとしていて、何とも言えない風貌の人だったんですね、これがね。

そんなようなことを思いながら警察官の人の話しを聞いていたのだが、なんとか大体の内容は頭の中に入ってきた。そうだよこれだよこの技術だよ。別のこと考えながら、尚且つ他の人がする話を頭の中に入れるこの高等技術だよ。今回は何とかなったからよかったものの、ツチクラや新美教官とかの前では何故だか上手く扱えないこの技術。やっぱり話す人の風貌が大切なのか――とかなんとか言ったら問答無用でキレられそうで怖いので口をつぐむとしようか。この判断は間違っていなかったのだとこんな自分でもよくわかる。

――事件が起きた。

その警察官さんが言うには、図書館で事件が起きたらしいのだ。この時点に当たる昨日の十時、つまりはサンタ試験四日目にあたり、更には俺とカタギリ君が図書館二階でぎゃあぎゃあわあわあと喚いていた時、事件が起きたらしい。

友永さんが使う『瞬間移動装置』と『ドアーズスルードア』という二つの不可思議な科学的物体によって、事件が起きたんだ。

ことのあらましはこうだ。――図書館は午前十時になったら開く。俺とカタギリ君は暇だった為図書館が開くのを待っていた。そのおかげで一番乗りに図書館へと入ることが出来たのだが、そこからがいけなかった。

恐らく、友永さんは二階の窓から俺達が図書館に入る姿を目撃したんだろう。猫二匹を瞬間移動の実験体としていた友永さんのこと

だ。その拍子に俺とカタギリ君の姿を見たと仮定しても何の矛盾点も不可解な点もねえ。

俺とカタギリ君の姿を見た友永さん。いや、正確にいうと俺の姿を見た友永さん、か。まだ実験段階ながらもとりあえずは作動する瞬間移動装置も持っていて、ドアーズスルードアとやらで図書館を隔離することも出来る彼女。

そう。

多分なのだが、友永さんが――図書館に居た人間全員を、街一番の大きさを誇る湖にまで瞬間移動させ、図書館の出入り口をこれまたイリュージョンのような方法なのかの判断もつかない方法で封鎖した。鍵をかけたとかそういう次元ではなかったらしい。どれだけ押しても引いてもビクともせず、尚且つ中の音が一切聞こえなくなったんだとか。扉だけならよかったのだが、窓も全て同じような状態になり、どうしようもなくなってしまった状態に図書館は陥った。十二時頃に痩せ型の男性が何の障害もなく扉を開けて図書館の中から出てきたらしいが、直ぐさま走り去って行った為目撃情報しかないのが残念なところだ――と警察官さんは言っていた。まあ十中八九カタギリ君だろう。ドアーズスルードアというのは所有者の承諾さえあれば出入り出来る扉らしいので、大方友永さんがカタギリ君と俺の出入りのみを承諾していたとかそんなところだろう。正直よくわからないんだけども。

何はともあれそんな事件が起こったが故に、今現在図書館は封鎖されている。当初はトナカイを用いて空中からの捜索もしていたらしいのだが、子供にあまりばれないようにする為極力使わない方がいいと判断されたらしく、今では警察官さん方の足のみを用いて捜索しているらしい。新美教官があの時俺をお姫様抱っこの要領でキャッチしてくれたのにはそういう流れがあったのだ。裏事実発覚の瞬間ここにあり。

ああ。

ちなみに「え、捜索って誰を捜索してんの？」と聞かれたら、俺は

何の躊躇いもなく「友永さんだよ友永さん」と返答する。友永さんは目下、事件の容疑者として捜索されているらしい。二日経っても見つからない彼女の行方。

まあ、ね。

俺は彼女が今現在どこに居るのか、大体のめどは立っているんだけどね。

しかしながらそんなことをうっかり言ってしまったらこの何気に饒舌な警察官さんが目くじらをたてて「ん何ぃ！　君、今すぐ署まで！」と叫ぶに違いないと思ったのでやめておいた。そんなことをしたらこの美麗な警察官さんとマンツーマンで取り調べを受けなければならなくなる。……って、意外と良くね？　いやいや待て待て俺。願ってもない展開だけど落ち着け俺。サンタ試験の終了が近付いているこの忙しい時にそんなことをしている暇はねえだろ、と思い直すことに成功。「ありがとうございました」「どういたしまして」という一連の流れを体感した後、俺は今度はネットカフェ略してネカフェに行って『変身』についてあらかた調べまくった。

だが、当然といったら当然なのだろうが、実際に変身をする方法などどのホームページを見ても記載されておらず、そしていつの間にか俺はキーボードを枕にして寝ていて、起きたらその時はサンタ試験六日目となる日の午後三時をまわっていた。

「はい？」事態と時刻がよくわからず、思わずこれは夢なんじゃねえのかと疑ってしまう俺。だけれどもパソコンの右斜め下には確かに午後三時と表示されていて、冷静に冷静に、何とか今の状態が非常にまずいことに気付き始める。「おおおおお！　うおい、マジでか！　こんなことってあるのかよ！」

急いで二十四時間分の代金を払い、ネカフェから離脱する。うおおおお。まさかこんなことになるとは。サンタ試験六日目が、もう、半分も残されていない。

どうしろってんだ。

これまでの出来事と新美教官からのヒントで、サンタ試験を攻略

する為の方法はなんとなく頭に思い浮かんではいるものの――それでもこれは緊急事態だと言わざるを得ない。
しかも、だ。無茶苦茶まずいことに、今日は今日なりの予定があるんだ、俺には。サンタ試験とは全く別の、俺個人としての予定。
二週間に一回の頻度で組み込まれる、俺の予定。「ヤベエよヤベエ。すまん、父さん母さん。ちょっと待っててくれな」
今日は――植物状態である父さん母さんのお見舞いに行かなければならない日なのだ。

なりふり構わず全力前進で走りまくって一時間三十分。時刻は驚くことなかれ、なんとなんと午後四時半。もうそろそろ春になるのでまあまあに暖かく、そんな中走った俺は汗まみれになりながら病院の前の駐車場に着いた。汗くせえかなと病院の中に入るのを一瞬臆した俺だったが、考えてみれば昨日から風呂に入っていないのでそれ以前の問題だなと開き直ってしまった。ん、一昨日からだったっけか。まあいいか、どうでも。
街一番の大きさを誇る病院。大体車でうまっているだだっ広い駐車場を五分かけて歩き、病院の前までたどり着く。息も絶え絶えなのだけれど、何も言わずにスルーしてくれると助かる。
何にしろ、病院の中へと着いた。財布の中に診療の為のカードが入っていたので、ゼエハアと荒い息を整えながら受け付けの女性にカードを渡す。女性はそんな俺の状態に無関心なまま、「春賀彼方様ですね。お呼びするので席でお待ち下さい」と朗らかに言ってくれた。「あ、はい」と答え、病院独特の薬品臭さを耳で感じながら何気にふかふかな椅子に腰掛ける。縦横に並べられた鼠色の椅子達。俺以外にも診察を待っている人は多く、これまた長丁場になりそうだな、と思った。
そうだ。

受け付けの女の人の言葉を無視して。
――先に、父さん母さんに会いに行こうか。
このまま長い間座りっぱなしもつまらねえ。生憎ポケットには財布と電源を消した携帯しか入っていないので暇潰しは何もない。さあどうする。選択肢は二つだ。
父さん母さんに会いに行くか。
それとも、とりあえず待つか。
「一応はサンタ試験中なんだけどなあ、俺」
さてどうしよう。と、思ったのは数秒だけ。答えはすぐに出た。悩んでいても仕方ねえ。とっとと決めてとっとと実行するかね。そうだそうだしよう、そうしよう。
「ではいざ行動に移さん。……古風な口調って何気にしびれるものがあるよな」
「病院の中だから静かなのはいいけど、恥ずかしいこと言ってるのには変わりないわね」
「えいえおあ！」病院の中なのにも関わらず、思わず叫んでしまう俺。そんな俺の隣の席に、奴は居た。「ツチクラじゃねえか！　え、なんで病院に！」
「言ったでしょ？　私はあんたが恥ずかしい言動してる時限定で現れるのよ」
「すごくね！　本当の本当にお前何者なんだよ！」
「そんなに大したやっこさんじゃないわよ、私は」静かにしなさいなと唇の前に人差し指を持っていった後、静かに語る。「いつも通り、あんたに漫画を貸しに来ただけの女なんだから」
ほら、今日はこれね。これを読みなさい。
そう言いながらツチクラは依然座ったままな右横の俺の膝にドスンと大きい紙袋をおろしてきた。いつも通りって言葉に引っ掛かりを覚えつつも、訝しい紙袋の中身を見てみる。
そこには。
少年誌で連載した漫画の中でも最上級のエロさを表現していた問

題作が全巻揃っていた。「……つ、ツチクラさん。あの、これをこの場で読むのはあれなんですけど」
「ふうん。病院で読んでもあんたは興奮しちゃうのね。いいわ、私が許したげる。読んで興奮しちゃえばいいじゃない」
「お前は俺をどんな人間として見ているんだよ」
「化け物」
「人間ですらねえっ」
俺が極力小さくそう言うと、「あら、あんたにも学習能力って備わってたのね。あったんかあったんか、学習能力あったんかあったんか」と何故だか知らないが満足気に頷くツチクラ。いきなり登場しただけでなくいきなりこんな漫画読ませようとする女って。
「何しに来たんだよ、ツチクラ。病気にでもかかってんのかお前」
「な、何言ってんのよ。決まってるでしょ。……あんたと同じよ」
「はあ？」
俺と同じってのはどういうことなのかという指摘はともかくとして、俺はまずそれを言うツチクラが今まで見たこともないくらい消沈したままだったのが気になったのだが、とりあえずの疑問として俺はこう聞く。「俺と同じってどういう意味だよ。この漫画が何か関係してんのか」
「いいえ。その残念な漫画は全くもって関係ないわ」
「残念な漫画ってお前言っていいことと悪いことがあるぞ！」
ツチクラの物言いについ我慢ならなくなってしまったので、膝の上にまだ尚ある紙袋に触れながら俺は叫んでしまう。「確かにこの漫画は残念な展開がテンコ盛りだ。だがな、それは読む目的によって変わるんだよ。そうさ、そうなのさツチクラ。お前みたいな女性にはわからねえかもしれねえが、その残念な展開が男は大好きなんだよ。夢だ、希望だ、妄想だ。この漫画は、それ以上でもそれ以下でもねえ」
「こっ恥ずかしいわ、あんたの残念な話しを聞く私が」
「俺の持論聞いた後の反応がそれかよっ」

そう俺が溢れ出る思いのたけを押さえ付けながら出来る限り小さく言うと、若干顔を濁しつつも「アハハッ」と笑うツチクラ。一応ツチクラはいつも通りらしい。いつも通り、ドギツイ。俺のメンタル面崩壊中。

「はー。やっぱあんたと居ると落ち着くわ、私」

結構物凄い決意した後この場に来たんだけどね。

ツチクラは一つ小さなため息をつき、俺の顔を真正面に覗き込む為、ツチクラ自身の上半身を右に回し、俺の頬を両手で押さえて無理矢理ツチクラの顔を見る状態まで持っていかされる。顔の動きを強制されるという屈辱的な行為を受けた俺なのだけど、そして直ぐさま文句を言おうとしたのだけれど――それをするツチクラの表情があまりにもあまりにもだったので、俺は何も言えなかった。

「おかしいと思ったわよね。毎回毎回二週間毎にあんたがこうやって病院の診察待ちしてる時に、私が毎回毎回嫌いな漫画をあんたに貸しにくるなんて」

でもね、理由があるの。それには理由があるの。今までは言えなかった。時間に余裕があると思ってたから。「でも、もう、半年くらいしか時間がないの。だから、ネタばらししようかなって思って。それで、私……」

「……」

ツチクラが吐露する話を聞きながら、俺は色々と思い返していた。否、思い返すことが出来たという表現の方が正しいだろう。

ツチクラがカタギリ君と夜中に会ったこと。

ツチクラが苦悶の表情をする姿を、俺はこれまでに二回しか見ていないということ。

大学生活が始まると同時に、ツチクラと知り合いになったと同時に、ツチクラが漫画を貸しにくるようになったということ。

――ツチクラが嫌いな漫画を貸してくれる時、俺はいつも病院の待ち時間の渦中にいること。

四年間という長い期間、俺が気付かなかった何か。

ツチクラは、何かを俺に、隠している。
そして、今。
ツチクラは、俺に隠していることが何かをネタばらししてくれると言っている。「いいのか、本当に」
「何がよ」
「そんな、今まで隠してきたことを今になって急に俺にばらすなんてよ。いいぜ、俺はお前がずっと何かを隠していても。全然俺は気にしないからさ。いつも通りドギツイ対応してくれりゃ、俺はそれで全然いい」
「……あんたってずるいわ」
「ん？」
「何もわかってないくせに優しいなんて、ずるいったらありゃしないわよ」
こっち見ないで、とツチクラは俺に言ってきた。言いながらツチクラは顔を下に俯き、俺の頬から離した両の掌を顔に被せる。俺はツチクラに言われた通り、見なかった。足元の床に置いた紙袋の中をさぐり、無表情で漫画を読んでいた。ツチクラが左横で俯く間、漫画を斜め読みする。ポーン、という何とも間の抜けた音の後名前を呼ばれる人達。立ち上がり、診察を受ける人達。周りを見渡すと当初居た人達が少なくなったことに気付く。そろそろ呼ばれるかもなと思い、漫画を紙袋の中に入れる。
その瞬間。
ポーンと音がなり、俺の名前が呼ばれた。
「……」俺は無言のまま、ちらりと左を向いてみた。そこには未だにうなだれるツチクラの姿が。「なあ、ツチクラ。とりあえず呼ばれちまったから、先にこっちの用済ませてからでいいか？」
俺がそう聞くと、ツチクラは何も言わずに首を一つ縦に振るだけだった。

そして現在　十

「はい次の方どうぞー」
三番の診療室の前の椅子に座ってぶらぶらとツチクラのことと父さん母さんのことを考えながら待っていたら、軽い口調のおっさんっぽいが診療室から聞こえてきた。その声の指示通りに椅子から立ち上がり診察室の扉のドアノブを回し、「失礼します」と社会人として最低限の挨拶をして診療室の中に入る。
「久しぶりですね、春賀さん。ささっ、椅子にお座りください」
白髪で頭がおおわれ、よれよれの白衣を着た初老のお医者さんの言う通りに座る俺。かれこれ二週間ぶりになるのだが、そんでもって約十一年間の長い付き合いなのだが、最初に見た時と全く変わってない気がしないでもないこのお医者さん。俺がちまっこい頃から一貫して俺を『さん』付けで呼んだり、丁寧語にも関わらず軽い口調、性別男。まあこれらは別段何の問題もないのだが、十年以上前に全ての髪が白く染まっていたのに相も変わらず頭を全ておおう白髪というのには納得出来ねえんだ、俺。どんな構造してるんだよ頭。というかそもそも何歳だ、この人。
「うん？　どうしました、春賀さん。何か腑に落ちないことがありそうな顔してますけど」
「……いえ、なんでもないです。先生の白髪はかつらなのかなとかそんなことは考えてませんので」
「もうはっきりばっさり言っちゃってますね、それだと」
ちなみに僕の髪は全てモノホンなので心配しないで下さい、と続けるお医者さん。ううむモノホンって言葉は死語じゃないんだろうかとかいやいや今でも普通に使うさねとか頭の中でどうでもいいことがぐるぐる回り始めたのだが、「はい、落ち着いてください。あまり脳を酷使しないように」とお医者さんが俺の頭を撫でてくれたので何とかおさまった。他人に頭を撫でられるという行為はよっぽ

ど好意を向けている他人からでないとストレスがたまる厄介な代物なのだが、昔っからこうして撫でられていた習慣が故に、この笑顔のお医者さんからの優しい撫で方は社会人に一応なった今でも安心感を覚えちまう。これがいいことなのか悪いことなのか、そもそもこのお医者さんの性別が女でもっと若かったら何も言うことはないのにと思った回数は一桁では済まねえのが俺の残念な所。「ありがとうございます、先生。落ち着きました」

「本当ですか？　それなら僕は安心出来ます。まあ何はともあれ、今日はちゃんと来れましたね、春賀さん。良い傾向です」お医者さんは一通り書き終えたのか、ボールペンを机に置き、体を椅子ごと右に回転させて俺の方を向く。「二週間に一回は病院に来て下さいというのがまず前提条件です。前々回は春賀さん、家で寝てましたからね。その翌日に来ましたからなんとかなりはしましたが」

「ははは。嫌だなあ先生、そんなことある訳ないでしょう」

「何を言ってるんですか。――午後六時に意識がぷつりと切れて、気付いたら昼の十二時でラーメンを食べている最中だったと供述したのは貴方ですよ、春賀さん」

「……え？」

午後六時に意識が途切れ、起きたらラーメンを食べている状況？　いやいや、そんなことがある訳ないだろう。そんなゴム人間の一家の特技みたいなことが、俺に出来る訳がない。

――卒業式の後にツチクラと喋り、坂本さん最高と叫んだ後に意識が途切れ――気付いたら新美教官によるサンタ試験の説明中だったなんてこと――。

出来る、訳が。「どうやら今回は自覚があるようですね。それか、似たようなことが最近あったとかでしょうか。出来たら前者の方がいいんですけど」

「……最近ありました。そういうこと」

「ふうむ。そうですか、後者ですか」

それじゃあ駄目ですね。ふうむ、何が原因かはっきりわかってい

るが故に、この現状はいささか歯痒いものがあります。「春賀さん。貴方、十年前から全く病状が回復していませんよ。ゆっくりでいいとは思いますが、それで十年前に少し回復したのでいけると思いましたが、そこから一歩も前に進まないというのは、ちょっと」

「……」

病状ってなんのことですか。

訳がわからずに一方的に言われたのでそう言おうとした。そう言おうとしたのだが、「ああ、いいですよ。春賀さんがこの報告の後に何を言うかは十一年間で把握しましたから。僕が何を言っているかわからないんですよね。はい、わかりました、教えましょう」と口早にお医者さんが言ったので二の句がつげなかった。

「貴方は心の病を患っています。原因は、十一年前の事件。貴方が見て、体感してしまった過去が原因です。それにより、貴方には二つの病状が発生してしまいました」

そう言うと人差し指と中指だけを立てるお医者さん。笑顔ながらもその目は真剣で、俺に有無を言わさず紛れも無い俺の病状とやらのことを告げようとしてくる。

「一つ。自分で自由に寝られなくなり、それに伴って起こる突発的な仮眠、及び仮眠状態での春賀さん自身も予期しない勝手な行動の発生」

言われながら、俺はここ一周間のことを思い出していた。というか、あれだ、まさに昨日と今日がそうだ。

インターネットをしていたにも関わらず、全く寝る気もなかったのにも関わらず俺を襲った突発的な睡眠。しかも、自分でも恐ろしいことに意識がある。睡眠――いや、違う。仮眠状態の中にいた俺が何をしていたのか、ぼんやりながらも覚えている。特に卒業式の後だ。俺は、ほとんど意識がないまま、食べて風呂に入って寝て、服を着替えてサンタ試験の説明を受けようと家を出発している。

なんだこれは。

「そして、もう一つ。これもまた厄介なことなんですが、恐らくこ

れは春賀さんがしっかり寝れていないことから派生している症状だと思います。脳がしっかり休められてないから、派生しているんでしょう。――貴方のその、重度の記憶障害は」

「な……っ！」

思い返すまでもなかった。俺がツチクラに残念なやつと言われる理由。俺がカタギリ君にどうしようもないやつと言われる理由。俺が新美教官に頭ピーマンで耳がちくわと言われる理由。

上手く記憶出来ない。

数分前に言われたことが頭の中から消える。

記憶するのに障害がある。

記憶、障害。

「記憶障害……？　そんでもって、えっと」自分でも恐ろしくなった。そんな馬鹿な。数分どころか数秒前に言われたことだぞ、こんなこと。なのに、なんで、「何、でしたっけ」――何で思い出せないんだ？

「……完全な睡眠が不可能な脳、強制的に仮眠の状態に持っていってしまう脳ですよ、春賀さん」

根気よくいきましょう。毎回毎回言ってますが、もうそれしか対処のしようがありません。「手っ取り早いのがトラウマの消去なのですが、春賀さんの場合、トラウマの対象に貴方の両親も含みますからね。この方法は絶対に使えません」

パニックになりそうだった。我ながら自由奔放に生きて、ちょっとは頭の悪い頭だが喋れる相手もいるのだから、それでいいと思っていた。

なのに、なんだこれは。

蓋を開けてみりゃ、ただ単純に俺は過去に捕われてる男ってことになるじゃねえか。しかもそれが、十一年間も。お医者さんは「しっかし、十年前に春賀さんの身に一体何があったんですか。それまで三日に一回はあった春賀さんの仮眠状態が、完全にランダムになりましたからね。何か明るい未来でも見たんですかね。わかりませ

んし、言いたくないのなら言わない方がいいですけど」とかなんとかぶつぶつ呟いていたが、今の俺の頭の中には全く届かなかった。

過去。

十一年前の過去。

それが、まさかこんなことになっていようとは。「アッハッハ。あー、そうですか。俺は病気なんですか。あああ……そうなんですか……」

「根気よく、いくしかありませんね。それしかないです」

「はあ。そうですか。そうなんですか……」

ショックが拭えないまま、お医者さんの「とりあえず定期診察しましょうか。焦らないで、ゆっくりいきましょう」という言葉を皮切りにいくつかの質問を受けた。二週間前から順に朝ごはんが何だったか言えますかとか、ここ二週間で突発的な仮眠状態に陥った記憶はありますか等々。

「じゃあ、今日はこの辺で大丈夫です」二十分くらいが経った頃だろうか。お医者さんは笑顔で俺を見て、温和な雰囲気のまま俺と接してくれる。「ありがとうございました。お大事にしてくださいね」

「……はい。ありがとうございました」

お医者さんの「根気よく、ですよ。春賀さん」という言葉を背に受けながら、俺は会釈をして診療室を出た。

「はあ」

正直、衝撃的、だった。まさか俺なんかにこんなぐちゃぐちゃした症状があるんだとは。さて、これから何をしよう。いや、それは決まっている。ツチクラの元へ行き、ツチクラのネタばらしを真正面から受け止める。その後、父さんと母さんに会いに行く。それでおしまいだ。それ以上はもう俺のキャパシティーを越える。サンタになる為の試験とか、カタギリ君とか、友永さんとか、新美教官とか、もう、考えたくない。

何も考えずにぶらぶらと歩いていたかった。それでもツチクラに会う為、ゆっくりゆっくり歩みを進める。アッハッハ。思いきり笑

い飛ばしてやりたかった。だけど、何故だか、目からは液体が。
「もう」とぼとぼと、俺は頭を抱えながら歩く。「めんどくせえや」

「何がめんどくせえんだ、ああん？」

何も考えたくなかった。
サンタになる為の試験とかカタギリ君とか友永さんとか。――新美教官とか。「……なんで新美教官がここに？　ていうか新美教官、その格好はなんなんですか」
「へえ。甲斐谷京極との面談をブッチしたやつがしゃあしゃあと抜かしやがるなあ、おい」
そう叫ぶ新美教官は。
何故だか、ナース服を着ていた。

そして現在　十一

新美教官は俺が今居る病院のものとは違うナース服を着ていた。何が違うのかというと、服全体の色とスカートであーる。俺が見知ったナース服というものは全体的に白いのだが、新美教官のナース服は全体的にピンク色々なのだ。そして、何故だか、ミニスカート略してミニスカを履いている。しかもそれによって必然的に見えちまう細長い足には黒いニーソックスをはいているので、もう、あれだ、悪い気はしないんだけども、これはナースという職業に就いている人にしては些か誘い過ぎなのではなかろうか。「てか、新美教官が何でナース服着てるんですか？　まさか、サンタ試験教官と看護士を兼業したりしてるんですか」

「んなハイスペックを持ち合わせる程私は出来た人間じゃねえよというか私はとりあえずお前をボコボコにしてやりたいんだけどな何でお前さんは私が伝言した甲斐谷京極との約束を無視するんだアアン？」

長々しい台詞をぶつぶつ呟いた後、一回大袈裟なため息をついて新美教官は言う。「私が何で病院なんて場所にこんな格好して居るのかっつー質問に答えるならよ、まず、私が何でお前の前に居るのかについて話さねえといけねえんだ」

「え？　もしかして、ストーカーしてたとか」

「あながち間違いではねえんだよなあ、これが」

自分的には冗談のつもりだったのだがどうやら図星をついてしまったらしいとかなんとかかんとか、以前、カタギリ君と友永さんと話していた時にも同じ様なことがあった気もするが。

少なくとも、この俺に。

何度も何度も他人の図星をつくなどというクオリティーを期待してもらっても困るという訳でございまして。

俺の予想通りというおこがましい表現を何の気無しに使いながら、

俺は新美教官が「まあ、よ」と注釈を加える話の前触れを聞いた。それを言う新美教官の顔は気まずい様子で、少しだけ心苦しそうだった。「前に土倉佐中受験生や片桐真哉受験生のあとをストーカーしたって話、しただろ。それと同じことを今回お前にしたって訳だ、春賀彼方受験生」

「え？」

ふいに冷や汗が額から垂れる。「てことは新美教官、俺がさっきまで先生とどんな話をしてたのかも聞いたんですか」

「そう、なるな」ポリポリとメガホンを持っていない方の左手の人差し指で頭を掻きながら続ける新美教官。「一応約束を取り付けた側として建前上ぶちギレたんだがよ、まあまあギリギリ納得した。要はお前、私が伝えた甲斐谷京極との面談の話を忘れてたんだろ？

それじゃあ怒るに怒れねえわ。元々甲斐谷京極なんてどうでもいいし」

「それにしちゃあ無茶苦茶怒ってた様に見えましたけど」

「いやあ、もしかしたら春賀彼方受験生がしらばっくれてるかもしんねーだろ。まあ流石にねえとは思うが、それに備えて先に怒っておこう作戦だ。あ、今更だが言っておく。理不尽を許しちゃいけねえと世間一般ではよく言うが、私との会話に関してだけは理不尽を許せ」

「……」

何気に酷いことをしゃあしゃあと言ってのける新美教官だったんだけど、実際のところ俺は新美教官から教えてもらった甲斐谷京極との面談を無視したのは紛れも無かったので何もいうことが出来なかった。俺のことだ。なんか言った拍子に思わず口を滑らしちまう可能性も否定出来ねえ。そしたらもう予測するまでもなけ新美教官のメガホンが炸裂することは間違いないだろう。病院の廊下に鳴り響く新美教官の怒声、それを必死で堪えながら「やめてください新美教官ここは病院です静かにしましょう！」と叫ぶ俺。誰も幸せにならねえよなあこの展開は。うーむ、やはり言うのはやめよう。そ

の方が俺と新美教官と病院の為だ。
「ま、気張れよ春賀彼方受験生。大丈夫。しっかりばっちり前だけ見てりゃ、その内楽しいことが見つかるさ」
過去に縛られる奴なんて世界中に山ほど居る。春賀彼方受験生だって、土倉佐中受験生だって、片桐真哉受験生だって。この私でさえそうだ「でも、だ。私も含めて、お前らは内面がボロボロでも表面上はピンピンしてやがる。だったら、多分、大丈夫だ」
そう言いながら俺の肩を左の掌で軽く叩く新美教官。そう言う新美教官の顔はとても穏やかで、今までに見たことがないくらい輝いていた様に見えた。
これは新美教官が過去を少しでも払拭したからだろうか。
それか、新美教官がナース服を着ているからだろうか。――いや、無いな。これは多分ない。うん。
俺は。
「んじゃまあ今度は私から話させてもらおう。今度こそ忘れんなよ。なんせ春賀彼方受験生が大好きな土倉佐中受験生からの伝言なんだからな」と、言う新美教官を。
「すいませんがちょっと待ってください」と言って制止し、「な、何だよ」とうろたえる新美教官の目を真っすぐに見て、発言する。
「ありがとうございました、新美教官。おかげでちょっと楽になった気がします」
過去にとらわれているせいで病気になっていると宣告された先刻から、俺は少しだけナーバスになっていた。否、違うのかもしれない。そうだ。白状すると、俺はかなりナーバスになっていた。
十一年前。
山口大津という犯罪者に植物人間にされた父さんと母さん。その二人に対して俺が選んでしまった選択。
そして。
――俺が山口大津を殺したことにもよる、精神的苦痛。ストレス。トラウマ。

それら全てがお医者さんの宣告により、重くのしかかってきた。別にたいしたことじゃないよと誰かが言ってくれればいいのだが、たいしたことだから俺は苦しんでいた。何しろそのせいで他の人達に迷惑という迷惑をかけていたのだから。だから俺は苦しんで、苦しんで、苦しんで。もがきあがきわめこうともせずに、ただただぼうっとその場をやり過ごそうとしていた。

「ありがとうございます、新美教官」

だが、新美教官は。「ナース服に着替えて変装するくらいなんですもんね。本当は俺の前に現れる気なんかなかったんでしょ。それこそ、ツチクラの時やカタギリ君の時の様に」

それでも新美教官は俺の前に現れてくれた。甲斐谷京極との約束をはごにしたとかいう、今日の昼にでも言えばよかった――取って付けた様な大義名分を掲げて。

俺の言葉を聞きながら、新美教官はなんだかもじもじとしていた。それでも俺は、新美教官に言いたかった。今の俺の気持ちとやらを。「頑張ります、サンタ試験。そんでもって合格してやります。楽しみにしててください、新美教官」

「ふははひっ」俺が思い出したら即刻沸騰しそうになるほどこっ恥ずかしい台詞の連鎖を言った後、新美教官は人間が用いる言葉とはまた違うものみたいな声を出して、こう言った。「あはは、あはは！　あー、もうよ、もうよ、なんだかもうよ、お前のそういうところがもうなんだかなって感じだなー、おい！」

先走ってんじゃねーよ！

と。

病院に居るのをお構いなしに腹を抱えて高らかに笑いながら新美教官は喋る。「ぶっちゃけた話すんぞ！　私がナースに変装してるのは、ただの趣味だ！」

「趣味なんですか！」意外と新美教官がコスプレイヤーだった事実に驚愕しつつも、俺は軽く考えた。「え、じゃあ、何で新美教官は俺に話しかけてきたんですか！　俺を慰めてくれに来たとかそんな

んじゃないんですか！」
「そんな訳ねーだろ！　てかそもそも私は土倉佐中受験生や片桐真哉受験生をストーカーした時も、ちゃんと最後には私がストーカーやってましたってネタバレしてるからな！　お前だけが特別じゃねーんだよ！」
まあ、いいよ！　お前はそれでいいんだよ！
俺が素像を絶する恥ずかしさのあまり病院の廊下をうおおおおと叫びながら走りまくりたくなる強迫観念を無理矢理抑えようとしていると、新美教官はふっと真面目な顔になった。周りには相も変わらず沢山の人が。そういやここ病院の廊下じゃねーかやべえよ騒ぎすぎたと思った直後に、新美教官は言う。「春賀彼方受験生！　お前はそれでいいんだよ！　昔のトラウマとか、病気とか、甲斐谷京極との因縁とか、気にすんな！　全部ひっくるめてお前だ、春賀彼方受験生！」
そう叫ぶと少しだけ俺と距離をとり、ポケットから何かを取り出して投げてくる新美教官。危うく取りこぼしそうになりながらもなんとかキャッチした俺は、その黒い物体を見た。
それは、手の平サイズのボイスレコーダーだった。
「甲斐谷京極からの送りもんだ。本当だったら昨日お前が手に入れてた代物だよ。それを今日の夜くらいに聞いて、甲斐谷京極からの指示に従ってくれ。そうすりゃ道は開ける筈だ」
「な、え、どういうことですか新美教官！　俺に何をしろってんですか！」
「またまたぁ、しらばっくれるねえ春賀彼方受験生。私はわかってるよ。お前、もう大体わかってんだろ？　誰が嘘をついていて、誰が本当のことを言っていないのか」
「……何のことかさっぱりわかりません」言いながら俺は額から垂れる冷や汗が増えるのを感じた。
さっきまでの温和な雰囲気とは一変した。
何だ、この人。

俺の考えをどれだけ見通してるんだ。「とにかく、俺は、目の前のサンタ試験のことだけで精一杯なんです。だから」
「だから、友永由里が何者なのかとか、片桐真哉受験生が何者なのかとか――土倉佐中受験生が何者なのかとかを考えたり推測したりする暇もないってか？」
ぐうの音も出なかった。
この人、多分だけど、俺の考えを大体予測している。
「私はな、ヒントをあげてるんだ。そのボイスレコーダーの内容と、あとは、私と友永由里の本当の関係性さえわかりゃあ、おおまかな真相にはたどり着く」
なんせお前は、一番際どい部分の過去を見たんだから。「私が単なる優しいコスプレ好きのメガホン持ち教官だとは思わない方がいいぞ。何故なら私は、一度は私を殺しに来た友永由里と組んで、友永由里に十年前の『真実』を教えてやった人間なんだからよ」
ニヒヒッ、と。
口の端を歪めて、いかにも悪キャラな雰囲気を醸し出して新美教官はそう言う。俺は何も言わずにただ立ち尽くして、新美教官が「あ、そうそう」と言い出すまで新美教官のことをじっと見つめていた。「春賀彼方受験生へ、今さっき私が会った土倉佐中受験生から伝言だ。「漫画は持って帰ります。ごめん、やっぱりあんたに私の弱った姿なんて何があっても絶対にこれ以上見られたくない。四階の五号室に行ってください。じゃあ、また明日」だそうだ。伝えたぞ。記憶したか？」
「……はあ、まあ」
新美教官の姿に圧倒されながらもなんとか声を出して返答すると、「そうかそうか。じゃあな春賀彼方受験生。さっきのお前の選手宣誓、忘れねーからな」と言ってすたこらさっさと新美教官は去っていった。本当に去っていきやがった。こんだけ俺の心情に波風たてといて。嵐か、あの人は。
えっと。

とりあえず整理しよう。運良く新美教官の言葉は大体記憶しているので、新美教官が最後に言ったツチクラからの伝言を頭の中で再生してみる。ううむ。つまりはツチクラはもう帰っていて、俺に一人で四階の五号室に迎えやと遠回しに命令しているのか、あいつは。謝罪しながら人の行く先を指定させるとか。やはりというかなんというか、半端ねえな、ツチクラは。

まあ、なにはともあれ。

――これで、新美教官と会話をしていたらすっかりツチクラのことを忘れていたことをごまかせる。

「そうだなあ、父さん母さんは後回しにするか」

静かになった病院の廊下を、患者さんや看護士さんがさっきまで無茶苦茶うるさかった俺を冷たい目で責めてくる病院の廊下を歩きながら、じっくりゆっくり考える。俺の父さんと母さんの部屋は五階にあるからな。先にツチクラの指令を果たすとしよう。

エレベーターを使わずに、階段でのらりくらりとあがって、そして四階までたどり着く。息も絶え絶えだった。そりゃそうか。病気宣告されるし新美教官から笑われるし新美教官から見抜かれるし階段をあがるし。疲れることが重なり過ぎてる。もっと気苦労しない日々を送りたいもんですねえと、夏場の田舎に住む蛙が思いそうなことを思ってみる俺。

そんなこんなで。

四階の病院の廊下を歩き。

五号室の前に、着いた。

「な……」瞬間、俺の口から驚嘆の声が出る。「嘘、だろ」

五号室の入口には。

『土倉清次、土倉小百合』と書かれたプレートが設置されていて。

――五号室の中には、俺が見知った状態下にいる二人の男女の姿があった。

横になって、鼻や口にはチューブが差し込まれ、点滴が刺さっている。

土倉清次というらしい五十代くらいの男性。
土倉小百合というらしい四十代くらいの女性。
二人が二人共、隣り合わせでベットの上に居る。「嘘、だろ」
――植物状態。
ネタばらし。
俺にずっと隠していたこと、俺が気付かなかった何か。
ツチクラは。あの、いつも強気でいつも俺にドギツイ言葉を放ち、俺に漫画を貸してくれたりなんやかんやで俺とよく喋って、大学の卒業式の後で唯一話しかけてくれた、ツチクラは。
十一年前。
俺と同じ様に、山口大津によって両親を植物状態にされた被害者の一人だった。

そして現在　十二

腹が空いたら飯が食いたくなるのと同じ様に。喉が渇いたら水が飲みたくなるのと同じ様に。なにもかもが嫌になったら現実逃避をするかもしくは自分だけのオリジナルストレス発散方法実行を試みるのと同じ様に。

どうやら俺は、またもや寝てしまっているらしい。何をか言うわんや、この睡眠は所謂普通の睡眠というやつとは違う。俺の場合、あのお医者さんが言ってくれたように、半分寝て半分起きているみたいなよくわからない状況になっているらしいのだ。

「キャハハハ！　あー、君さ、何でここにいるんだ？」

――そして。

俺はどうやら、また夢を見ているらしい。十一年前。山口大津が巻き起こした連続植物人間化事件。その詳細を回想するという俺にとって拷問に近い行動を、俺は、無意識でやっちまっている。しかしながら先日か先々日かよくは覚えてないがそこら辺の時期に見たあの夢とは少しだけ違う夢のようなのだ。

「予測したんだよ。あんたが来そうな所を予測した。ただ、それだけだ」

そう。

前の時とは違い。

風が吹く夜の屋上という風景が俺の深層記憶から引っ張り出してくることによって完全に再現されていて、かつ、前の時――俺の両親が植物状態にされた時よりも少しだけ経った時間軸の回想をしている。

「へええ。君、もしかしてもしかして子供のくせに俺様よりも賢いのかなキャハハハハ」

山口大津のハンマーによって意識を失った両親を、救急車を呼んで病院まで連れていき、そしてその後子供ながらに涙を流しながら

必死こいて調べに調べて、山口大津を待ち伏せすることに成功した時の、回想。山口大津が屋上の端にたどり着いた時、隠れていた俺は姿を表して山口大津に声をかけた。その時の回想を、夢の中で俺はしている。

「賢いとかそういうんじゃねーよ。ぼ……おれは、あんたの目的と噛み合う場所と時間をパソコンで調べて、一番あんたが来そうな所で待ち伏せてただけだ」

この時からだ。そうだ、この時からだった。俺は少しヤンキーぶった口調を使い、自分のことを指し示す時に『ぼく』という言葉を使うことを止め、『おれ』という言葉を使おうと心に誓ったのは。

両親に向けて、自分は少しだけでも間違いなく成長しているのだと示す為に。「だから、賢いとかそういうんじゃない。運が良かっただけだ」

「……うううん？　なんだか君、さっきまでと雰囲気違くねーかな？　あー、うんうん、まあそんなの俺様には関係ねーんだけどさー。ただ、あれだ、俺様は俺様の目的を達成したいだけなんだ」

だから、邪魔はしないでくれるかな、君ぃ。「俺様は、今日、十組の夫婦を植物状態にしたのさ。それを無駄にしない為にそうそれだけの為にと言ったらまあ間違いなく嘘になるけれど、俺様は、俺様は、ここここからととと飛び降りて、飛び降りて！　植物状態になりたいだけなんだよねキャハハハハ！」

山口大津は高らかに笑っていた。何人もの血がこべりついたハンマーを握った右手も含めた両手を腕ごとグルングルンと回し、「キャハハハ！　キャハハハ！」と笑い続ける。首をぶんぶんと振り回し、その無意味な意志を振り回し、多くの人の人生を、俺の父さん母さんも含めた多くの人の人生を振り回して。今この時が幸せなんだと言わんばかりに笑い続け、俺に言う。「だからさ、だからさ！

何で君がここに居るのかはわからないけれど、邪魔をするなら俺様は君を排除するしかないんだけど、どうする！　それか、あれだ！　君も俺様と同じ様に植物状態になってみるかいキャハハハ！」

「ああ、いいぜ」
その言葉を待っていた。俺は、山口大津が俺を植物状態にしてくれるという言葉を待っていた。
――両親を嫌いになった。
でも、俺は、その嫌いな両親が俺に微笑みかけてくれない世界で、元気に生き続けられるとは全く思えなかったんだ。「調べたんだ。調べたんだよ。あんたが自分を植物状態にする為に飛び降りる屋上の場所を。ハンマーなんかで自分自身を植物状態にするなんて不可能だもんなあ。だからあんたはあんた自身が植物状態になる為の方法が必要だった。それで、俺も考えた。何が一番適しているのか。失敗する訳にはいかない、植物状態化。事前に風の向きやら強さとかも調べて、ここからなら落ちてもまず間違いなく植物状態にならねえっていう場所。……そこがまさか、ここだとは思わなかったがな」
ここ。
十一年前に俺と父さん母さんが住んでいた場所で、今現在も俺が住み着いている場所。
その、屋上。
そこが一番、植物状態になりやすい場所だった。「調べた、探した、走り尽くしたさ。そんでもっておれは、あんたを見つけた」
さあ。おれを、植物状態にしてくれ。父さん母さんと同じ、植物状態にしてくれ。「お願いだ。お願い、します」
俺はこの時、頭を下げていた。この行動に信じられないと反感をかう人も居るかもしれない。それは仕方ねえことだと思う。なんせ俺は、他でもない俺の両親の仇に頭を下げているのだから。
でも。
俺は、そうするしかなかった。そうするより他に、父さん母さんと同じ状態になれるとは思えなかった。植物状態。そんな状態に俺自身もなる為には、もう、そうするしかなかったんだ。
「キャハハハ。あー、うん。笑えねえや。笑えねえよ」対して。山

口大津は、突如真剣な顔になった。その顔は今までのような狂人のそれではなく、普通の大人のそれのような。「さっきのは冗談だ。言っただろ、言ったよな。俺様はさ、子供を手にかけようとはからっきし思ってねーのよ。それこそあれだ、そんなことしたら俺は自殺するぜ。自責の念にかられて、植物状態になるっつー夢のような夢を放り投げて」

「な、何を、何を勝手なこと言ってんだ、お前！」

「あー、わかってるわかってるよお。だから頼むから叫ぶな叫ぶな。そんだけは了承して、俺様の話を聞いてくれるかなー？」

口調こそは軽いが、それを言う山口大津の顔は相変わらず真面目そのものだった。その顔に、その言動に違和感を覚えたせいなのか。俺はいつの間にか何も考えずに首を縦に振っていて、それを見た山口大津が「いよいしょ！　ノリがいいねノリノリだねじゃあ話すとしようかね俺様のことを！」と叫びながら屋上の端から離れ、少しだけ俺に近付いて話し始めた。

「俺様にはさ、娘がいる！　そうだね、君より二歳くらい上の娘がいるのさ！　そして当然、妻もいる！　俺様達は誰もが羨む所謂幸せな家庭とやらを気付いていた！　だけど、だけどだ！　俺様は、俺様はあああああ、昔から！　そう、昔から！　植物状態になりたかったし、したかった！」

だけど！

それと、同じくらいに！　「俺様は、子供ってのが大好きなのさ！　娘が生まれた時、俺はこの存在とこの存在を苦労して産んでくれた存在だけは何があっても守り抜こうと誓ったんだよねキャハハハ！　……だから。だから俺様は、サンタになった」

そこまで言うと、そこまで叫ぶと、山口大津は俺に背を向けて歩き始めた。その先にあるのは、屋上の端、地面、植物状態。ゆっくりとゆっくりと。山口大津は、自身の夢へと向かうその一歩一歩を、噛み締めて歩いている。

「そこで話しを終わらせんなよ！」当然、俺は訳がわからなかった。

突然出たサンタという不可解な単語。当時この街の真実を知らなかった俺は、訳がわからなくなったんだ。「サンタって何の話だ！　関係ねえだろ！　なあ、頼むよ、お願いだ！　おれを一人ぼっちにしないでくれ！　父さんと母さんと同じにしてくれよ！」

「キャハハハ。悪いけどねえ、君ぃ。それはいささか了解しがたい要求なんだねえ、残念なことに」

「何で、何でだよ！」

「理由は二つ！　一つ、俺様は子供が大好きだ。娘と年齢が近い君を植物状態にする為に、暴力を加えるなんて出来ない相談なんだよねえ。そして、もう一つ」これが一番重要なんだよねと山口大津は続けた。俺の方を見ずに、俺の方なんか見向きもしないで。「俺様はサンタなんだ。俺様だけじゃない。この街に住む大人はぜいいん、サンタ。サンタさん、サタンさーん。そしてそして――サンタは子供に微笑まない。だけどこの街にいる子供達には……。キャハハハ、キャハハハ」

「な、なに、何なんだよ、意味わかんねえよ！　もう嫌だ！　嫌ダ嫌ダ嫌ダあああ！　父さん、母さんあああん！」

俺は、そうして。

風が強く吹く屋上を、全力で駆け抜け始めた。山口大津による植物状態化。それだけが希望だった。「がああ！」

なのに山口大津は、俺の希望通りに動いてくれなかった。

だったら、俺がとるべき道は一つしかない。一つしかないと、この時は思った。山口大津が俺の予測が当たらずに屋上に現れなかった時に起こそうとしていた行動。

屋上から、飛び降りる。

飛び降りて、植物状態になる――！

「なぁにやってんだ君はあああ！」

なのに。

邪魔をされた。俺が助走して加速をつけて屋上からジャンプした子供の体を、大人の体格をもってして俺の助走の分を無視して普通

に跳んだ、山口大津によって。山口大津は、「笑えねえ！　君が落ちたりでもしたら、そんなにこんなに笑えねえことはないんだよねキャハハハ！」と早口で叫んで俺の体を両手で抱き寄せ、「キャハハハ！」という掛け声と共に俺をぶん投げた。そうされたことによって屋上へと強制的に戻された俺。信じられなかった。なんとか手を地面について顔の激突は避けられたけど、飛び降りて植物状態になれなかったので、俺は屋上に居て、その代わりに山口大津が落ちる。

「え？」

何が起こったのか、理解出来なかった。体を包む浮遊感。この場に自分が居ないかのような錯覚を覚える俺。「え？」

笑い声が聞こえる。「キャハハハ！」という笑い声が、どんどん下に向かっていくのが聞こえる。だけど、途中でおかしな音が聞こえた。何かが何かに激突する音。大きな車のような物体が急停車しようとする音。それによって掻き消される笑い声――、いや、違う。掻き消されてなんかない。もう、笑い声が聞こえない。聞こえるのは知らない男の人の「わざとじゃない！　いきなり上から落ちてきたんだ！」と誰にでもなく弁解する声。

俺は。

恐る恐る、下を見てみた。屋上の端から体を乗り出し、下を見てみた。「え？」

瞬間、後悔した。

俺の両親を植物状態にし、他九組の夫婦を植物状態にし、街に住む大人は皆サンタだということをばらし、俺を助けた山口大津という犯罪者は――。

「死んでいた。見れなかった。俺みたいなガキが見れるような状態じゃなかった。俺は、最悪だ。父さん母さんの仇に懇願して、父さ

ん母さんの仇に命を助けられた……そして、その仇は……！」
「いきなり何言ってんのかな、ハルカ君は。いい加減そういうの繰り返してるとヤバイ人に見られちゃうからやめた方がいいよ」
「……なんだ、友永さんか」
いきなり声が聞こえたと思ったら、友永さんだった。俺の方を向きながら俺の前に立ち、「なんだとは何さ。失敬だよ、ハルカ君」と俺に対して遺憾の意をさらけ出している。
うん？
というか、今、どういう状態だ？　さっきまで俺はツチクラの両親の病室に居なかったか？　そうだよそうだ。ツチクラの両親も俺の両親と同じで、植物状態だった。その重大な事実を知って、そんで、その後の記憶がない。いやいや違うな。あるにはあるんだが、ぼんやりとしていて何もかも思い出せない。故に、そこからプッツリ記憶が途切れている状態にある。
ああ。
どうやら俺は、また、寝てしまったらしい。病気とやらだ。お医者さんが言っていた、あの病気。つまりはそのせいで、意識のない間に今の様な状況に陥ってしまったということなのか。
今の、状況。
風が少し冷たい夜の街。前方には友永さん、右手に以前見た瞬間移動装置っぽいものを握る友永さん。風によって少しなびくポニーテールを左手で抑える仕種がやけになまめかしいことこの上ない。そんな友永さんの顔には、今までに見たことがない程、真剣な眼差しを携えていた。「あと少しだよ、ハルカ君。あと少しで十二時キッカリになるから。そしたら、さっき言った通り、面白いもの見せてあげる」
「……あー」怒るだろうか。俺が、全くもって今現在の状況がわからないと言ったら、友永さんは怒るだろうか。それこそ図書館の時と同じ様に、有無を言わさず瞬間移動されるのかもしれない。だが、聞かない訳にはいかなかった。何故なら目の前に居る友永さんは世

間一般でいう犯罪者という人種で、これ以上何かをしようというのなら止める必要があるし、サンタ試験のこともある。そして、何よりも、今居るここが過去の因縁の場所だったから。「友永さん。友永さんは、何をしようとしてるんだ」

「ふーん。結構陳腐な質問するんだね、ハルカ君。そんなこと聞かれなくったって、今から見せてあげるって。私がハルカ君にどんな思いを抱いてるのか。その思いを糧に、私が裏で何をしていたのかをさ」

友永さんに言われてぎりぎり思い出す俺。新美教官に貰った数々のヒント。新美教官から預かった、甲斐谷京極のボイスレコーダーを。そうだ。ぼんやりとだが、覚えがある。そういえば俺はこのボイスレコーダーの内容を余す所なく聞いたんだ。

だから俺は友永さんに接触しようとした。だけれども、午後六時かそこら辺で彼女からメールが来て、十二時前にこの場所に来るよう言われたような気がする。多分、間違っては、いないと思う。俺にしては珍しく自信があった。何故かはわからないけれど。

「なあ、友永さん」なのでまず俺は聞くことにした。いくら考えても想像の域を脱しないこの事柄についての真実を。「新美教官とは、どういう関係なんだ？」

「え？　新美教官って、もしかしてレイコちゃんのこと？」

「レイコって名前が新美教官の名前なら、多分そうだ」

「アハハハハ」新美教官の実に女性っぽい名前を知った後、俺は友永さんが笑うのを見た。いつかの時に見た、黒い黒い笑い。「うん。私とレイコちゃん……新美麗子は友達だよ。私ね、全部教えてもらったの。レイコちゃんから、本当のこと。びっくりしちゃったよ、私。だからね、本当のことを知った私はね……ハルカ君に復讐しようと思います！」

ぱんぱかぱーん！　十二時になっちゃいました！

大きな声でそう叫び、俺に見せびらかしながら堂々と瞬間移動装置を勢い良く押した友永さん。何の音もしなかった。なのに、友永

さんはしたり顔になり、俺の目線の先には信じられない光景が広がることになった。
屋上を越えた前方の空中に。
浮遊するトナカイと、それに乗った一人の男の姿を視認した。「……まさかここで君が再登場するとはなあ。可能性の一つとしては考慮してたけども、まさか過ぎてリアクションのしようがねえよ」

「全くだな、春賀彼方」

トナカイの背に乗る男――カタギリ君は、珍しく少し困惑したような表情のまま、話す。「友永由里からこの場に瞬間移動させられるとは聞いていたが、まさか君が僕の目の前に居るとは」
「ああ。俺も驚いた」
気付けば友永さんの姿が見えなかった。俺がトナカイに乗るカタギリ君に気を取られた隙に瞬間移動したのだろうか。まあ、いいか。友永さんのことは後回しにしよう。
とにもかくにも。
今は、目の前に居るカタギリ君の方が先だ。サンタしか乗れない筈のトナカイの背に楽々と乗るカタギリを何とかする方が、先決だ。
「カタギリ君。二つ、質問していいか」
「ああ。まあいいだろう。君のことだ、僕が過去に間違いなく言った事柄であろうとも、忘れている可能性が否めないからな」
「その憎まれ口も久しぶりだなあ、カタギリ君よう」出来るだけ真面目な表情をつくりながら、俺は右手の指を二本立てる。「一つ、カタギリ君の目的は何か。そして、もう一つ、カタギリ君と甲斐谷京極にはどんな関係性があるのか。この二つに答えてくれると助かる」
図書館で。
カタギリ君と友永さんは、俺の質問に対してはぐらかそうとした。
「いいだろう。答えてやる」トナカイの手綱をしっかり握ったまま、

カタギリ君は言う。「僕の目的は、甲斐谷さんの目的の完遂――すなわち、全世界にサンタクロースの存在を広めなおすこ」
「とか言うように、友永さんに指示されたのか、カタギリ君」
俺がカタギリ君の言葉を遮って言うと。
カタギリ君は、何も言えなくなって無表情のまま固まった。すかさず俺が、「嘘、つかないでくれ。俺さ、大体予測出来てるんだよ。カタギリ君には少しだけ甲斐谷京極と関係性がある。でも、少しだけだ」とカタギリ君に向けて言うと、カタギリ君は「何なんだ君は。なんだか僕の知っている春賀彼方とは別人のようだぞ」と驚嘆した。
「確かに僕にはこれと言った目的はない。数日前に友永由里と接触し、『十年前』を返すついでに言われた友永由里の指示に従っているだけだ」
だが。
甲斐谷さんとの関連性と聞かれるならば、僕はちゃんと胸を張って答えられる。「十年前、僕は両親を恨んでいた。貧乏で何も買ってもらえない。だから僕は、クリスマスの日にだったか、家を飛び出してうずくまっていた。体操座りで行儀よく。そうしていたら、あの男――甲斐谷さんが僕の前に現れて、こう言ってきた」
――「僕はね、僕が上手くいかない時、僕が悪いんじゃなくて世界が悪いと思うようにしているんだ。君はどう思う？」
俺は、甲斐谷京極がそんなことを言ったこと聞いたことがなかった。記憶がなくなっていたとしても、記憶がなくなっていなかったとしても、とにかく俺はそんな言葉を聞いたことがないという自信が何故だかあった。十年前のクリスマスは強烈な出来事のしかなかったからな。病気の俺でも忘れているとは考えずらい。実際に俺は九年前のことを覚えていなくても、十年前のことは覚えている訳だし。
「甲斐谷さんの問い掛けに対して、僕はわからないというような返

答をした覚えがある。そして僕は甲斐谷さんに誘われた。もし十年後にサンタを恨んでいるのなら、仲間に加えてくれる、と」
今、もし、聞かれたら。貧乏な家庭を築く親のようなサンタを恨んでいるかと聞かれたら。聞かれ、仲間に加わらないかと誘われたら。「僕は、迷わず否定する。拒否する。十年前のクリスマス、夜遅くに帰った僕を泣きながら抱きしめてくれた両親を、恨むなんてことは有り得ない」
「……そっか」
一気に喋ってくれたカタギリ君の過去と真意を聞き、俺は一先ず安心した。
カタギリ君はサンタを恨んでいなかった。
サンタクロース。
つまり。両親。
俺とは違って、その二つの存在を、恨み、嫌ったりすることはしなかった。友永さんの指示に従っているだけでカタギリ君自身に悪意は全くなかった。それさえわかれば、充分だ。
「ありがとな、カタギリ君。俺なんかに本当のこと言ってくれて」
「俺なんか、などという表現を使って自分を下にさげるな、春賀彼方」カタギリ君は尚も無表情のまま、俺に言う。「今の君、本気の君、本当の君……。どんな表現でもいいが、君はどうやら僕が前々から思っていた人物とは違うようだ。……春賀彼方。君はもしかして、本当に甲斐谷京極に会ったことがあるのか？」
「おう。あるぜ」
「あるのなら、教えてくれないか。君と甲斐谷京極との関係性を」
「……わかった。わかったよ」
そうだ、な。カタギリ君には言ってもいいのかもしれない。少しでも甲斐谷京極と関係性があるカタギリ君なら。今まで誰にも言ってこなかった、変身が出来るあの女性しか知らない真実を。「前に言ったよな。『十年前』って本に書かれてた内容は嘘っぱちだって」
俺は、知っていた。実際に見たから。甲斐谷京極の思惑が最後の

最後で失敗するところを、実際に見たから。
「十年前。――俺は、甲斐谷京極の思惑を最後の最後で潰したんだ」

十年前side1

十年前。

俺は、甲斐谷京極に誘われた。目的は勿論言うまでもなく――サンタの存在を街の外に広める為。本来ならそんなバカデカイ野望に俺みたいなガキが加わるべきではないとは思うのだが、そして甲斐谷京極もそう思っていたらしいので、勧誘も軽いものだったことを今でも俺は覚えている。

「春賀彼方君、だね？　初めまして。僕の名前は甲斐谷京極といいます」

それは俺が住むアパートの一室でのことだった。両親を失い、母方と父方の祖母祖父四人共既に他界していた俺は、補助金ということで結構な額を毎月貰っていた。十年経った今でも毎月貰っているのだけれど、とりあえず子供の頃の俺はそれを安いアパートの家賃と食費に使い、残った分の半分を貯金し、半分を両親の治療に使っていた。そりゃまあ学校にも行っていた。しかし、俺は、頭が悪かった。今でこそ笑い話で済む話なのだが、とにかく俺は記憶力が悪くて悪くて、何をしても上手くいかず、何をしようとしてもそれを思い出せなかった。

だから、俺は。

最終的に、自暴自棄になっていた。

「え、あの、どなたでしょうか？」

夜十一時という非常識な時間にチャイムを鳴らしてやってきた見ず知らずの男。当時の俺は確か十二歳くらいだった気がするので、いやいや例えその時の俺が大人だったとしてもその男に抱く気持ちは変わらなかっただろうが、瞬間的に俺は甲斐谷京極と名乗る男をあやしい奴と断定した。

「いやー、ごめんねこんな時間に。僕としてはもう少し遅くてもいいかなとか思ったんだけど、これ以上遅くしたら完全に寝ちゃうか

なと思ってね」
　とりあえず、まずは言っておこう。僕はあやしい者じゃない。「そこら辺を了承した上で、まずは僕の話を聞いてくれるかな」
「嫌です」
「おうっ、即決。気持ちが良いくらいの即決だね」
　条件反射的にこのニヤニヤした大人は危ない人だと判断した俺は、すぐさまドアを閉めようとした。したのだが、ドアと入口の間に男の足が挟まっていて閉めようにも閉められない。「ははは、どうだい君の力じゃ閉まらないだろう。わかったかな？　わかったら僕の話を聞い」
「うおおおお！」何だかムカついた俺がドアを閉めようとする力を底上げする際に出た叫び声。
「ふんぎゃああ！」ドアと入口に足を挟まれ悲鳴をあげるしか行動手段が無くなった男の声。「ちょ、待ってくれ、話を聞いてくれ春賀彼方君ぎィアアア！」
「うるせえ！　なんであんた俺の名前知ってんだよなんであんたこんな時間に俺を訪ねてくるんだよ！　どこで調べた、俺の個人情報！　ストーカーか！」
「ぼ、僕は、君みたいな男の子に興味なんかあぃあああ！」
「それだとあるっぽく聞こえちゃうんだけども！」
「な、無いって！　無いよ！　僕が興味があるのは、妻と娘だけだ！　だ、だから、謝るから土下座でも何でもするから力を弱めてくれあああああ！」
「……わかった。弱めてやるよ」
　そうして見ず知らずの男を開放してやる俺。涙目になりながら俺みたいな子供に対して「あ、ありがとう」と真正面で謝ってくれる甲斐谷京極という男。俺は、何だかこの男を、そんなに悪い人じゃねえのかもなとか思っちまう。何なんだろうか、この男は。
「ううむ。最初の掴みが物凄く悪いなあ。君には嫌われたかもしれないけど、でもまあ一応礼儀として僕の目的を話しておこう」

そう言い、俺の返答などお構いなしに喋る甲斐谷京極。この街の大人は皆サンタだということ。山口大津の事件を知り、それのある一部分の方法を知ることによって、事を起こそうと決めたこと。仲間を集めるにあたり、山口大津の事件による被害者の子供も誘おうとしていること。その際に、俺を含む十一人の子供の個人情報を調べたこと。山口大津の娘とやらも、仲間にいること。

サンタクロースの存在を、街の外にばらそうとしていること。

「僕らは昔からおかしいと思っていた。この街に住む大人は皆おかしいと。そして、二十二歳になった時に聞かされたこの街の不毛な真実。知ってるかい？　この街の大人はね、その真実を隠す為だけに地下空間を造り、そこにトナカイを閉じ込めたりしてるんだ」

そう言う甲斐谷京極の目は。

見ただけでわかる程の明らかな怒りを、備えていた。「不毛なんだよ、全てが。外の街の人に隠すならまだわかるけど、なにもこの街の子供にまで隠さなくてもいいじゃないか。――サンタは子供に微笑まない。何を世迷言を。微笑めない、の間違いだろう」

だから僕は復讐をする。粛清という名の復讐をこの街にする。その為に街の外に出ていき、サンタの存在をばらすんだ。「そうすればここまで臨界大勢でサンタの存在を隠す必要もなくなる。僕はね、君みたいな子供にも、出来る限りサンタのことを知って欲しいんだよ」

だから、どうだい？　出来たらでいい。僕と一緒に来て、その瞬間を見てくれないかい？

甲斐谷京極の話を聞いた後。

俺は、少しだけ沈黙した。その間、俺は、考えた。考えに考えぬいた。何をすべきなのか。どうすればいいのか。

――甲斐谷京極という男がしようとしていることは、本当に正しいことなのか？

「行くよ。行ってやる」

答えが出た。だから、甲斐谷京極に向けて言った。俺の言葉を聞

くと、甲斐谷京極は「え？」と驚き、こう続けた。「な、え？　本当に来るのかい？」
「どういう意味だよそれは！　まさか本当は俺を仲間に誘う気なんかなかったってことか！」
「いや、違うんだ！　誤解しないでくれ！　ただ、あの事件の被害者の子供の中で誘ったのが君で十人目でね。一人しか仲間になってくれなかったから」
「……まあ、そうだろうな」
突然見ず知らずの大人が家にやって来て、しかもいきなり「仲間にならないか」と言われるなんて出来事……完全にヤバイ部類に入るだろう。寧ろそれで首を縦に傾ける奴の方がどうかしてるのかもしれない。
――甲斐谷京極の作戦をぶっ潰すという目的を持った、俺みたいな人間以外だと。
子供ながらに思った。甲斐谷京極の作戦の完遂は、間違いなくやり過ぎだと。何故かはわからない。小難しいことはわからない。でも、感覚で、そう思った。俺みたいなガキがどうにか出来ることならどうにかしようと思ったけれど、どうにか出来ないと判断したらすぐに逃げようと考えた。
「それじゃ、春賀彼方君。このアパートの屋上で待っててくれるかな？　さっきさ、君みたいな年頃の男の子と喋ってたら皆に呆れられてね。先に大体集まってるから」
それだけ聞くとなんだかこの男が俺みたいな年頃の男の子を好きな人みたいに聞こえちまうのだが、俺は無視して「わかったよ」と言い、玄関の鍵を閉めて屋上へと上がった。
いつの間にか、甲斐谷京極の姿は見えなくなっていた。

屋上に着き、厳しい表情で佇む大人達とその中に紛れ込む中学生

くらいの女の人の姿を確認した俺は、その女の人に話しかけようとしたのだが、その女の人が「やってやるやってやる、父さんの過去を払拭してやるやってやるやってやる」とぶつぶつ呟いているのを聞いてしまい撤退した。俺の判断は間違っていなかったと思いたい。

「やあ、皆。待たせたね」

それから三十分くらいした時だろうか。眠気を堪えながら無言で立っていると、屋上にある唯一の出入り口から甲斐谷京極が現れた。途端、「待ってねーよあんたのことなんて」「でもホントおそーい」と弛緩するこの場の空気。なんなんだこの人達。甲斐谷京極が現れる前と後じゃあ全然雰囲気が違う。

「ごめんね皆。んじゃさ、そろそろ作戦の説明するね」

大人達の間をぬって歩き、屋上の端へとたどり着く甲斐谷京極。俺はそこを見るのが何だか物凄く嫌で気分が悪かったのだが、甲斐谷京極は話を続ける。「いいかい。今から君たちにはバラバラにわかれてもらおうと思う。今から僕がある裏技を使ってこのアパートの下に君たちの人数分のトナカイを集合させるから、それに乗ってこの街から外に出てほしい」

そこから色々いざこざがあったらしいのだけれども。

俺はこの屋上の端に立つ男という構図が気持ち悪くて気持ち悪くて。ずっと頭を抑えてじっとしていたら、いつの間にか周りの大人達もあの中学生くらいの女の人もいなくなっていて、気付くと屋上には俺と甲斐谷京極しかいなかった。

「気分が悪いのかい、春賀彼方君。でもそろそろ行ってくれないかな。早くしないと屋上からアパートの下に降りれなくなるから」

「どういう意味だ、それ」

「ふうむ。これも僕の裏技の一つなんだけど、君みたいな子供には教えてもいいかもだね」甲斐谷京極は俺の後ろにある出入り口を指差し、言う。「『ドアーズスルードア』だよ。もう少ししたら作動して、永遠にこの屋上には入れなくなるんだ」

「はあ？」どんどん痛くなる頭を抑えながら、冷静に徹しながら、

俺は甲斐谷京極に聞いた。「なんだそれ。聞いたことねーぞ」
「そりゃそうだろう。小学生があの本を読んでたらびっくりするくらいさ」
「本？」
「うん、本。『ある一つの街の技術』っていう本。作者名が書かれてない不思議な不思議な本のことさ。それには神秘的なことが書かれていた。『機械でつくられた人間』、『三人兄弟の王家の話』、『星の鳥』、『ドアーズスルードア』。そして……ふふふ。これは流石に言えないかな。これを使ってトナカイさん達を皆動かした訳だしね」
甲斐谷京極の話を聞き、訳がわからない俺は「なんのことだかさっぱりわかんねえ」と叫んだ。だけど甲斐谷京極は俺の言葉を無視し、「僕が造ったドアーズスルードアは時間式なんだよ」とか、「発動したら最後、僕も含めた全ての人が屋上に入れなくなる。証拠隠滅にはもってこいだね」とか、一人で語っていた。
どうやら甲斐谷京極は自分で自分達を褒めているらしい。――「あれ？　頭が」――それ程までにすごいものなのか、――「頭が痛い」――その、ドアーズなんちゃらって――「頭が痛いんだ」――いうのは。――「頭が痛い！　なんだこれ、なんで記憶のない場所を見て頭が痛くなるんだあああ！」
「え！　おいおい春賀彼方君！　君、まだ居たのかい！」甲斐谷京極は自分に酔っていて俺の存在に気付いていなかった。
――そして。
俺の異変に気付く、甲斐谷京極。「もう時間がないよ！　君の分のトナカイは下に居るから！　早く出なきゃ、僕の裏技使わないとここから降りれなくな」
ガチャン、と。
小さな音が、夜の屋上に響いた。
何のことだかわからずに、とにかく俺は頭痛を抑えようと切磋琢磨する。でも、おさまる気配がない。「す、すまない！　また後で

来る！　皆が僕を待ってるから、君は置いていく！　すまない！」
――甲斐谷京極の声が聞こえた気がした。な、に？　もう行く、だと？
いや。
駄目、だろ。このまま行かせるととんでもないことになる。止めないと。「止めないと、止めないと！」

「何を止めるの？　甲斐谷京極の陰謀とか？」

声が聞こえた。なんだか聞いてて心地の良い、女の人の声。聞いたことのない声だったけど、聞いていて安心感がある、そんな声。そんな声が、地面に手と足をついて顔を向ける俺の左斜め上から聞こえてきた。頭痛に抗いつつ、なんとかその声の主に顔を向けようとした。さぞ美人だろう。そう思いながら、顔をあげたんだ。
そこには。
トナカイが居た。「トナカイが、トナカイが喋って、え！　ええええ！」
「何よ、そんなに驚かなくたっていいじゃない。私が『変身』出来るのがそんなにおかしい？」
「へ、変身？」
「そう、変身。私は変身出来るの。生物限定だけどね」
「……」
世の中には不思議なことがあるとは思っていたが、まさかトナカイが喋るというシュールな出来事に出くわすとは思ってなかったので、少しの間だけポカンとする俺。
「よく来てくれたね！　さあ、行こうか！　僕の目的と、君の目的を果たす為に！」
「……うん。行こっか、甲斐谷」
そう話すと、甲斐谷京極の元へと近付こうとするトナカイさん。ちょっと待て。トナカイってことは、空を飛べるってことか。

だからこそ出来る、屋上の隔離。
だったら逆に、トナカイさんがいなかったら、甲斐谷京極はこの場所から動けなくなる。
そうすれば、甲斐谷京極の作戦を潰せるんじゃ――！
「ま、待ってください、トナカイさん！」
無我夢中だった。いつの間にやら俺は叫んでいて、トナカイさんは「え？　トナカイさんって私のこと？」といってこちらを振り向いてくれる。その表情はトナカイが故によくわからなかったが、なんだか悲しそうな表情をしているような、そんな気がした。「貴女はなんで甲斐谷京極に力を貸そうとするんですか！　外の人にサンタの存在をばらす、そんな危険なことに、『変身』なんて凄いことが出来るのに、何で協力しようとするんですか！」
俺の叫びを聞いた甲斐谷京極が「え、な、春賀彼方君！　それどういうことだい！　僕の邪魔をするつもりだったのかい！」とうろたえていたのだがそれを完全に無視した。無視をして、俺と甲斐谷京極に挟まれた位置にいるトナカイさんをじっと見つめた。
「何もないの、私には」俺の方を見ずにトナカイさんは言う。「私に笑いかけてくれる親もいない、友達もいない、生きる目的もない。一年前、私は全てを失ったの。だから、私に生きる指針を与えてくれるなら、私はそれについていくの。例えそれが、悪い方向へ進む指針でも」
「な、んですか、それ……」
いきなり、だった。
――頭が軋む。
訳がわからない、痛みによって。何によってこの痛みが生じているかはわからない。眠い。物凄く眠たい。昔から唐突に眠ることがあったような気はするんだけど、これはそれとは違う症状だった。
目を背けろ、と。
頭の中でガンガンと声が響く。ガンガンと。ガンガンと。訳がわからない。でも、響く。目を背けろと、頭の中で。

意識が朦朧とする中、何も言わなくなった俺に向けて「ごめんね」と言い、トナカイさんが甲斐谷京極へと歩み寄っていく姿が見えた。甲斐谷京極の「まあ、いっか。元はといえば無理矢理押しかけた僕が悪かったんだし、あとで助けに来るよ」という声も微小ながらに聞こえてきた。

何してる。

俺は、何をしてる。

こんな所でうずくまってる場合じゃねえだろ。何もない？　生きる目的もない？　指針があったら、どんな方向でもついていく？

――だったら！

「俺が指針を出す！　俺がトナカイさんの、指針になる！」頭の痛みに堪えながら、睡眠の欲求に抗いながら、俺は立ち上がった。「トナカイさん！　今から、俺と一緒に甲斐谷の作戦をぶっ潰して欲しい！　お願いだ！　お願い、します！」

「え？」というトナカイさんの戸惑った声が聞こえた。

「そんなの許す訳ないだろう！」という甲斐谷京極の少し焦った声が聞こえた。

構うもんか、と俺は思った。

出来るだけのことをしよう。出来るだけのことを言おう。出来るだけ、自分の何かに抗ってやろう。それくらいしか、俺に出来ることはないから。

「選んでください、トナカイさん！　俺についてくるか、甲斐谷京極についていくか！」

「なに言ってんだい春賀彼方君！　彼女は僕についてくるに決まっているんだ！」甲斐谷京極はトナカイさんに向けて叫ぶ。「なあ、そうだろう？　君は僕に会うまで壊れかけていた。だが、僕に会うことによって変われた。だから僕についてきた。なあ、そ」

「違うよ、甲斐谷」

甲斐谷京極の話を遮って、トナカイさんは言う。「壊れかけてる私なんかに指針を与えてくれる人がいなかったから、貴方について

いこうって決めたの。でも、決めてた。私、もし貴方以外に私の指針を決めてくれる人が現れたら、その人についていこうって決めてたの」

で、貴方は私にどんなことをしろっていうの？

トナカイさんは俺にそう聞いてきた。頭が痛む中での、問い掛け。よく頭が回らないので、良い指針が思い付かない。どんなことを言えば彼女がついてくるのか、わからなかった。甲斐谷京極が「ええええ！　どうしよう二人寝返っちゃうって悲し過ぎる！」と叫んでいるのが聞こえる。それをバックに、トナカイさんが、俺に近付いてくる。無言で、俺の前にやってきた。

「なんでもいいんですね、トナカイさん」

「なんでもって訳じゃないけど、甲斐谷のより良さそうだったら、私は貴方の言うことを聞くよ」

「……わかりました」俺は大きく頷き、山口大津の事件によって芽生えた感情とその流れで生まれた一つの夢を、叫んだ。「十年後！　俺と一緒に、街の外に出ませんか！」

「へ？」

トナカイさんが意味わかんないというような首の傾げ方をする。

「どういう意味？」

「俺は、両親とサンタが嫌いなんです！　俺だけ放って、勝手に植物状態になって！　揚げ句の果てにサンタだった！　サンタってなんだよ！　意味わかんねえ、訳わかんねえ！　何でそんな重大なこと隠したまま、俺を放って、植物状態になんかなったんだよ！」

「……私と同じ」

「え？」

「あ、え、てことは、君は、サンタとかこの街のことを恨んでるからこの街を出たいってことなのかな」

「そう、です！」若干トナカイさんの口調に乱れが生じたような気はしたが、気にせずに勢いに任せて喋る。

「じゃあ」依然首を傾げながら、トナカイさんは俺に尋ねる。「何

で、十年後なの？」
「十年ありゃ考えが変わるかもしれないでしょうが」
「え？　どういう……」
どういう意味？
そういう風に聞こうとしたんだろう、トナカイさんは。俺に向けて。でも途中で聞くのをやめてくれた。その後じっと考えて、「そっかあ」と納得してくれた。羞恥で顔を俯ける、俺を見ながら。
十年あれば、人間なんて変わると思うんだ。
父さんや母さんやサンタが嫌いなんていうこの馬鹿げた考えも、いつの間にか風化して、どうでもいいことになっていると思うんだ。
だから、それまでは。その感情を手に入れるまでは、生き続ける。
――そういう『指針』を示せば、トナカイさんはきっと何も目的がない状態で生き続けるなんてことはしなくなるんじゃないのか、と。
ただ。
俺は、思っただけなんだ。
「いい、と思う」
トナカイさんはいつの間にか俺の左横に居て俺と同じ方向を向いていて、つまりは、完全に甲斐谷京極と対峙する体勢になっていた。
「少なくとも、甲斐谷のよりいい。全然いい。私、貴方についていくよ」
「え、え！　ちょっと待ってくれ、僕を置いてかないでくれ！」甲斐谷京極がトナカイさんに向けて焦った口調で叫ぶ。「僕の分のトナカイは用意してないんだ！　というか、僕の分までトナカイが残ってなかった！　だ、か、ら！　今、君に離反されると非常にマズイんだよ！」
なんだか本気で焦る甲斐谷に対し。
トナカイさんは、「アハハッ」と返した。
「ふっふーん。寝言は寝て言おうね、おじ様」
じゃあ、行こうか。私の背に乗って。
トナカイさんにそう言われたので、俺は言われるがまま茶色い毛

だらけの背中に頑張って乗った。もじゃもじゃするなあおいと思った瞬間、俺ごと浮遊する。「うわあ！」「大丈夫大丈夫。安心して私の背中の毛を掴んでて」というやり取りをした後、俺とトナカイさんは屋上から街の空へと飛び出た。徐々に見えなくなる屋上。自然、頭痛がおさまってくる。甲斐谷京極のあたふたしながらこちらを指差す姿が見える。俺とトナカイさんはそれを見て、笑って。

「んじゃさ、どうやって甲斐谷の作戦を潰そうか」

――肝心の話へと、移ろうとした。

考えはあった。大体予測しているから。恐らく甲斐谷京極はあの場から動く裏技とやらを持ち合わせている。焦ってはいたが、多分あれは演技だろう。いや、もしかして本気なのか。ううむ。そんなことは流石にないとは思うけど、甲斐谷京極のことだから有り得るかもしれない。

まあ、とにかく。

トナカイさんにやって貰いたいことを、言わないと。「今から、俺を何処かに降ろしてください。そんでもってその後に、お祖母さんが乗ったトナカイに『変身』して欲しいんです」

「なにそれ、どういうこと？」

「恐らく甲斐谷京極は少ししたら俺達と同じように上にあがってくるでしょう。そして街の外へ出て、仲間のあの人達と鉢合わせする。そしたらもうおしまいです。彼らは一斉に、街の外へと出ていくでしょう」

「うん」

「だから、先手をうつ」

この時、俺は頭の端で何かが迫ってくるのを感じていた。それは、屋上の時にいた時に聞いたガンガンという音を響かせながら、迫ってきていた。

強制的な睡魔、というやつなのかもしれない。前々から突然意識が途切れることはあったけども、こうして前兆をはっきりと確認できたのは初めてだった。「先手をうつしかない。多少の犠牲は仕方

がないです。多分、もう避けられない。だったら、被害は最小限にするべきです」
「……そっか。貴方が言いたいことがわかったよ、私」夜の空の風を感じながら、電気がパラパラと灯っている街を見下ろしながら、トナカイさんは言う。「先にサンタの嘘の正体をばらしちゃうんだ。お祖母さんみたいにそんなに動けない人がサンタっていう風になったら、サンタの名を借りた偽物が現れなくなるもんね」
「ありがとうございます、理解してくれて」
「却下」
「うえええ！」てっきり今の流れは承諾の流れだと思っていたので、睡魔もドン引きするくらいの驚愕を覚えた。「え、駄目ですか！　結構良い作戦かなって思ってたんですけど！」
「うん、作戦自体はいいよ。もっと他にも良いのがあるかもしれないけど、もう時間ないから思い付けないし」
　でもね、そういうんじゃないの。そういう意味じゃないの。「年頃の女に対してお祖母さんになれっていうのは、ちょっと失礼じゃない？」
「……」
　もう沈黙するしかなかった。この土壇場でいきなり何を言い出すかと思ったら、何のこっちゃ。年頃の女がトナカイに変身するのはよくても、プラスアルファでお祖母さんに変身するのは駄目なのか。
「あー、じゃあ白髭のお祖父さんでお願いします。それも若作りしたお祖父さんで」
「オッケー、それならいいよ。最年少の国家錬金術師みたいに真っ赤な服着たお祖父さんプラストナカイに変身したげる」
「ありが、とう、ござい……」
　緊張感が途切れたから、だろうか。
　さっきまで遠ざかっていたと思っていた睡魔が、ガンガンと音をたてながらやってきた。や、ばい。このままだと寝ちまう。駄目だ。駄目、だって。ちゃんと、御礼を言わないと。俺はまだ、この人の

名前も知らないんだぞ。
「ねえねえ。貴方、春賀彼方っていうんだよね？　じゃあさ、カナタって呼んでもいいかな？　いい？　ねえ、カナタ。あれ？　カナタ？」
何だかトナカイさんの声が遠く聞こえる。今、俺はどこにいるんだろうか。上空か、地上か。それすらもわからない。ガンガンという音が酷くなってきた。
俺は。
とにかく、伝えたかった。「サン、タのこと、お願いします。また、会いま、しょ……う……」
「え、また会いましょう？　うーん、わかった。でもすぐ再会じゃつまんないよね」
何か言ってる。
トナカイさんが何かを言っている。
「じゃあ私、五年くらい経ったら、決まった間隔で私が嫌いな漫画を貴方に貸すね」
なんでそんな虐めみたいなことするんですか、と聞こうとした。
聞こうとしたけど、聞けなかった。

そして現在　十三

「潮時ね、カタギリ君」
十年前の記憶を洗いざらい喋った俺の耳に、聞いたことのある声が聞こえてきた。凛とした女性の声。この口調。
間違いなく、ツチクラのものだった。
「は？」
だが、どこにいる？
ツチクラがどこにいる？
十一年前も十年前も、この屋上で決着がついた。山口大津、甲斐谷京極。十一年前の事件によってトラウマと化した場所だったのだが、十年前の事件によってこの場所は希望と化した。ここに行けばあの女の人に会えるかもしれねえ。そうだそうに違いねえ。入ろうとしても、銃弾をぶちかましてもびくともしないドアーズスルードアの効力により、入れなくなっていたこの屋上だけど。なので、新美教官から『俺が住むアパートは屋上まで昇れる』と聞いた時、一体全体この人はいつの話をしてるんだと思ったことはなんとか記憶に残っている。
ああ、そうか。
俺は、友永さんの瞬間移動によって屋上に来れたのか。「え？てことは……新美教官って、どこまでこの展開を予測してるんだ……？」
「いきなり何言ってんのよ。恥ずかしいったらありゃしないわ」
「……」
やはりおかしい。どう考えてもツチクラの声がする。でも待ってくれよ、この場には俺とトナカイとカタギリ君しか居ないんだぜ？
てかトナカイって。街の人達にばれてなきゃいいけど。
「うん？　トナカイ？」
ここで俺は、ふと、気が付いた。

最初にカタギリ君を見た時に思い浮かべた疑問。
サンタでもなんでもないただの大卒でしかないカタギリ君が――何故、十年前の教訓を反省し、サンタしか乗れなくなったトナカイに平然と乗っているのか。
その疑問に対する、答え。「変身……！」
「そのとーり」軽い口調でトナカイが喋る。トナカイが喋っていた。トナカイの口で、ツチクラが喋っていた。カタギリ君に対して「ごめん。降りるね」と言い、その言葉通りにふわりと屋上に降り立つトナカイ。「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーんって感じかしら。隠してごめんなさい」
「な、ななななな！」
ツチクラが。
あの、どぎつくて執拗に俺を責め立てる、ツチクラが。
「俺に、謝っただと！」
「「そっちじゃないだろ」」
「すんません」
カタギリ君とツチクラのツッコミコラボレーションというもう二度とお目にかかれないんじゃないかなという奇跡を目のあたりにしながら、俺は心の中で、ぼけるくらいしかこの展開に堪えられると思わなかったんだよと弁解する。
――いや。
思い出せるかわからないけれど、思い出せ、俺。小さな記憶の断片を集めて固めて結集させてこねて、一つの予測へと繋ぎ止めろ。
思い出すのは、七日前と、今日。
七日前。サンタ試験が開始し、サンタクロースになる為の試験の概要を新美教官から教えてもらった、ような気がする。
その後で。
ツチクラは、珍しくうろたえていたような記憶が少しだけある。いや、あれだ、あまりにも珍しくて。ツチクラのそんな姿なんて――珍しい、とかそういうレベルじゃねえ。記憶がほとんどない俺だ

が、珍しいことなら大体覚えている、筈。
と、いうことは。
あの時見たツチクラのうろたえた表情というのは、初めてみたものだということか。
――そして、今日の昼。
まだ覚えてる。大丈夫。ぎりぎり予測出来る。
ツチクラは、新美教官に伝言を頼んだ。「これ以上弱った姿をあんたに見られたくない」と。
「矛盾が生じてるぞ、ツチクラあああ！」
「な、なにがよ。いきなり叫ばないで。人として恥ずかしいわ」
「トナカイの姿でも酷い言い草だな、おい！」
いやいやそんなことはどうだっていい。とりあえず今のところはスルーだ。考えを纏めろ、俺。早くしないと記憶がなくなる。
つまり。そう、つまり。
ツチクラは――自分が変身出来るということを、隠したかったんじゃないのか？だから、七日前では、弱った姿を見せるしかなかった。弱った姿を見せる演技をした。屈辱を覚えつつもそうせざるを得ない理由が、確かにそこに存在したんだ。
と。
大声を出してツチクラを諌めていた時とは一変、真剣な表情で俺は俯く。それを見ているらしいカタギリ君は「春賀彼方。やっぱり君は、ただ者ではなかったのか」と呟き、ツチクラは「アホのくせに何真剣に考えてんのよ。アホーアホー」と空気を読まずに好き勝手なことを口走っていた。泣きてえ。でも気張れ、俺。負けるでない。「おうおうおうおう何だってんだ二人ともよう！」
「よう、じゃない。様」
「いやいやそれはきついものがあるぞツチクラさんよう！　わかってんだろ本当はお前も！　だったら黙って俺の話だけ聞いてくれ！」
「嫌よ！　絶対に嫌！」
「全くだ。君の話だけをだらだらと聞くなど洒落にならない」

「ダブルで即決拒否反応来ましたこれ！」

「うるさいよ！　三人揃ってなにほのぼのしてんのさ！」

場の雰囲気を無視して俺達三人称が馬鹿な会話の掛け合いをしていたら、突然俺の後ろから声が聞こえてきた。誰も入れない筈で、誰も居なかった筈のその場所。けれども、彼女――友永さんは右手に瞬間移動装置を携えて、俺達の前に怒った様子で現れた。「何してんの三人とも！　特に、サナカちゃんとシンヤ君の二人！　私のお膳立てが台なしじゃん！」

「いや、だがな友永由里。僕ら二人はそもそも乗り気じゃなかったんだ」

「そうそう。私は違う目的があったから協力したけど」

「言い訳無用、裏切り者は黙ってて！」

どうやら友永さんは本気で怒っているようだった。

というか、そうか。

これで新美教官のヒントが繋がった。何が目的かはわからないが新美教官が友永さんに全てを話し、友永さんがカタギリ君に作戦の内容を伝え、カタギリ君がツチクラにこの作戦の内容を伝える。そうして出来た脆い繋がりが、俺を省いた四人の繋がりという訳か。

だから友永さんは、二人に裏切られた。

「もういい！　もういいもん！　色々な衝撃的事実でハルカ君を精神的にぼこぼこにしてから私の作戦を決行したかったのに！」

もう、いい！　最初から人に頼るのが間違いだった！　「私の作戦を決行する！　私の復讐を決行する！　誰にも何にも、文句は言わせないんだから！」

そう叫ぶと、友永さんは右手を大きく高く掲げ始めた。その手の中にあるのは瞬間移動装置。何人かの人達を一度に瞬間移動することが出来る装置。『ある一つの街の技術』という本にしか書かれていない、神秘の技術。

――裏技。
ふと。
俺は、ジーパンのポケットの中に何かが入っていることに気が付いた。何でかはわからない。しかし俺は何の躊躇いもなくそれをポケットから引き抜き、友永さんに見せた。
「な、何よそれ！」と友永さんは叫ぶ。
「見ればわかるだろ」と俺は返答した。「ボイスレコーダーだ。単なるボイスレコーダーだよ」
「わかってるってそんなこと！　私が言いたいのはそういうことじゃ、ない！」
そう言うと、何か覚悟を決めたような顔をして。
友永さんは俺達三人を見ながら、俺だけに言う。「今から私は瞬間移動装置を使って、十年前の反抗グループを牢屋から連れ出す！　そして、その人達にどうしたいのかを聞いて、その人達の思った通りにしてあげるの！　瞬間移動でトナカイだって出し入れ自由！　あ、安心して！　使ってないトナカイはドアーズスルードアで隔離してあるから！」
「……友永さんさあ」ボイスレコーダーを友永さんに突きつけつつ、俺は毅然とした表情でいう。ツチクラトナカイは白い煙を出しながら元のツチクラに戻り、カタギリ君は無言でその場の展開を眺めていた。「そんなにペラペラ手の内喋って大丈夫なのかよ。おまけに、その、目的ってやらもだ。いいのか、俺達に教えちまって」
「ふん、いいもん！　私は私のやりたいようにやる！　私は復讐がしたい！　だから、私は！　春賀彼方に復讐するの！」
「その結果、友永さんが捕まるようなことになってもか」
「そんなこと、構いやしない！」
「そうか。そう、か」
だったら。
これを使うしかねえよな。
この、ボイスレコーダー。甲斐谷京極から新美教官の手に移り、

新美教官から俺の手に移ったボイスレコーダー。これに何が録音されていたのかは殆ど覚えていない。それ程重要な内容は入っていなかったってことなのか。
いいや。違うね。
これを再生すればそれで全ての幕が閉じると、俺の中の本能ってやつが確信していたからだ。「……ほら、おしまいだ。これで全て、終わる」
「何言ってんのさ、春賀彼方っ！」
ポチッと。
軽く、音声再生の為のスイッチを押した。

――『これを君に託したのは他でもない。春賀彼方君。新美麗子のように横入りではなく本当の意味で僕を追い詰めた君なら、必ず届けられると思って託したんだ』

ボイスレコーダーから。
十年前と変わらずにカリスマ性を兼ね備えた声を出す、すっかりおっさんと化した甲斐谷京極の声が流れ始めた。
「この声は甲斐谷さんか。変わらないな、あの人は」と言って昔の思い出に記憶を馳せるカタギリ君。
「ふっふーん。けったいなおじ様だこと」と遠回しになんか小馬鹿にしているツチクラ。なんだかあの女の人に似ている気がしたが、気のせいか。
「ははは。どうよ、友永さん。参ったか」と小声で勝利宣言をするのが、俺。
――そして。
「お父さん！　お父さんお父さんお父さん！」と俺が手に持つボイスレコーダーに泣き付いてきたのが、友永さんだった。
『いいかい。手短かに言わせてもらうよ。新美麗子から聞いたんだけど、僕の娘がそろそろ何かを起こそうとしているらしい』

尚もボイスレコーダーからは甲斐谷京極の声が流れ続ける。友永さんは俺の手からボイスレコーダーを奪いとり、「うおっ」と反応する俺を無視して「お父さんお父さんお父さん！」と叫びながらボイスレコーダーを耳にあててていた。

甲斐谷京極。

友永由里。

二人の繋がりは、『ある一つの街の技術』という本だけだと思う人もいるだろう。確かにそうだ。これだけみたらそう思うのも無理はない。

しかし、十一年前と十年前の繋がりがある。山口大津と甲斐谷京極という一見したら何の繋がりも見つからなさそうな関係性。

けれども、二人には、れっきとした繋がりがあった。

それは――二人共既婚者であり娘がおり、二人共なんとか家族に迷惑をかけないよう犯罪に手を染めようとしたっていう繋がりだ。

まず初めに行動を起こしたのが山口大津だった。妻と離婚し、娘の名字を母方のものにする。そうすることによって世間の軋轢から逃れさせようと思い、結果として完全には無理だったが影響を弱めることは出来た。そこで現れたのが甲斐谷京極という男。山口大津のやり方を知り、これだと思ったのだろう。妻と別れ、娘とは離ればなれになった。

『だから、これをあの子に届けて欲しい。由里に届けて欲しい。届けた上で、このボイスレコーダーを再生して欲しい。聞こえてるかい、由里？　じゃあ言うよ。お父さんの話をよく聞きなさい』

娘は、そして。

甲斐谷由里ではなく友永由里として、この街で生きている。耳にボイスレコーダーをあてながら、地面に膝をつきながら、時折「届いてるよ父さん！　ハルカ君ちゃんと届けてくれたよ！」とか、「うんうん聞くよ！　お父さんの話、何でも聞くよ！」と叫んでいる。涙を流しながら、嬉しそうに友永さんはボイスレコーダーの先にいる相手と話していた。

その様子を見ながら、すっかり安心しきった俺達。
「なんというべきだろうか」
「そうね。どうましょうか、この状況」
「ううむ。ま、あれじゃね」
カタギリ君。
ツチクラ。
そんでもって、俺。
三人勢揃いで、こう呟いたのだった。
「サンタ試験、どうしよう」

そして、現在、そして

「と、いう訳だ。聞いてるか、春賀彼方受験生」
気付くと目の前が明るくなっていた。ここは何処なんだいと思って周りを見渡してみたら、ここはどこかの小学校だった。何故だか来たことがあるよう気がするか気のせいだろうそうに違いない。なんだかツチクラやカタギリ君が隣に居た気もするが、きっと、気のせいさ。
グラウンドの中央に、俺と新美教官は向かいあっていた。俺の視線の先には四階建てくらいの校舎があり、その視線を日光が阻もうとする。さっきまで暗闇の中の屋上に立っていた俺は、その明るさから思わず立ちくらみしてしまったが、なんとか立て直すことに成功。「はい？　なんですか、これ。すいません新美教官。どういう状況で」
「私がお前の病気を知ったところで私がお前への対応を永久に改めたままだとでも思ったのかこの野郎！」
「へァッ！」
色々あったけど、結局、新見教官との関係性は変わらないらしい。嬉しいよな、悲しいような。何とも言えないような、何とも言い難いような。
ん？
いや、ちょっと待て。今、何日だ。最終的に何がどうなったんだ。あれ？ツチクラは、カタギリ君は、友永さんは、「サンタ試験はあああ！　わあああああ！　ヤバイ！　新美教官、今日ってサンタ試験何日目ですか！　友永さんとかどうなったんですか！　教えて下さいお願いしますよろしくお願いします！」
「一応私は一通り話してやったんだけどな。なのにお前はもう一通り話せと。結構長くなる話なんだけどな、あぁん？」
「……すいません」

「ふう。まあ、良しとしよう」意外な程あっさり引き下がってくれた新美教官。「ただし、御礼はちゃんとしろよ」
「あ、はい！　わかりました必ず御礼をしてみせます！」
「へっへっへ。言ったな？　ちゃんと録音したぜ、私は」
不敵に笑うジーパンのポケットから抜かれた新美教官の右手の中には、どこかで見たことがある黒いボイスレコーダーがあった。「これでお前が忘れたとか抜かしやがってもしらばっくれるなんてことは許さねえ。地の果てまで追い続けてやる」
「怖すぎなんですけどその言い方」
「しかもお前は体よく忘れてくれるからなあ。この一言だけで何十回でも何百回でも御礼をせびれるって訳だ」
「俺限定での新手の詐欺商売がここに誕生！」
「まずは、そうだなー。最近ポリスウーマンに憧れるんだよなーっと」
「コスプレの衣装を俺に買いに行かせようとしてるんですか新美教官は！」
「おうよ。でも今はいいや。おいおいな、おいおい」
俺は新美教官に対して「おいおいおいおい！」と叫び倒してやりたい気分になったのだが、なんだか冗談じゃ済まなそうだったのでやめておいた。やっぱりこの人こええよ。無条件に怖い人ってこういう人のことを言うんだと思う。ポリスウーマンか。スケバンとかなら似合いそうだけども。
「さて。んじゃ、ぼちぼち話すとしようか」また話すのかよめんどくせーなーとため息をつきながら新美教官は話し始める。「春賀彼方受験生。まず、お前は何を知りたい。それから話してやるよ」
「サンタ試験はどうなったんですか！」俺が真っ先に聞きたいことは、まずこれだった。
「あー、大丈夫だ。今は七日目の午後二時だからな。まだ十時間くらいあるからよ。そこんとこは安心しとけや」
「……よかった」

とりあえず胸をおろす俺。肩の荷が半分おろした気分だった。
そう、だな。
じゃあ後、この半分だけ残った肩の荷をおろさねえと。「新美教官。友永さんは、結局どうしたんですか」
「ああん？　友永由里のことか？」しゃあねえなあ教えてやるよ、と前振りをしてから語りだす新美教官。「捕まったよ。あいつは、捕まった」
「そう、なんですか」大体予測はしていたが、悲しいものがあった。
「まあ、お前の予測通り、友永由里は甲斐谷京極の娘だ。彼女は十年前から父親を憎んでいた。そりゃそうだ、なんせいきなり父親がいなくなったと思ったらすぐさま犯罪者になってんだからな。これで、おかしく思わない方が、おかしいってんだ……」
新美教官はこの部分だけ、感慨深く話した。そうか。新美教官と友永さんの境遇は、ほとんど一緒なのか。違うところは、――いや、考えない方がいいなこれは。なんだか嫌な予感がする。
「でもな。友永由里は、憎むあまりに父親のいない寂しさまで人一倍感じちまった。そのせいで友永由里は重度のファザコンになっちまったのさ。ま、それでも一度も牢屋で面会しなかったってのが友永由里の屈折したところなんだろう。私にゃよくわからんがね」
言われて思い出す、友永さんの様子。友永さんは泣きながら耳をボイスレコーダーに押し合てていた。そうだったのか。あれは十年ぶりくらいに聞いた父親の声だったのか。そりゃ泣きもするのかもしれない。
屈折した父親への愛情。
その先にたどり着いたのが、『ある一つの街の技術』という本と、新美教官が書いた『十年前』という本だったってことか。
「友永由里と私が会ったのは今年の一月の半ばだったよ。古本屋で漫画の立ち読みしてた時だったっけな。「私は私のしたいことをする！　新美麗子！　お父さんの仇！」とか叫んできてよう。なんのことだかわからなかったから、とりあえず軽く五、六発、腹に叩き

込んでやった」
「容赦ないですね新美教官！」
「いやあ、漫画の影響でなあっはっは」
「笑い事じゃないですよそれ！　新美教官は漫画を読んだら駄目ですいつか絶対死人が出ます！」
「それでもいい！　例え他人がどうなったとしても、漫画が読みたい！」
「畜生俺も同じ意見ですよ！」
「同じ馬鹿野郎だな、私達は！」
「漫画という表現媒体においてですけどね！」
なんだか奇妙な組合が誕生してしまった。またまたぁ。話が脇道に逸れてますよ新美教官アッハッハ。あー、漫画読みてえ。サンタ試験終わったら漫画を読みに行こう。
多分、それは合格祝いになる。
何故なら俺は、この七日間でサンタ試験の攻略法を予測出来たからだ。「で、なんやかんやで友永さんをなんやかんやした新美教官は、友永さんとどういう話し合いをして仲直りしたんですか」
「ん。ただ一言二言、「私じゃねえよ甲斐谷京極の思惑をぶっつぶしたのは。春賀彼方ってやつなんだよぶっつぶしたのは」って言っただけだ」
「何してんですか新美教官！」少し涙目になりながら、俺は新美教官に発言した。「なに、簡単に、俺を、売ってるんですか、あんたは！　かばってくださいよ、売らないでくださいよ！」
「……あー、すまねえ。友永由里が私を復讐の相手として間違えたまま復讐したとして、それが果たして良いことなのかわからなかったからよ。本当のことぶっちゃけちゃった方がいいのかなとか軽く思ってた。迷惑かけたんだよな？　すまねえ」
「いや、あの、謝ってくれるならいいんですよ」
こんなにしんみりした新美教官は初めてだったので対応に困る。この人、謝る時はちゃんと謝ってくれるんだよなあ。

ううむ。
この雰囲気なら言ってもいいのだろうか。わかんねえ。わかんねえけど、なんかここでしかもう言っていいタイミングが無い気がする。
そう。
――十年前の、疑問。
「何で、新美教官は、横入りして甲斐谷京極を捕まえたんですか」
この疑問を聞いて。
新美教官がグッと唇を噛む姿が目に入ったが、俺はそれを見ながら追い撃ちをかける。「そもそも、新美教官は十年前のあの日、何をしたんですか。何をして、結果として甲斐谷京極を捕まえたんですか」
「……」
俺の知ってる中で、初めて。
完全なる沈黙の状態に、一時的だが新美教官はなった。「私、は。トナカイが一匹余っていることに気がついた。瞬時に、お前のトナカイだと悟った。あの場に子供がいたのは珍しかったから、よく覚えていた」
「はい」
「私、は。その日、手錠を家に置き忘れていたことに気がついた。甲斐谷京極を捕まえようと勇んで買った折角の手錠だよ。すぐに取りに帰ろうと思い、だけど私はためらった。そうだ、この余ったトナカイに運んできてもらうのはどうだろうって思ったから。そして、迷っていた私の前に――喋るトナカイが現れた」
「……ええ」
「そいつは私にこう言ってきた。今すぐこの人を何処かに運んで、安全なところならどこでもいいからってな。意味わかんなかったよ。だが、頼まれて無視出来る程私も出来た人間じゃなかった。それで思い付いた。余ったトナカイに運ばせればいい。そのついでに手錠を持ってこさせようって。煙りをあげて赤い服着たお祖父さんを背

中に乗せたそのトナカイは、私なんか目もくれずに飛んでいった」
「……」
「まあ、こんなとこだ。私はその場所でトナカイが来るのを待ったけど、待ち切れなかったから速攻で警察を呼んだのさ。で、残ったトナカイに乗って私はアパートの屋上にたどり着く。そこには、「もう、おしまいだ。瞬間移動装置が故障した。あと少し早く行動に移してたら瞬間移動装置なんて関係なかったのに。僕らの野望は、もう、ついえた。春賀彼方君のせいだ」とかなんとか言って憔悴してる甲斐谷京極がいた。私は甲斐谷京極を内部から追い詰めた人間として高い評価を受けた。それだけ、だ」
新美教官は。
土下座をしていた。「すまねえ！　そうだよな、お前はなんにも悪いことはしてねえ！　なのに私はお前の手柄を横取りして、その上友永由里を押し付けた！　私はそんだけの人間だ！　謝っても意味なんてねえのはわかってるが、謝らせてくれ！　すまねえ！」
「……顔、上げてください、新美教官」出来るだけ朗らかな感じで言う俺。「新美教官らしくないです。いいんですよ、俺は別に。ただ、少しの御礼が欲しいなあと」
「なに、を、言って」
「そうですね。やっぱりあれが欲しいですね」そう言うと、俺は涙目になっている新美教官に掌を太陽に開いた状態で向ける。「甲斐谷京極と新美教官と俺の声が入ったボイスレコーダーを、俺に下さい。それでちゃらにしましょう」
「な！　おま、気付いてたのか！」
明らかに狼狽する新美教官を見下ろす俺という構図を少しだけほんの少しだけ楽しみながら、新美教官に言う。「思い出しましたよ。友永さんに向けた甲斐谷京極の『頼むから罪をおわないで、僕に会いに来てくれ』っていう声の後に録音してくれてましたよね。いつの日か俺に教えてくれた、新美教官のヒントの数々を」
半分寝ていて半分起きていた間、何度も記憶を失った。その度に

ポケットの中にあるボイスレコーダーに手が届き、その度に再生した。そこには甲斐谷京極の友永さんに向けた言葉と、後で入れたのだろう――新美教官のヒントが新美教官の声で録音されていた。

『友永由里と片桐真哉が昨日の昼、接触』、『片桐真哉と土倉佐中が昨日の夜、接触』、『友永由里と私が、昨日の深夜、接触』。――この三つのヒントによって、四人の関係性を大体予測出来た。

『お前のアパートは屋上まで昇れる』――このヒントによって、友永さんが瞬間移動装置を使って俺をアパートの屋上に連れていくことが予測できた。まあ、これは後々わかったことなんだけどな。

それで、だ。

残る一つのヒント。――『トナカイはおおっぴらに飼われている。基本的に小屋の中に居る』というもの。

思い出す、十一年前や十年前、ここ七日間の記憶。てかよく覚えてるな、俺。逆に記憶保持能力に長けてるんじゃねえのか。

あ。

もしかして。

俺個人としてはもしかしない方がいいのだが。

もしかして俺は、俺なりに必死になってたんじゃないのか。

サンタになる為に。サンタクロースになる為に――。

一日目。子供を連れた母親が子供の前でサンタの存在を示唆した。しかし、何のお咎めもなかった。

二日目。カタギリ君が、『ミニスカサンタご奉仕キャンペーン』という本を読んでいる最中に、四月からサンタ試験は始まるという情報を得ていた。つまり、今行っているサンタ試験はブラグ。全くの嘘である可能性も、否めない。

十一年前。十年前。まだサンタの存在が街の外の人達にばれていなかった時代。山口大津と甲斐谷京極は、言っていた。

「サンタは子供に微笑まない」

サンタが子供だとみなすのは、自分の子供ではなく、世界中の子供達のことだ。
サンタは子供に微笑まない。街の外の子供には、微笑まない。そんな姿を見られたら、サンタの正体がばれてしまうから。「子供に見られたらサンタ失格なんだ。だから、サンタは子供に微笑まない。そんなことをしても意味がないから」
この街のトナカイは普通に見ることが出来る。この街の子供は、サンタの正体が――大人だと――両親だということが容易にわかるようになっている。
「へっへっへ。いつの間にかサンタ試験が始まってんじゃねえか、春賀彼方受験生」
いいぜ、後でボイスレコーダーは渡してやる。私なんかが教官でよければ、全力でお前の記憶を繋げて予測した結果を私にぶつけてこい。「失敗したっていいさ。あがけばいい。それでいいんだと、私も思いたいしよ」
「……じゃあ聞いてください。お願いします、新美教官」涙を流したあとのせいか、頬を朱く染めた新美教官がグラウンドであぐらをかきながら笑顔で俺の答えを聞いてくれる。「サンタは子供に微笑んじゃいけないんです。だからサンタは、街の外の子供に微笑んでるのがばれた時、そこでおしまいなんですよ。それに伴い、サンタは子供の前に姿を表さない。俺はこう思います、新美教官。――サンタが『変身』なんて高等技術を使えなくても、別にいいんだと」
「正解だよ、春賀彼方受験生」ニシシッと笑い、新美教官は軽い拍手をしてくれた。「これで三人目だ。土倉佐中受験生、片桐真哉受験生、春賀彼方受験生……お前ら三人とも、合格だ」
「え？　二人とも俺と同じ答えを？」
「うんにゃ、違うね。面白いことに、お前ら三人全員、違う答えを出しやがった」
そもそもな、この試験は答えのない試験なんだ。「『変身』なんてスゴ技、人間なんかに出来る訳ねえだろ。そう、だからこれは、

『答えのない問題に対してどう対処するのか』を問う試験だったんだ。
片桐真哉受験生の場合、本当の本当にあいつは訳がわからなかっただろうな。なんせお前と土倉佐中受験生と違って、変身なんてものを見たことがない。だから最初、あいつは逃げようとしていた。試験に答えることから逃げようとした。だが、二日目だ。片桐真哉受験生は春賀彼方受験生と出会い、競い合う仲間って奴の存在を確認した。逃げることは許されなくなったって訳だ。あいつは正々堂々、「変身なんて出来ません」って言ってのけたよ。勿論、合格だ。
土倉佐中受験生の場合、逆に答えがある試験だった。簡単なこった、私の前で白髪の老人に変身してみせればいい。しかし、それはできないことだった。お前が居たからな、春賀彼方受験生。土倉佐中受験生は春賀彼方受験生に変身のことをばらしたくなかった。だが、七日の間にいくつかのネタバラしをする決意を固めて、最終的に土倉佐中受験生は私の前で白髪の老人に変身してみせた。勿論、合格だ。
春賀彼方受験生の場合。お前はもうグダグダだったな。脇道それていろんな場所を行ったり来たり。けれども、なんやかんやでヒントを着実に自分のものにしていった。失っていく記憶もなんとか留まらせてな。途中ヒヤヒヤしたもんだが、最終的にお前は「サンタは変身する必要なんかない」っていう答えを出した。勿論、合格だ。
お前ら全員合格だ！　私は胸を張って、お前らを本来の試験へと送れる！」
「……はい？」なんか今、物凄く不吉な言葉が聞こえた気がした。いやいや。予測はしてたけど、まさかだよなアハハハハ。「やっぱり、俺達が必死こいてやった試験は、本来の試験とは別の試験なんですか」
「おうよ！」
「あああ、そうですか……」落胆するリアクションをしてみせる俺。「あらかじめ説明して欲しかったです、新美教官」

「ふっふっふ。それは無理な相談だな。なぜならこれは、私が独自に調査した結果編み出した、所謂サンタ試験を受けさしても大丈夫なのかを調べる試験だったんだからよう」新美教官は含み笑いの状態でいう。「お前ら三人が学校の成績トップスリーってのは嘘だしな。誰一人そんな位置にはいねえよ」

「トップスリー？　それがなんの話に繋がるんですか？」

「……まあいい。とりあえず、次だ」そう言うと新美教官は一度ため息をつきつつも、俺を真正面に見据えてきた。「私は調べたんだ。甲斐谷京極と関係性がある奴らを。そしたら四人浮かび上がった。一人……友永由里はまあ個人的になんとか判断するとして、残り三人は私の力だけじゃ判断しきれないと判断した。そこで思い付いたのが、仮サンタ試験ってやつなんだよ」

「仮、なんですか」

「仮、なんだよなあ、これがさ」すまねえすまねえまあ水に流してくれやと言わんばかりにへらへらした態度で新美教官はそう言い、よっこらせと立ち上がる。「でも、大丈夫だ。お前ら四人ともちゃんとサンタ試験を受けることが出来る。片桐真哉受験生が言ってた通り、四月から二十二歳以上の奴ら全員を対象にした試験すっから。楽しみに待ってろよ」

「……」

俺はもう何も言うことが出来なかった。まさかとは思ったけれど、俺達が受けたあの試験が本当の本当にサンタ試験じゃあないなんて。うわはははは。もう笑うしかねえ。「てことはあれですよね、新美教官。とりあえず俺達は四月まですることがないってことですか」

「ん。まあ、することがないならしないに越したことはねえよな」

「え？」

何だろうか、この新美教官の何かを含んだような言い方は。いや、でも、することないよな俺。それとも、何か俺がやるべきな大切なことを忘れてるってことか、もしくは俺が覚えてるほんの些細なことの中で重要なことがあるのか。「あ、そうだ。そうだった」

「お、思い出したか。よしよし、私に言ってみな」
「友永さんとかカタギリ君って結局どうなったんですかね」
「一人足りやしねえかな！」
「は？」新美教官のテンションのアップダウンの激しさにおいてきぼりをくらいながら、なんとか俺は声を出す。「もう一人っていうと、ツチクラのことですか。あいつはいいですよ。なんかあったら俺に直接言ってくると思いますし。ああ、でもそういや変身が出来るってことは話してくれなかったなあ。ツチクラのやつ、あの人と知り合いなのかもしれませんね新美教官」
「お、お前、もしかして」
何故かはわからないが体全身を震わせながら恐る恐る俺に聞こうとする新美教官。「変身とか！　漫画とか！　色々ヒントはあるだろ！　もしかしてもしかすると、気付いてないのか、おい！」
「……何言ってんですか新美教官。気付いてない訳ないでしょう」
そう。俺は、とっくの昔に気付いていた。十年前、俺に協力してくれたあの女の人。終始トナカイに変身していたせいで背格好も何もかも全く把握できなかったのだが、それはともかくとして、あの女の人は俺のすぐ近くにいた。
変身と漫画がキーワードの女の人。
そんな人は、俺の目の前くらいしか居ないだろう。「新美教官。貴女が、十年前――俺を助けてくれたトナカイさんなんですよね」
俺の言葉を聞いて、「な、え、は？」と本気でうろたえていた新美教官だったのだけど、どうせ演技なんだろう。わかってるのさ、俺には全て。全部が全部予測済みなんだよこんにゃろう。「惚けなくてもいいですよ、新美教官。俺は全部、わかってます。『変身しろ』なんて試験を出すくらいですもんね。新美教官は、ツチクラと同じく変身が出来る。プラス、漫画です。もう完全に一致して」
「なーに阿保なこと言ってんだこの思い込み突っ走りヤロウが！」
新美教官がいきなり怒り出したと思った時には既に新美教官の攻撃は始まっていて、さっきまで全然姿も見せていなかったメガホン

が何故か新美教官の手にあった。「ヘァッ！　どこから出したんですかそれ、どこから出したんですかそれ！」
「ジーパンの右ポケットの中だ」
「画期的すぎるでしょうその小さい収納スペース！」
「うっせえ！　とにかく冷静になれ、春賀彼方受験生」
明らかに俺より冷静にならなきゃいけない人が依然としてメガホンを手に握っていたから文句を言いたかった。言おうとしたのだが、新美教官が放つプレッシャーに根負けして後ずさる。「重大事項から言うぞ。私は、変身なんて出来ねえ。あの試験は答えのない試験だって言っただろう。『変身』なんて出来ないことが前提だ。あんなの出来る奴、この世の中に一人だけだろうよ」
新美教官にそう言われて。
俺は、もしかしてとんでもない勘違いをしていたんじゃないかと思った。
だって、そうじゃないか。
あの女の人とツチクラとじゃ、口調も違うし年齢も違う。あの女の人は俺が小学六年生くらいの時に大人だったんだ。正直新美教官でもギリギリだと思ったのに、ツチクラなんかもっての外だろう。
――そう、思っていた。
でも。
これらは全て憶測で、何の根拠もない予測に過ぎない。口調が変わる？　十年も経ったんだ、口調なんかいくらでも変わる。あの女の人は大人だった？　違う。もしかして、あの女の人は大人ぶっていただけだったのかもしれない。
あの女の人は、俺に、トナカイの姿しか見せてくれなかったんだから。
「そん、な……！　でも、違う、ありえない！　ツチクラが、そんな、そんな！」
「どうやら私は春賀彼方受験生のことを高めに評価してたようだな」
憎まれ口をたたきながらも笑顔な新美教官。高めに評価って。今回

も前回も前々回も、他の人達に助けられてただけども。
「認めろよ。予測予測予測って、そんなので未来が全部わかったら、つまんねえよ」
ほら、行ってこい。土倉佐中受験生を探し出せ。あいつは今でもお前のことを待っているからさ。「抱きしめてやりでもしろよ。そうすりゃ土倉佐中受験生のこった、泣いて喜ぶんじゃねえか？」
「そんな殊勝なやつじゃありませんよあいつは！」
そう叫ぶと、俺は迷わず走り出した。なんてこった。なんてことだよ、本当に。あいつはネタバラしとか言って、全部俺にさらけ出してくれてたじゃねえか。俺の両親と同じように両親が植物状態のこと。変身が出来ること。他にも色々あったのかもしれない。
なのに。
俺は、ツチクラがあの女の人だなんて展開はありえないものだと最初から決めつけて、ツチクラと接していた。
「待て待て聞け聞け、春賀彼方受験生！　二人からの伝言だ！　「君には感謝する。また図書館にでも行こう」、「バーカ！　大っ嫌いだよ、カナタ君なんて！」――だとよ！　行ってこい、馬鹿野郎！」
後ろから声が聞こえてくる。メガホンによって拡大された、新美教官の声が。元々の声を普段より極限まで大きくしているのか、新美教官と俺の距離がどれだけ離れても新美教官の声は聞こえてきた。一人目がカタギリ君で、二人目が友永さんだろう。おうよ、図書館にまた行こうぜ、カタギリ君。喧嘩口調相変わらずだな、友永さん。
まあ、あれだ。
「今度、四人でどっか飲みに行こうか！」
カタギリ君が飲み過ぎてぶっ倒れて。友永さんがその様子を見ながら笑い転げて。その傍らでツチクラが何杯も何杯もビールをお代わりし。俺がそれらを見てどん引きする。
そんな様子を思い浮かべながら、俺は走り続けた。どこだ。何処だ。ツチクラはどこにいる。病院か？　否、違うな。まだ漫画を貸

してくれる日じゃねえ。あいつは病院にはいない。だったら、俺のアパートの屋上か？　んな訳ねえだろ。そもそもあそこには入れないんだ。あそこにいる筈がない。俺の携帯をポケットから取り出してツチクラの携帯に電話をかけられればよかったのだが、生憎ツチクラは携帯というものを持ってはいなかった。なので俺はあいつのメルアドも電話番号もしらない。だって持ってすらいねえんだもん。ないものにどうやって連絡しろと。

「あー、畜生！　なんで携帯持ってねえんだ、あいつは！」

ツチクラの家も知らない。そこまで深い関係じゃあねえからな、あいつとは。

だったら。

ツチクラは、一体全体この街のどこにいるってんだ。「うおおおお！」

わからなかったから。ツチクラがどこにいるのかわからなかったから、何も考えずに走り続けた。繋がりも予測も何もあったもんじゃねえ。これは、ただの、がむしゃらだ。考えなしでテキトーに動いてあがいているのと同じだ。

だけど、なぜだか不思議と俺は焦ってなかった。このまま走り続ければツチクラに会える。そんな気がして。車が俺の横を通る。草村に入る。信号を渡る。犬が俺に吠える。子供が俺を指差して「がんばって」と言ってくる。何もかもがごちゃまぜで、何もかもが繋がっていないこの世界。この街。

十一年前。十年前。七日前。そして、今。そして、未来。

これまでに色々なことがあった。そのせいで今現在において色々と不憫なことはあるのかもしれない。どう頑張っても思い出せないことがまだまだ大量にあるし、これからもそれは増えるんだろう。

過去に縛られた者。

それが俺という人間であり、これからもその人物像が変わることはないのかもしれない。

でも、そんなことは関係ねえんだ。過去なんか関係ねえ。という

か、過去のことなんか気にしている余裕もないし、暇もない。俺みたいなスペックの低い人間は、毎日を必死こいて生き抜くだけで精一杯なんだ。

だけど、俺は。

それでいいと思うんだ。

過去。現在。未来。――これらは全て繋がっている。繋がりがあるから、少しばかりの予測が出来る。なので、俺は、こう思う。

その三つの真ん中に位置する現在だけでも必死になって対応していれば、過去にも未来にもその内対応できるようになるんじゃないかな、なんて。

――いつの間にか、感慨深くなっていた。

「ぜえ、はあ、見つけたぞ、ツチクラ！」

いつの間にか。

ツチクラの前に、俺は居た。

「何よ、そんなに息切らして。興奮してるの？」

ツチクラと俺が今居る場所は、俺が見知った所だった。もう完全には覚えていないのだが、大学の卒業式の後だっけか。俺がうなだれていた時に、ツチクラが声をかけてきてくれた場所。

そんなツチクラは紙袋を二つ持っていた。右手に一つ。左手に一つ。「その中に何が入ってんだ？」と聞きたかったのだが、聞く前にツチクラが「これにはね、漫画が入ってるの」と俺に言ってきた。苦渋の決断をしている、そんな顔で。「右手には私が嫌いな漫画。左手には私が大好きな漫画。ねえ。あんたはどっちを貸してほしい？」

「んなもん当然、ツチクラが大好きな漫画を読みてえに決まってるだろうが」

「……それは、どういう意味で？　どういう考察の末、そういう結論を出したの」ツチクラはもはや俺の目なんか見ちゃいなかった。俯いて、俺の方なんか見ちゃいなかった。「私、待ってたの。ずっと待ってたの。あんたが真実を見つけて、その上で私に声をかけて

くれるのを。なのに、なのにあんたは……」
「なあ、ツチクラ！」
気付くと俺は叫んでいた。ビクっと体を震わせるツチクラだったのだが、すぐさま「な、何よ」と気丈な対応をしてみせるのが流石ツチクラといったところか。「お前は、なんで俺に嫌いな漫画を貸してきたんだ？　十年前にも聞きたかったんだ。もっと、お前と、話したかったんだ！」
だから、教えてくれ。その理由を教えてくれ。
俺はツチクラに言った。心の底から沸き上がる何かを必死になって換言しながら、言った。それを聞くツチクラは、はっとし、次第に涙目になっていく。しかしその様子を俺に見られたくないのか、漫画が入った紙袋を二つ地面に置いて、涙を服の袖で拭き始めた。
「私が好きな漫画をただただ貸してたら、私のことを思い出せないかと思ったのよ。いきなり頭が痛いとか言い出すし、いきなり私の指針になるとか言い出すし。そんな！　あんたに！　私を忘れていて欲しくなんて、なかったのよ！」
ツチクラから見て左の方にある紙袋を思いきり掴み、ツチクラは俺に「はい、貸したげるわよ！」と涙ながらに差し出してくる。俺はその紙袋を「おう。大切に読ませてもらうぜ」と言って受け取る。ツチクラは、「当たり前でしょ！　大切に大切に読まなきゃ、承知しないから！」と俺に叫び、完全に泣き始めた。「ひぐっ、ばかばかばばか！　馬鹿！　どんだけ私のこと待たせんのよ！　ふざけるんじゃないわよ！　もう、もう！」
ツチクラは泣きながら俺を殴ってきた。これがか弱い乙女とかからの攻撃ならば効果音はポカポカというようになりとてもほほえましいことこの上ねえんだろう。だけどツチクラの場合、女性とは思えない程の力を持っていたので、「すまねえって。痛いから殴らないでくれたら嬉しいんだけど」と俺は対応するしかなかった。グーはやめてくれ。せめてパーにしろ、パーに。
「嫌よ。絶対に嫌」

そんな風に思っていたら。
ツチクラが、俺に抱き着いてきた。「どんだけ私を待たせたのか、後悔させてやるんだから」
この後。
ツチクラを抱きしめ返そうとした俺の両腕が空振り。
「そうね、今からカラオケにでも行きましょうか。ただしマイクの主導権は全て私。あんたは私のビールオーダー運び係兼タンバリンね」
「俺の役割が不憫過ぎる！　それじゃあ俺が歌えねえだろうが！」
「そうよ。まあどうせあんたが歌ったところで底は見えてるんだし、ちょうどいいんじゃない？」
「……ツチクラよう。今の発言は俺を怒らせちまったぞ。いいぜ、歌ってやるよ！　俺の歌唱力を見せつけてやるぜよ！」
「何言ってんのよ。あんたはタンバリンなの。シャランシャランとパンパンくらいしか奏でられないタンバリンがどうやって歌うっていうのよ」
「この流れでも俺に歌わせてくれないんですかツチクラさん！」
こんな風にいつも通りの馬鹿げた会話の掛け合いを、ツチクラとして。
「あ、そうだ。新美教官から聞いたんだけど、あんたって好きな時に寝れないらしいわねってことで、私からの質問コーナー。もし私があんたの部屋に入ってあんたの隣で寝ようとしたら、あんたはどうなるんでしょうか」という残酷過ぎる質問をツチクラから受けたのだけれど。
それならそれで、何か事を起こさない内にとっとと寝ちまおうと決意する可能性もある訳でありまして。
何はともあれ。
色々あったけど。
そして、これから先、色々あるんだろうけど。
「覚悟しときなさいよ、カナタ」と無茶苦茶赤面しながら言うツチ

クラの姿を見れただけでも七日間の苦労は報われたんじゃねえのかなと、俺は思った。

そして、現在、そして（後書き）

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

初投稿作品にして初落選作品である『サンタは子供に微笑まない』。いかがだってでしょうか。というかここまでたどり着いてくれた方が一体全体何人なんでしょうか。

もう、とにかく読みにくい。改めて思いました。とにかく読みにくい。なんだこれ。会話文も地の分もとにかく読みにくい。

出来たらでいいんで時間があったら評価をしてやってください。今後の反省点にしたいと思ってます。

読了、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7521u/

サンタは子供に微笑まない

2011年7月14日03時15分発行